

び ふか
美 深 町

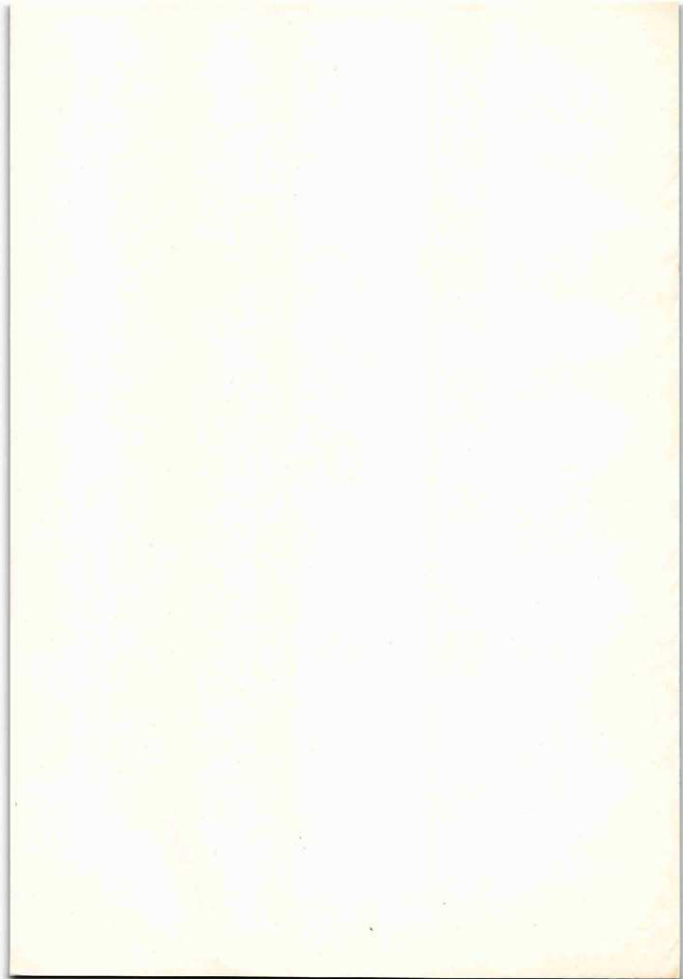
くすのき

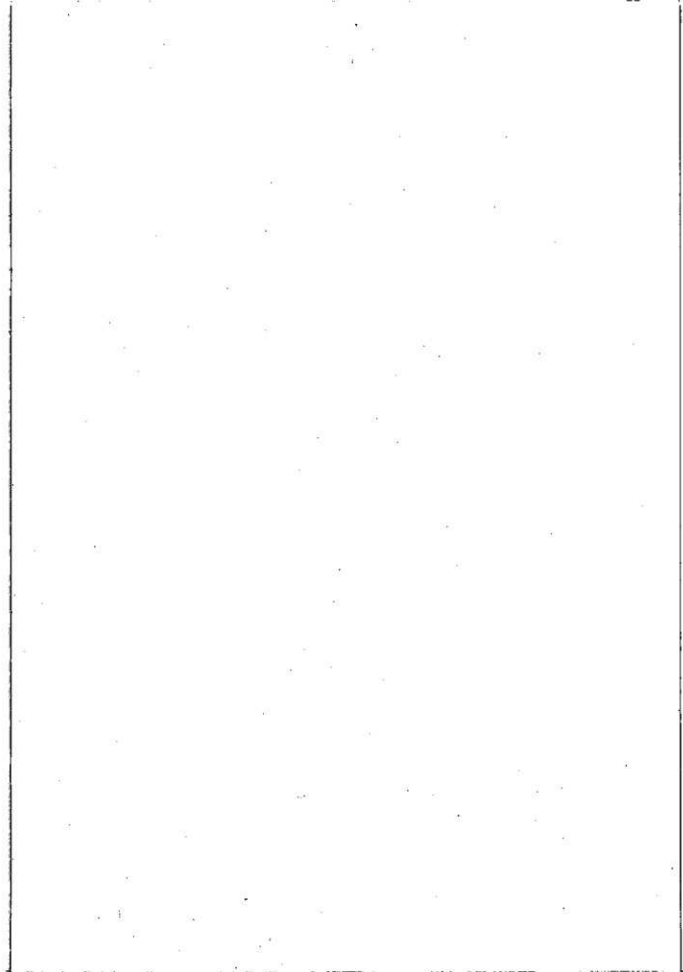
楠 遺 跡

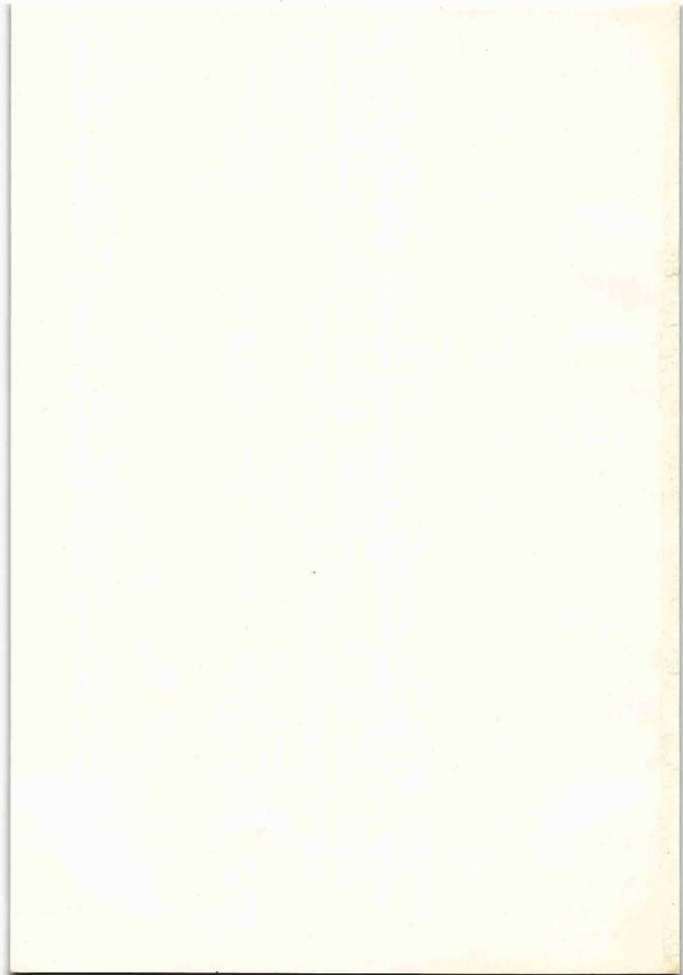
—天塩川改修事業の内楠築堤工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和 58 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







美 深 町

楠 遺 跡

—天塩川改修事業の内楠築堤工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭 和 58 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

同 画 集

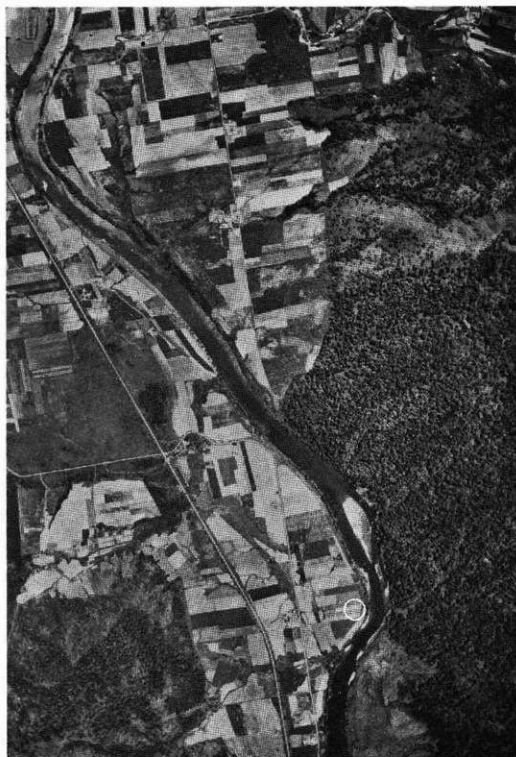
潮 影 齋

— 明治五十年から明治三十二年の間に東京で生活した作家の日記 —

東京 印刷 局

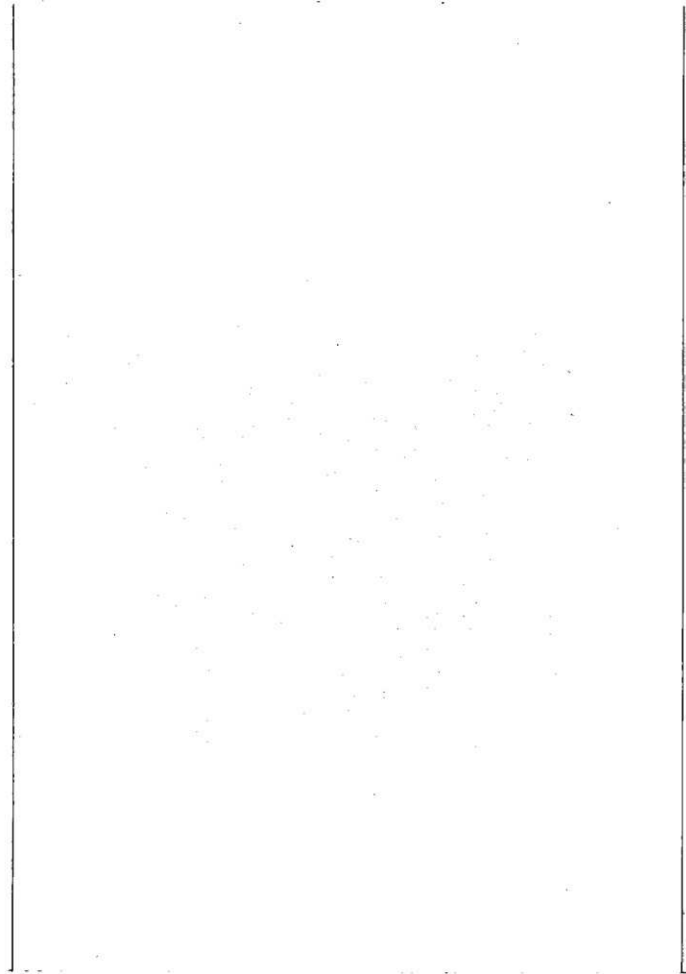
— 文芸春秋社文庫第百巻 — 入部 印刷

航空写真 (O印橋道跡)



H-37 炭化木出土状況





例 言

1. 本書は、天塩川改修事業の内桶築堤工事用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 調査は、北海道教育委員会の指示により、北海道開発局旭川開発建設部の委託を受けて、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査した遺跡は、楠遺跡(北海道中川郡美深町字楠 9-1 番地先、道教委登録番号:F22-4)である。
4. 調査面積および調査期間は次のとおりである。

昭和55年度	2,500㎡	現地調査	昭和55年 9月1日～10月31日
		室内整理	昭和55年11月1日～昭和56年 3月31日
昭和56年度	3,600㎡	現地調査	昭和56年 5月7日～ 6月30日
		室内整理	昭和56年11月1日～昭和57年 3月31日
昭和57年度	3,000㎡	現地調査	昭和57年 5月7日～ 6月20日
		室内整理	昭和57年11月1日～昭和58年 3月25日
昭和58年度	2,500㎡	現地調査	昭和58年 5月12日～ 6月30日
		室内整理	昭和58年11月1日～昭和59年 3月31日

5. 放射性炭素¹⁴Cによる年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。
6. 花粉分析は、北海道開拓記念館山田悟郎氏に依頼した。
7. 炭化材の樹種鑑定は、北海道開拓記念館三野紀雄氏に依頼中である。
8. 発掘調査・整理にあたっては、下記の機関ならびに人々の指導・助言を得た。(敬称略)
美深町役場、美深町教育委員会、名寄市教育委員会、市立名寄図書館郷土資料室、枝幸町教育委員会、市立旭川郷土博物館、小平町郷土資料館、土別市立博物館
山崎博信、氏江敏文、鈴木邦輝、長谷川功、佐藤隆広、石川 誠、宮坂義人、大沼忠春
斉藤 傑、高橋正勝、青柳信克、宮 宏明
また、本遺跡付近の開拓当時の様子については、美深町字楠 9-1 藤本 勇氏から教示を得た。

9. 本報告書の作成は、昭和58年度調査を担当した北海道埋蔵文化財センター調査第四班の鬼柳 彰・立川トマス・和泉田毅・森 秀之が行なった。

第Ⅲ章から第Ⅴ章の執筆は各調査員が分担して行なった。このほかの章の文責者はそれぞれ文末に記した。

付編4は、調査第四班長沼孝が執筆した。

凡 例

- 1, 本報告書では, 次の略号を使用した。

本文および図版 竪穴住居跡: H 土墳: P

図版 土器出土状態: P 石器および礫出土状態: S

- 2, 深鉢は, 器高24cm以上を大型深鉢, 11cm~24cmを中型深鉢, 11cm以下を小型深鉢とした。

- 3, 図版の縮尺は次のとおりである。

遺構: 80分の1, 遺物・土器: 4分の1, 土器拓本・石器・紡錘車・木器: 2分の1

目 次

I 調査の概要	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査体制	1
3 調査の方法	3
4 基本層位	4
5 調査結果の要旨	4
II 遺跡の環境と立地	8
III 昭和55年度の調査	11
1 住居跡	12
2 小括	31
写真図版	33
IV 昭和56年度の調査	49
1 住居跡	50
2 ビット	66
3 小括	67
写真図版	69
V 昭和57年度の調査	83
1 住居跡	84
2 小括	105
写真図版	107
VI 昭和58年度の調査	125
1 住居跡	126
2 小括	152
写真図版	153
VII 遺構外出土の遺物	173
1 土器	173
(1) 縄文式土器	173
(2) 擦文式土器	175
2 石器	177
写真図版	181
VIII まとめ	183
付編 1 楠遺跡における竪穴住居の内部空間利用について	187
2 楠遺跡における住居の変遷について	190

3 包含層出土の押型文土器について.....	196
4 土壌の水処理と魚類遺存体について.....	200
住居跡H-37内ピットを埋積した土壌試料の花粉化石	山田悟郎..... 203
1983年度北海道埋蔵文化財センター発掘の踏査跡に関する	
¹⁴ C年代測定結果	山田 治 209

挿 図 目 次

I-1図 橋遺跡の位置	2	8図 H-13実測図	57
2図 グリッド設定図	3	9図 H-14実測図	59
3図 遺構位置図	5	10図 H-15実測図	60
II-1図 遺構周辺の地形図	8	11図 H-15出土遺物	61
III-1図 遺構位置図	11	12図 H-16実測図	63
2図 H-1実測図	12	13図 H-17実測図	64
3図 H-1出土遺物	13	14図 H-17出土遺物	65
4図 H-2実測図	14	15図 P-1実測図	66
5図 H-2出土遺物	16	16図 P-1出土遺物	66
6図 H-3実測図	17	V-1図 遺構位置図	83
7図 H-4実測図	19	2図 H-18実測図	84
8図 H-4出土遺物	20	3図 H-18出土遺物	85
9図 H-5実測図	21	4図 H-19実測図	86
10図 H-5出土遺物	22	5図 H-19出土遺物	87
11図 H-6実測図	24	6図 H-20実測図	88
12図 H-6出土遺物	25	7図 H-20出土遺物	89
13図 H-7実測図	26	8図 H-20出土土刻片接合資料	89
14図 H-7出土遺物	27	9図 H-21実測図	90
15図 H-8実測図	28	10図 H-21出土遺物	91
16図 H-8出土遺物	29	11図 H-22実測図	92
17図 H-9実測図	30	12図 H-22出土遺物	93
IV-1図 遺構位置図	49	13図 H-23実測図	94
2図 H-10実測図	50	14図 H-23出土遺物	95
3図 H-11実測図	52	15図 H-24実測図	96
4図 H-11出土遺物	53	16図 H-25実測図	97
5図 H-12実測図	54	17図 H-25出土遺物	98
6図 H-12出土遺物	55	18図 H-26実測図	98
7図 H-13出土遺物	56	19図 H-27実測図	100

20図 H-27出土遺物	101	12図 H-35実測図	138
21図 H-28実測図	103	13図 H-35出土遺物	140
22図 H-28出土遺物	103	14図 H-36実測図	141
23図 H-29実測図	104	15図 H-36出土遺物	142
24図 H-29出土遺物	105	16図 H-37実測図	143
VI-1図 遺構位置図	125	17図 H-37炭化材出土状況図	145
2図 H-30実測図	126	18図 H-37出土木器	146
3図 H-30出土遺物	127	19図 H-37出土遺物	147
4図 H-31実測図	128	20図 H-38実測図	148
5図 H-31出土遺物	129	21図 H-38出土遺物	149
6図 H-32実測図	131	22図 H-39実測図	150
7図 H-32出土遺物	133	23図 H-39出土遺物	151
8図 H-33実測図	134	VII-1図 遺構外出土遺物(土器)	
9図 H-33出土遺物	135	2図 遺構外出土遺物(土器)	
10図 H-34実測図	136	3図 遺構外出土遺物(石器)	
11図 H-34出土遺物	137		

写真図版目次

図版1 遺跡遺景	35	図版6 H-4完掘	40
全完掘風景	35	H-4カマド	40
図版2 H-1完掘	36	H-4深鉢、高坏脚部出土状況	40
H-1カマド	36	H-4高坏出土状況	40
H-1刀子	36	図版7 H-4高坏脚部	41
図版3 H-2完掘	37	H-4高坏	41
H-2カマド	37	H-4深鉢	41
H-2高坏出土状況	37	図版8 H-5完掘	42
H-2深鉢出土状況	37	H-5カマド	42
図版4 H-2深鉢出土状況	38	H-5深鉢出土状況	42
H-2高坏	38	H-5深鉢出土状況	42
H-2深鉢	38	H-5高坏出土状況	42
H-2深鉢	38	図版9 H-5深鉢	43
H-2深鉢	38	H-5深鉢	43
図版5 H-3完掘	39	H-5高坏	43
H-3カマド	39	図版10 H-6完掘	44

	H-6カマド	44		H-15環	78
	H-6集石	44		H-15高環	78
図版11	H-7完掘	45		H-15坪と焼土	78
	H-7カマド	45	図版24	H-16完掘	79
	H-7深鉢出土状況	45		H-16カマド・集石	79
	H-7深鉢出土状況	45		H-16集石	79
図版12	H-7深鉢	46	図版25	H-17完掘	80
	H-7深鉢	46		H-17カマド	80
図版13	H-8完掘	47		H-17深鉢出土状況	80
	H-8カマド	47		H-17深鉢	80
	H-8高坪出土状況	47	図版26	P-1完掘	81
図版14	H-8高坪	48		P-1深鉢出土状況	81
	H-8深鉢	48		P-1深鉢出土状況	81
	H-8深鉢	48	図版27	P-1深鉢	82
図版15	H-12高坪胸部	55		P-1深鉢	82
図版16	調査風景(北西)	71		P-1深鉢	82
	全完掘風景	71	図版28	遺跡遠景	109
図版17	H-10完掘	72		全完掘風景	109
	H-10カマド	72	図版29	H-18完掘	110
図版18	H-11完掘	73		H-18カマド	110
	H-11カマド	73		H-18高坪	110
図版19	H-12完掘	74		H-18高坪出土状況	110
	H-12カマド・深鉢出土状況	74	図版30	H-19完掘	111
	H-12深鉢出土状況	74		H-19カマド	111
	H-12深鉢	74		H-19深鉢出土状況	111
図版20	H-13完掘	75		H-19深鉢	111
	H-13カマド	75	図版31	H-20完掘	112
	H-13炭化材出土状況	75		H-20カマド	112
図版21	H-14完掘	76		H-20深鉢出土状況	112
	H-14カマド	76		H-20高坪出土状況	112
図版22	H-15完掘	77		H-20接合資料	112
	H-15粘土出土状況	77	図版32	H-20集石	113
	H-15高坪出土状況	77		H-20深鉢	113
図版23	H-15高坪胸部	78		H-20高坪	113
	H-15高坪	78	図版33	H-21完掘	114

H-21カマド	114	図版44	H-36集石	142
H-21高坏出土状況	114	図版45	調査風景	155
H-21深鉢出土状況	114		全完掘風景	155
図版34 H-21坏出土状況	115	図版46	H-30完掘	156
H-21坏	115		H-30カマド	156
H-21紡錘車	115		H-30紡錘車	156
H-21高坏	115	図版47	H-31完掘	157
H-21深鉢	115		H-31カマド	157
図版35 H-22完掘	116		H-31高坏	157
H-22カマド	116	図版48	H-31深鉢	158
H-22高坏	116	図版49	H-32完掘	159
図版36 H-23完掘	117		H-32カマド	159
H-23カマド	117		H-32高坏出土状況	159
図版37 H-24完掘	118	図版50	H-32ミニアチュア土器	160
H-24カマド	118		H-32紡錘車	160
図版38 H-25完掘	119		H-32高坏	160
H-25カマド	119		H-32柱穴断面	160
H-25紡錘車	119		H-32柱穴断面	160
図版39 H-26カマド取り上げ風景	120	図版51	H-33完掘	161
H-26馬骨出土状況	120		H-33カマド	161
図版40 H-27完掘	121		H-33柱穴断面	161
H-27カマド	121	図版52	H-34完掘	162
H-27高坏出土状況	121		H-34カマド	162
H-27深鉢出土状況	121		H-34紡錘車	162
図版41 H-27高坏脚部	122	図版53	H-35完掘	163
H-27高坏	122		H-35カマド・深鉢出土状況	163
H-27高坏	122		H-35深鉢出土状況	163
H-27深鉢	122	図版54	H-35紡錘車	164
H-27床面出土土器セット	122		H-35高坏	164
図版42 H-28完掘	123		H-35高坏	164
H-28カマド	123		H-35深鉢	164
H-28深鉢	123		H-35深鉢	164
図版43 H-29完掘	124	図版55	H-36完掘	165
H-29カマド	124		H-36カマド	165
H-29 紡錘車	124		H-36深鉢	165

図版56	H-37完掘	166		H-38高坏出土状況	169
	H-37カマド・深鉢出土状況	166		H-38紡錘車	169
	H-37深鉢出土状況	166		H-38高坏	169
	H-37深鉢・紡錘車出土状況	166	図版60	H-39完掘	170
図版57	H-37出土木器(表)	167		H-39カマド	170
	H-37出土木器(裏)	167		H-39高坏出土状況	170
	H-37集石	167		H-39集石・深鉢出土状況	170
	H-37木器出土状況	167	図版61	H-39深鉢底部出土状況	171
	H-37紡錘車	167		H-39深鉢底部	171
	H-37高坏	167		H-39深鉢	171
	H-37高坏	167		H-39高坏	171
図版58	H-37深鉢	168	図版62	h-46表土出土の深鉢	181
	H-37深鉢	168		n-41表土出土の高坏	181
	H-37深鉢	168		c-22表土出土の紡錘車	181
	H-37深鉢	168		表採 紡錘車	181
図版59	H-38完掘	169	図版63	n-47包含層出土の押型文土器	182
	H-38カマド	169		遺構外出土の石器	182

I 調査の概要

1 調査にいたる経緯

天塩川は農業用水をはじめ水産業・水力発電など多方面にわたって利用され、その流域に住む人々の生活に大きく貢献しているが、一方では氾濫をくりかえし幾度も災害を引起してきた。天塩川の治水事業は大正時代から計画され、昭和8年に実施に移されて以来、数次にわたって進められてきた。現在も北海道開発局旭川開発建設部によって「天塩川改修事業」が進められており、屈曲部分の是正、堤防・護岸の整備などが実施されている。

橋遺跡は天塩川改修事業のうち橋梁堤工事用地内にある。昭和53年度から北海道開発局と北海道教育委員会の間で、埋蔵文化財保護のための事前協議が行われ、北海道教育委員会は昭和54年10月に範囲確認調査を実施した。その結果、本遺跡の範囲が天塩川本流の屈曲・流路拡幅工事部分にあたり、工事計画を変更することが困難であることが明らかになったため、文化財保護法に基づいて発掘調査を実施することが決定した。

発掘調査は昭和55年度から昭和58年度までの4年間に分割して行なった。調査面積は、当初9,500㎡と決定していたが、昭和55年度の調査結果から遺跡の範囲がさらに広がっていることが予測されたため、発掘調査総面積は11,600㎡となった。

2 調査体制

昭和55年度

理 事 長	浅 井 理一郎
調 査 部 長	高 橋 稔 一
調 査 第 三 班 長	木 村 尚 俊
文化財保護主事	鬼 柳 彰
"	増 川 栄 一
調 査 補 助 員	水 上 英 之

昭和56年度

理 事 長	浅 井 理一郎
調 査 部 長	高 橋 稔 一
調 査 第 一 班 長	中 村 福 彦
文化財保護主事	鬼 柳 彰
"	浦 辻 栄 治
調 査 補 助 員	水 上 英 之

昭和57年度

理 事 長	浅 井 理一郎
調 査 部 長	藤 本 英 夫
調 査 第 三 班 長	木 村 尚 俊



1-1図 棚道跡の位置

この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「恩根内」を複製利用したものである。

文化財保護主事	鬼 柳 彰
"	浦 辻 栄 治
調査補助員	佐 藤 和 雄
昭和58年度	
理 事 長	中 村 龍 一
調 査 部 長	竹 田 輝 雄
調査第四班長	鬼 柳 彰
文化財保護主事	立 川 トマス
嘱 託	和泉田 毅
"	森 秀 之

3 調査の方法

発掘はグリッド調査方式によって行なった。北海道教育委員会が実施した範囲確認調査の区画に従って全調査区に5 m グリッドを設定、北からアラビア数字を、西からアルファベットを付した。各グリッドの呼称は北西の杭で、a-1, a-2のように示した。

範囲確認調査によって、地表から約30cm～40cmは耕作土であることが判明したために、この層の上半部を重機によって除去した。

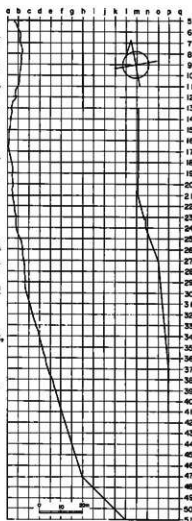
遺構の番号は確認された順に付した。

住居跡の柱穴の調査にあたっては、床面調査後、断面観察を行なった。また柱穴が不明瞭なものに關しても、床面の調査完了後断面によって確認調査を行なったため、遺構写真撮影の時点では掘りこんでいないものがある。

カマドおよび炉跡の焼土からサンプルを採取して、水洗、フローティングを行ない、遺物の検出を行なった。

花粉分析および¹⁴C年代測定はそれぞれ専門家に依頼した。

住居跡H-37から検出された炭化材の樹種については、現在鑑定を依頼中である。(鬼柳 彰)



I-2図 グリッド設定図

4 基本層位

調査区は開拓以来の耕作によって削平されている。耕作表土は約40cm前後で全域にわたってほぼ一定である。耕作表土下は調査区南端に縄文時代の包含層がわずかにみとめられるほかは、地山である。地山は砂質黄褐色土がほぼ全域に広がっているが、調査区北部ではところどころに砂あるいは礫層があらわれている。昭和55年度調査区の北東側と57年度調査区の東側は周囲よりわずかに低く、厚さ30cm～40cmの砂礫層があることから、天塩川の氾濫によって形成された古い河道跡と考えられる。

各住居跡の覆土は大きく3つの層に分けられる。1層は炭化物を含む茶褐色土で、開墾当時までのこっていた竪穴住居跡のくぼみを埋めたものである。2層は多量の炭化物を含む層で、開墾時の野焼によって形成されたものと考えられる。3層は暗黄褐色土で遺物の大部分はこの層位から出土した。(鬼柳 彰)

5 調査結果の要旨

楠遺跡の発掘調査によって発見された遺構は、縄文文化期の竪穴住居跡39軒と土壘1基である。このほかに天塩川の氾濫によってつくられたものと考えられる溝跡が検出されているが、形成時期については不明である。これらの遺構はすべて開拓時代以降の畑地造成のために上部を削平されている。

1軒をのぞく38軒の住居跡につくりつけのカマドがある。住居跡の床面からは、炉跡・柱跡



竪穴住居跡確認状況（昭和57年度調査区）

などが検出されている。住居跡H-37は火災にあったものと考えられ、多数の炭化材が出土した。

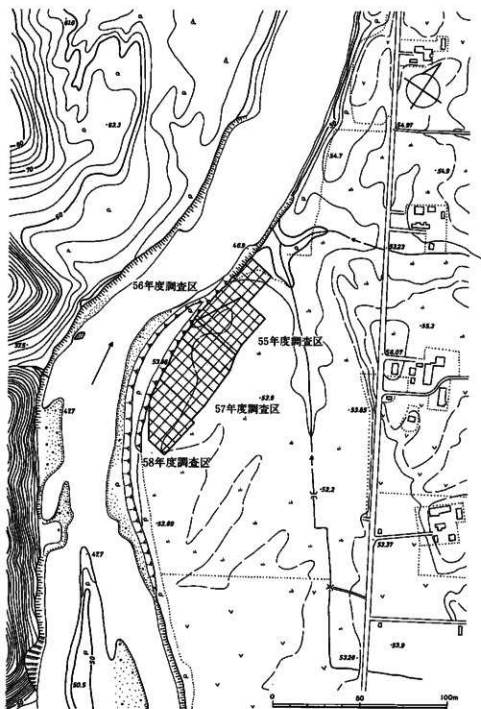
遺構内からは多数の縄文式土器のほか、鉄製刀子、紡錘車、砥石、木器、黒曜石剥片、カワシンジュ貝の殻皮などの遺物が出土した。完形および復元された土器は50数個体で、深鉢・高坏・坏の器種がある。これらの土器は器形および文様構成からみて、縄文文化期のうちでも比較的新しい時期に相当するものと考えられる。放射性炭素¹⁴Cによる年代測定によると、760±50B.P.~920±70B.P.の結果が得られている。

カマドおよび炉跡の焼土の水洗処理によって、サケ科とコイ科の骨片が採取された。また、住居跡のピット内土壌の花粉分析によって、本遺跡周辺でソバおよびイネ科の雑穀が栽培された可能性が示されている。

調査区の南端部には縄文時代の遺物包含層がある。出土遺物はわずかであるが、縄文時代中期初頭に相当するものと考えられる押型文土器が1個体出土した。(鬼柳 彰)

注(1) 1979「輪道跡」(天塩川改修事業・橋梁堤工用地内埋蔵文化財発掘調査概報 幹北海道埋蔵文化財センター)では炭化物および土器片を出土した土壌P-1、P-2を示したが、その後の発掘調査によって同様の例が検出され、開拓当時の野焼による炭化物が調査区内の低い部分にのこったものであることが判明したため、これらを遺構から除外した。
このため、1980年度概報でP-3とした遺構を本報告書ではP-1として記載した。

II 遺跡の環境と立地



Ⅱ-1 図 遺跡周辺の地形図

美深町楠遺跡付近は天塩川の氾濫原で、これより南に広がる美深盆地の北端にあたる。楠遺跡は、この氾濫原を蛇行しながら北流する天塩川の右岸段丘上にある。

天塩川は流路延長256km、流域面積5,590km²におよぶ大河である。源を北見山地の最高峰天塩岳に発し、天塩山地と北見山地にはさまれた中央凹地帯を北流、音威子府村から天塩山地を横切り天塩平野に出て日本海に注ぐ。上流から下流まで蛇行の著しいことで知られている。

天塩川上流の中央凹地帯には新第3紀から第4紀にかけての地層が基盤をなす名寄盆地が形成されている。⁽¹⁾美深盆地は広義の名寄盆地のうち智恵文丘陵で分離された北方の部分で、本流とニウブ川・ウルベシ川・パンケ川などの支流の運搬物で埋積された沖積平地が発達している。

美深盆地の東側には函岳^{ムツ} (1129m)・加須美岳^{カスミ} (915m)をはじめ、800m～900m級の北見山系の山が、西側には小^{ヒコ}岳 (724m)・布袋岳^{フサイ} (708m)など天塩山系の700m級の山々が峰を連ねている。

このような地形から盆地特有の内陸性気候条件下にあり、夏は曇り7・8月には平均気温が20度を越える。冬は寒さが厳しく零下30度前後になる。また雪も多く積雪量は2mにおよぶことがある。四季を通じて南風あるいは東南風がもっとも多い。

美深盆地周辺の山間部には広大な森林が広がっている。針葉樹ではエゾマツ・トドマツが大部分を占め、広葉樹ではナラが多い。また山麓から平地にかけては、カツラ・ハンノキ・ヤチダモ・アカダモなどが分布している。

美深町の前身は中川郡下名寄村で、大正9年智恵文村を分村した際にアイヌ語の地名「ピウカ」から美深村と名付けられた。大正12年には町制を施行して現在に至っている。おもな産業は豊富な森林資源を背景とした木材業と肥沃な沖積低地に依存する農業である。また天塩川のサケ漁を主体とする水産業も古くから行なわれている。

本遺跡が所在する美深町楠は町制施行以来「美深25区」と呼称されてきたが、昭和11年の字名改正の際に現在の「楠」という地名が付けられたものである。楠地区では明治37年から開拓が始まり、戦前まではナクネ・小麦などを主作とする畑作が行なわれていた。昭和22・23年頃から酪農が盛んになり、現在では飼料作物がおもにつくられている。⁽²⁾美深町は畑作の北限として知られているが、楠付近では現在水田農耕はまったく行なわれていない。

楠遺跡が立地する天塩川の河岸段丘上の平坦地は現在、牧草・デントコーンなどが作られている。調査区は周辺よりわずかに高い微高地となっており、周辺の畑地には天塩川氾濫の際に形成されたものと思われる河道跡がわずかにみとめられる。付近の人々の話によれば、開拓当時このあたりは一面に笹や灌木が茂っており、調査区付近にはいくつものくぼみがみられたという。これらのくぼみは、おそらく今回の発掘調査で明らかにされた居住住居跡が埋まりきらずにその当時までのこっていたものと考えられる。

美深町には本遺跡を含めて4ヶ所の遺跡がある。昭和43年には^{トドマツ} 苗丘遺跡⁽³⁾の発掘調査が行なわれ縄文時代中期の住居跡が発見された。昭和45年には紋穂内遺跡⁽⁴⁾が発掘調査されて、楠遺跡とはほぼ同じ時期に相当する縄文文化期の住居跡が3軒検出されている。このほかにも縄文時代の遺

物散布地として東北遺跡・恩根内遺跡がある。

天塩川流域には美深町の4遺跡を含めて20数ヵ所の遺跡が発見されている。このうち縄文文化期の遺跡には、下流では天塩町の天塩川河口基線遺跡⁽⁵⁾・音頻遺跡がある。いずれも数百におよぶ竪穴住居跡があり、その大部分が縄文文化期のものと考えられている。上流では美深町の本遺跡・紋穂内遺跡⁽⁶⁾のほかに、名寄市の智東遺跡⁽⁶⁾がある。昭和53年に発掘調査が行われており、縄文文化期の竪穴住居跡が12軒発見されている。(鬼柳 彰)

注(1) 瀬川秀良(1974):『Ⅲ.地形誌』『日本地形誌 北海道地方』P94 朝倉書店

(2) ———(1979):『美深農協史』P751 美深町農業協同組合

(3) 山崎博信他(1969):『富丘遺跡』美深町教育委員会

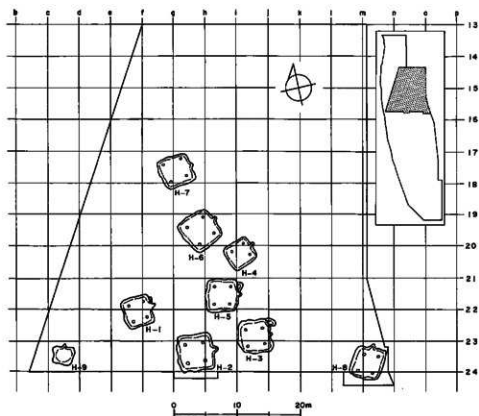
(4) 山崎博信他(1970):『紋穂内遺跡』美深町教育委員会

(5) ———(1975):『天塩川河口基線遺跡』天塩町教育委員会

(6) ———(1977):『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う縄文文化財調査』名寄市教育委員会

参考文献 式部義明編(1971)『美深町史』美深町

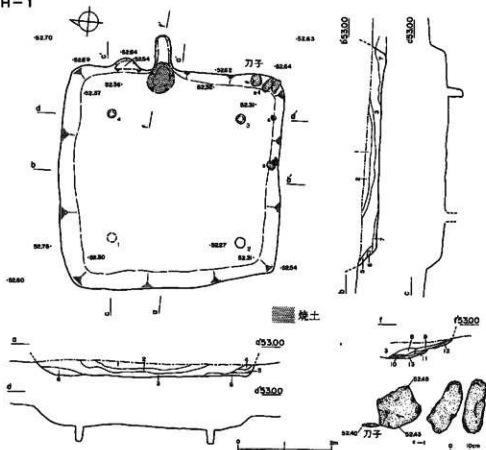
III 昭和55年度の調査



Ⅱ-1 図 遺構位置図 (1/600)

1 住居跡

H-1



- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 茶褐色土 | 8. 暗黄褐色土(少量の焼土混入) |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 9. 黄褐色土(炭化物が混じる) |
| 3. 暗黄褐色土 | 10. 赤橙色砂(焼けている) |
| 4. 攪乱 | 11. 茶褐色土(少量の焼土混入) |
| 5. 黄褐色土(少量の砂を含む) | 12. 黄褐色土(炭化物が混じる) |
| 6. 砂 | 13. 赤茶褐色土(焼けている) |
| 7. 砂礫 | |

■-2図 H-1実測図

遺構

位置: e-21・22, f-21・22 形状: 正方形 規模: 南北4.57m×東西4.52m 深さ 0.43m 床面積 15.9㎡

カマド: 煙道方位N→E85° 東壁につくられている。焚口は円形に浅く掘りこまれており、煙道床面は外へ向って斜めに上っている。天井部はのこっていない。煙道の先端には煙出しの

立ち上りがわずかにのこっている。焚口から煙道の床は焼けて堅くなっており、炭化物を含む焼土と灰が堆積していた。袖石に使用したと考えられる扁平な川原石が、南東コーナーの壁ぎわに、3個並んで出土した。

柱穴：1 径20cm、深さ不明、2 径22cm、深さ34cm、3 径22cm、深さ46cm、4 径20cm、深さ48cm。1以外では柱痕が判別できる。柱の太さは10cm～15cmで、先端はほぼ平らにしたものらしい。掘り形内は粘土を混入する砂が入っており、柱痕は褐色の腐植土である。

床面：平坦で、ほぼ水平である。壁ぎわには砂が堆積している。遺物の出土状態から推定すると、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられる。しかし覆土の掘り下げあるいは土層断面の観察によっても、これを確認することはできなかった。

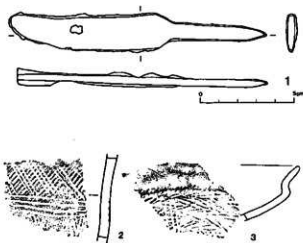
炉跡：検出されていない。

遺物

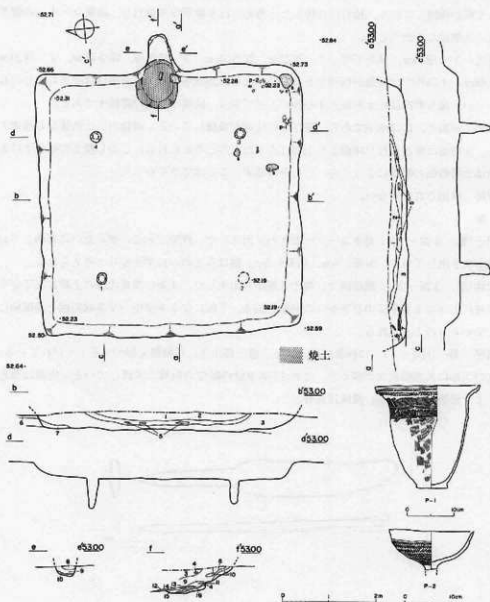
刀子(Ⅲ-3図-1)：南東コーナー壁ぎわに出土した。鉄製である。ぜんたいに腐蝕しており錆が吹き出している。刃長7.8cm、柄長5.7cm。鍔はみとめられず平造りと考えられる。

深鉢(Ⅲ-3図-2)：胴部破片。覆土3層から出土した。4条の横走沈線の上段に左下がりの刻線の上から3本単位の下下がりの刻線を描き、下段には3本単位のV字状刻線を等間隔に配しているものとみられる。

高坏(Ⅲ-3図-3)：口縁部破片。覆土3層上部出土。口縁無文部が大きくくびれている。刻文の下部に矢羽根状文が描かれ、これを3本単位の縦位の刻線で区画している。内面は黒色で、よく研磨されている。焼成は良好。



Ⅲ-3図 H-1 出土遺物



- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. 茶褐色土 | 9. 暗黄褐色土 (少量の炭化物混入) |
| 2. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 10. 黒褐色土 (炭化物を多量に含む) |
| 3. 暗黄褐色土 | 11. 赤茶褐色土 (焼土を含む) |
| 4. 焼土 | 12. 茶褐色土 (炭化物と焼土を含む) |
| 5. 炭化物 | 13. 黄褐色土 (炭化物を少量含む) |
| 6. 黄褐色土 | 14. 黄褐色土 (炭化物と焼土粒を混入する) |
| 7. 砂質土 | 15. 茶褐色土 (炭化粒を混入する) |
| 8. 暗茶褐色土 | 16. 赤茶褐色土砂 |

■-4 図 H-2 実測図

遺 構

位置：E-22・23, h-22・23 形状：ほぼ正方形 規模：南北5.55m×東西5.58m 深さ0.24m 床面積 25.2m²

カマド：煙道方位N→E90° 東壁中央部につくられている。焚口は円形に掘りこまれている。この掘りこみは煙道内部まで続き、煙道床面はこれより一段高くなっている。煙道床面は外に向けて上っている。煙出しと煙道天井部はのこっていない。焚口から煙道にかけて炭化物を含む焼土と灰が厚く堆積している。袖石は焚口の右側に立てかけられた状態で1個出土した。扁平な川原石が使用されている。床面の南東コーナーにもこれと同様の石が出土しているが、袖石に使用されていたものと考えられる。また焚口内部にも長さ約15cmの細長い石がある。

柱穴：1 径28cm, 深さ65cm, 2 径24cm, 深さ不明, 3 径20cm 深さ58cm, 4 径24cm 深さ71cm。3の柱穴では柱痕が土層断面に検出された。これによると柱の太さは16cmで先端はほぼ平らになっている。

床面：ほぼ平坦で水平になっている。遺物の出土状態からみると、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられるが、覆土の掘り下げ、土層断面では確認できなかった。

炉跡：検出されていない。

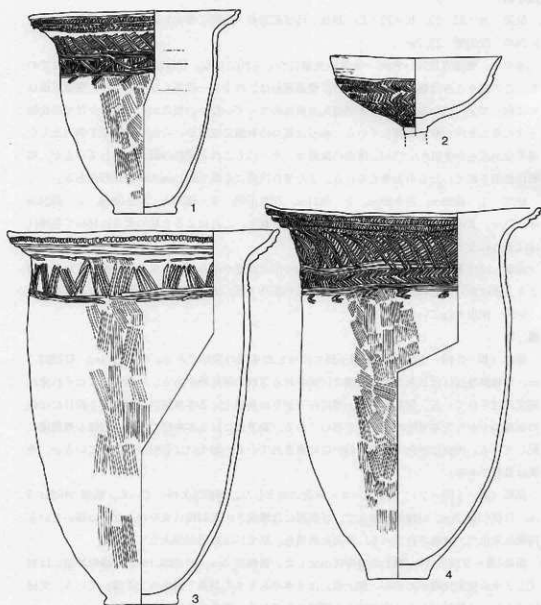
遺 物

深鉢(Ⅲ-5図-1)：西側3層下部に出土した中型の深鉢である。器高21.4cm, 口径22.2cm。口縁部外面には2条の横走沈線で区画される3段の隆起帯がある。隆起帯上にはそれぞれ刻文が付されている。頸部から胴上部に左下がりの刻線上に2本単位の刻線を、2段目には縦の刻線の上から2本単位の山形文を描いている。最下段には2本単位の斜めの刻線を等間隔に配している。内面は黒色で、ていねいに研磨されている。胎土には石粒が混入しているが、焼成は良好である。

高坏(Ⅲ-5図-2)：南東コーナー床面に出土した。脚部は欠損している。器高(坏部)9cm, 口径 18.2cm。口縁部は無文で、坏胴部には横向きの矢羽根状文をぜんたいに描いている。内面は黒色で、研磨されている。外面は黒褐色。胎土には石粒が混入している。

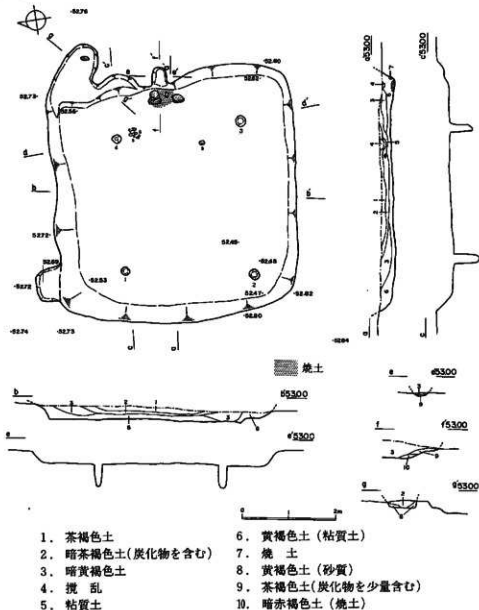
深鉢(Ⅲ-5図-3)：覆土3層中に出土した。器高39.5cm, 口径29.1cm。口縁部外面には刻文と3条の横走沈線がめぐる。胴上部には4本から6本の刻線で鋸歯状文を描いている。文様はぜんたいに粗雑である。内面はよく研磨されており、黒色である。

深鉢(Ⅲ-5図-4)：西壁ぎわの覆土3層中に出土した。器高39.6cm, 口径28.8cm, 胴部がわずかにふくらんでいる。口縁部には横走沈線によって区画される3段の隆起帯があり、この上に刻文が付されている。胴上部には上段に左下がりの刻線上に3本単位の右下がりの刻線を描き、下段には横走する刻線の間に横向きの矢羽根状文がめぐらされている。内面は黒色。口縁部から胴上部は横位に胴下半は縦位にヘラ磨きが施されている。



Ⅲ-5圖 H-2出土遺物

H-3



Ⅲ-6図 H-3 実測図

遺構

位置：i-22・23, j-22・23 形状：ほぼ正方形，北東部と北西部に張り出しがある。規模：南北5.06m×東西5.05m 深さ 0.15m 床面積 19.4㎡

カマド：煙道方位N→E95° 東壁中央部につくられている。煙道床面は壁から外へ向って斜めに上っており，天井部および煙出しの立ち上りはのこっていない。焚口から煙道床面には炭化

物を含む焼土がわずかに堆積している。袖石は焚口の北側に倒れかかった状態で2個、南側には床面に倒れた状態で1個出土した。いずれも扁平な川原石である。また焚口の中央部には、長さ約15cmの細長い石が直立した状態で出土した。

柱穴：1 径20cm、深さ58cm、2 径22cm、深さ66cm、3 径23cm、深さ54cm、4 径20cm、深さ50cmである。2は黄褐色土に掘りこまれているが、ほかの3個は砂礫層に掘りこまれている。内部には砂礫を含む褐色土が入っており、柱痕は検出されていない。

床面：南西側は黄褐色土、ほかの部分には一面に砂礫層があらわれている。ぜんたいに平坦で、水平になっている。床面から土器は出土していないが、袖石や礫の出土状態をみると、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられる。しかし覆土の掘り下げあるいは断面の観察によっても、これを確認することはできなかった。

壁外の張り出し：この住居跡には北西と北東角近くに、床面より20cmほど高い張り出し部分がある。北西角の張り出しは幅約70cm、奥行約50cmで深さは3cmから5cmで床面はほぼ平らである。北東の張り出しは住居の北東角からカマド近くまである。形状は北側が長円形で、南側では半円になっている。深さは約10cm、底には一面に小礫が敷きつめられたように検出されたが、トレンチ調査によって地山中から続く礫層であることが判明した。

炉跡：検出されていない。

遺物

集石。カマド焚口の北西床面に9個の小礫がまとまって出土した。いずれも細長い川原石である。長さは最大11cm、最小4cmで平均6.9cmである。

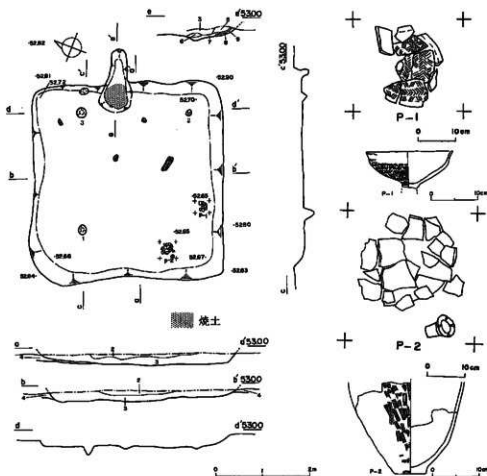
H-4

遺構

位置：h-19・20、i-19・20 形状：ほぼ正方形 規模：南北3.99m×東西4.21m 深さ0.10m 床面積 13.8㎡

カマド：煙道方位N→E68° 東壁の中央やや北よりにつくられている。焚口は浅く掘りこまれ煙道床面は外へ向ってゆるやかに上っている。天井部および、煙出しの立ち上りはない。焚口から煙道にかけて炭化物を含む焼土と灰が堆積している。袖石は検出されなかった。

柱穴：1 径20cm、深さ22cm、2 径14cm、深さ16cm、3 径22cm、深さ22cm。いずれも内部は粘土を含む砂が入っており、柱痕は検出されていない。南西コーナー部の柱穴は確認されなかった。またカマドの北よりの東壁ぎわに径18cm、深さ23cmの柱穴状のビットがある。



- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 暗黄褐色土(焼土を含む) |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 7. 赤褐色土(焼土) |
| 3. 暗黄褐色土 | 8. 暗茶褐色土(炭化物の層) |
| 4. 黄褐色土 | 9. 茶褐色土 |
| 5. 焼土 | |

III-7 図 H-4 実測図

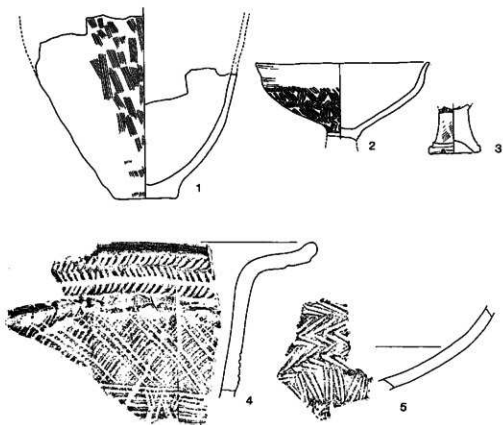
床面：北東と南西以外では、一面に砂礫層があらわれている。細かな凹凸があるが、ぜんたいにほぼ水平になっている。

炉跡：検出されていない。

遺物

深鉢(Ⅲ-8 図-1)：南西コーナー部の覆土 3 層下部に出土した。下半部のみで、上部は欠損している。内面は黒色で研磨されている。

高坏(Ⅲ-8 図-2・3)：2 は南壁ぎわの覆土 3 層下部に出土した。坏部のみで脚部は欠損している。口径約 18cm。口縁無文部がわずかにくびれており、坏胴部には横位の矢羽根状文と



Ⅷ-8図 H-4出土遺物

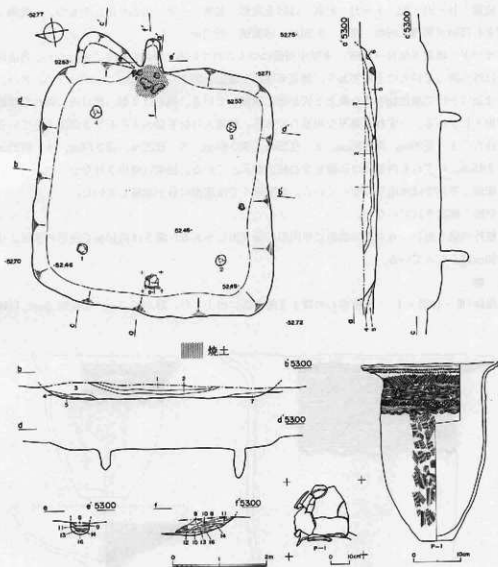
鋸歯状文を描いている。内面は黒色でよく研磨されている。表面は明褐色。胎土には石粒の混入が少なく、焼成は良好である。3は脚部のみ。南西コーナー部の覆土3層下部に出土した。

2の高坏とは別個体である。裾部には2つの段があり、裾の下端には4ヵ所の切りこみがある。

深鉢(Ⅷ-8図-4)：口縁部破片。覆土3層上部に出土。口縁部は大きく外反して水平に近くなっている。口縁部外面に一条の沈線をめぐらし、この上段に矢羽根状の刻文と斜めの刻文がめぐる。胴部には、左下がりの刻線の上から、3本単位の右下がりの刻線を描き、その下段に横走沈線をめぐらしている。口縁部内面は黒色、胴部内面は褐色で、全体にいいに研磨されている。表面は黒褐色。

高坏(Ⅷ-8図-5)：片羽部破片。2と同様の文様構成のものと考えられる。

H-5



- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 茶褐色土 | 9. 黄褐色土(焼土) |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 10. 黄色土(焼土・ブロック) |
| 3. 暗黄褐色土 | 11. 暗褐色土(焼土) |
| 4. 黄褐色土(シルト) | 12. 暗茶褐色土(焼土) |
| 5. 暗黄褐色土(砂質) | 13. 炭化物 |
| 6. 黄褐色土(焼土) | 14. 赤褐色土(焼土) |
| 7. 暗黄褐色土(砂礫層) | 15. 赤色土(焼土) |
| 8. 褐色土(焼土・炭化物をわずかに含む) | 16. 茶褐色土(焼土) |

Ⅱ-9図 H-5実測図

遺 構

位置：h-21・22, i-21 形状：ほぼ正方形 北東コーナーに張り出しをもつ。規模：南北4.75m×東西5.09m 深さ 0.20m 床面積 19.3㎡

カマド：煙道方位N→E88° 東壁中央部につくられている。焚口に掘りこみはない。煙道床面は外へ向って斜めに上っており、煙道天井部と煙出しの立ち上りのはのこっている。焚口から煙道にかけて炭化物を含む焼土と灰が厚く堆積している。袖石は2個、焚口内に倒れた状態で出土している。いずれも扁平な川原石である。煙道入口にも10cm大の石が3個出土している。

柱穴：1 径20cm, 深さ56cm, 2 径25cm, 深さ60cm, 3 径22cm, 深さ58cm, 4 径25cm, 深さ45cm。いずれも内部には砂礫を含む粘土が入っている。柱底は検出されなかった。

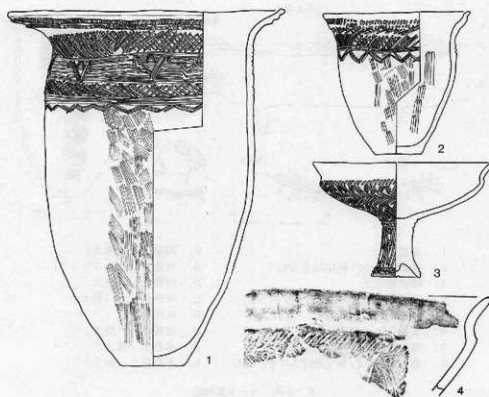
床面：平坦では水平になっている。北壁近くでは床面に砂が堆積していた。

炉跡：検出されていない。

壁外の張り出し：カマドの北側に半円形の張り出しがある。深さは約10cmで住居の床面より約20cm高くなっている。

遺 物

深鉢(Ⅲ-10図-1)：西壁ぎわの覆土3層下部に出土した。器高37.7cm, 口径29.2cm。口縁

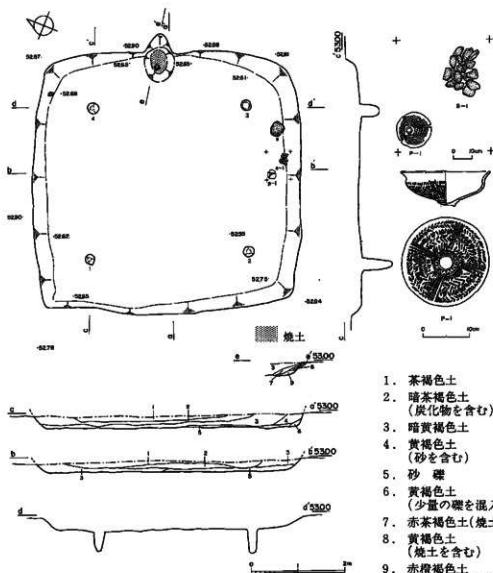


Ⅲ-10図 H-5 出土遺物

部は強く外反し、口唇部まで直線的にのびている。口縁部は2段の刻文がめぐっている。胴部文様帯には斜交叉文様の間に横走する刻線を描き、この上に針葉樹状文のモチーフを等間隔に配している。最下段には横走する刻線と山形文がめぐらされている。内面は黒色で、研磨されている。

深鉢(重-10図-2)：兩壁ぎわの覆土3層中に出土した。器高14.9cm、口径15.5cmの中型深鉢である。口縁はゆるく外反し端部が立ち上っている。口縁部には3段の刻文がめぐり、胴部には上段に斜交叉文、下段には山形文が描かれている。内面は黒色で、よく研磨されている。

高坏(重-10図-3・4)：覆土3層上部に出土した。3は器高12.1cm、口径19.0cm。口縁は無文でくびれている。坏胴部には鋸歯状文と矢羽根状文を描いている。脚部には縦長の鋸歯状文の上に竹管文を施している。脚部の上端と裾部には段をもち、この上に刻文がめぐっている。また脚の下端には4か所の切りこみがあり、脚底内側には突起がつくり出されている。内面は黒色で研磨されている。4は口縁部破片。3の高坏に類似するものと考えられる。



H-11図 H-6実測図

遺 構

位置：i-18・19・20, h-18・19・20 形状：ほぼ正方形 規模：南北5.49m×東西5.35m 深さ 0.15m 床面積 23.7㎡

カマド：煙道方位N→E72° 北東壁中央部につくられている。焚口は円形に浅く掘りこまれ煙道床面は外へ向って斜めに上っている。天井部および、煙出しの立ち上りはのこっていない。焚口内から煙道にかけて焼土と焼けた砂が堆積している。焚口内にはにぎり拳大の石が1個出

土。両袖には石はないが、南東壁ぎわに扁平な川原石が出土しており、大きさ・形からみて袖石として使用されたものと考えられる。

柱穴：1 径24cm、深き66cm、2 径30cm、深き54cm、3 径28cm、深き50cm、4 径33cm、深き45cm。内部には礫を含む粘土が入っている。柱底は検出されなかった。

床面：ほぼ平坦で水平になっている。遺物の出土状態からみると、生活面は検出された床面より上部にあると考えられる。しかし覆土の掘り下げ、あるいは断面の観察で、これを確認することはできなかった。

炉跡：検出されていない。

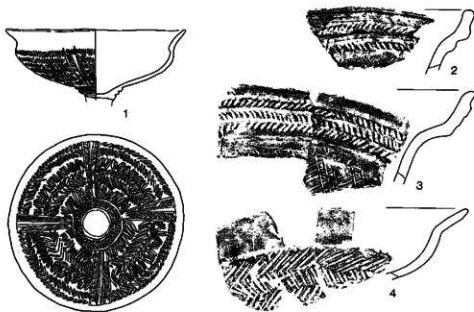
遺物

集石：南西コーナー一部床面にまとまって小礫が出土した。個数は21個。長円形の川原石である。計測値—長径最大7.7cm、最小4.8cm、平均6.3cm・短径最大5.2cm、最小2.8cm、平均4.2cm・重量最大165g、最小40g、平均97.9g。

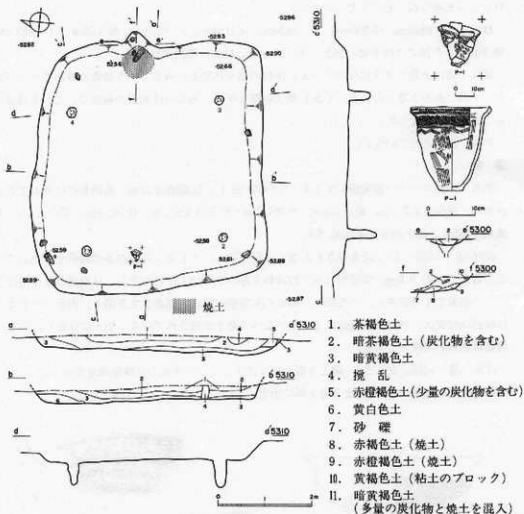
高坏(Ⅲ-12図-1)：南東壁ぎわの覆土3層下部に出土した。坏部のみで脚部を欠損している。器高(坏部)9.0cm、口径19.1cm。口縁無文部の中間にくびれがある。坏胴部は4本単位の縦位の刻線で4分割され、この間に、横位の矢羽根状刻文と鋸歯状文を描く。内面は黒色で、口縁部は横位に、坏胴部は縦位にいいねいへう磨きが施されている。胎土には石粒が少なく、焼成はきわめて良好である。

深鉢(Ⅲ-12図-2・3)：覆土3層上部に出土した。いずれも口縁部破片である。

高坏(Ⅲ-12図-4)：覆土3層上部に出土。



Ⅲ-12図 H-6 出土遺物



H-7 実測図

遺構

位置：f-17・18, g-17・18 形状：台形 規模：南北4.44m×東西4.93m 深さ 0.25m 床面積 17.9m²

カマド：煙道方位N→E82° 東壁北よりつくられている。煙道床面は外へ向って斜めに上っている。天井部・煙出しの立ち上りはのこっていない。焚口から煙道にかけて、炭化物を含む焼土がわずかに堆積している。焚口内には、袖石に使用したと考えられる扁平な川原石が1個倒れた状態で出土している。このほかにも、にぎり拳大の礫が焚口内と煙道内に1個ずつ出土している。

柱穴：1 径20cm, 深さ64cm, 2 径18cm, 深さ42cm, 3 径25cm, 深さ60cm, 4 径22cm,

深さ48cm。内部には礫を含む粘土が入っている。柱痕は検出されていない。

床面：砂礫層が一面にあらわれているが、ほぼ平坦で水平につくられている。

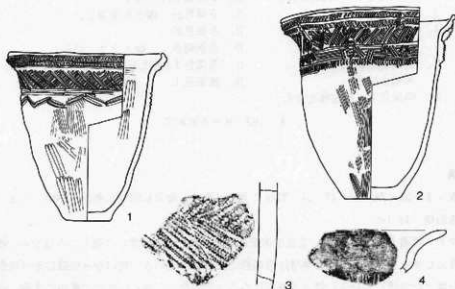
炉跡：検出されていない。

遺 物

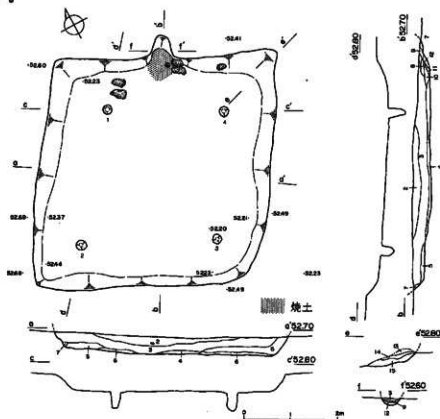
深鉢（Ⅲ-14図-1・2）：覆土3層下部に出土した。1は器高17.9cm、口径17.0cmの中型深鉢である。口縁部は外反し端部は内傾している。口縁部には2段の刻文がめぐっている。胴上部上段には左下がりの刻線の上から、右下がりの2本単位の刻線を描いている。下段には横走沈線と山形文をめぐらせている。内面は黒色で、よく研磨されている。2は器高19.8cm、口径18.6cmの中型深鉢である。文様帯の部分から上部がゆるく外反している。口縁部には2段の刻文がめぐる。胴上部上段には右下がり刻線の上から、3本単位の左下がりの刻線を、下段には、横走沈線の上から部分的に鋸歯状文を描いている。また口縁部に4か所、胴上部文様上に5か所の貼付による突起があり、この突起上にも刻文が施されている。内面は黒色で、よく研磨されている。

縄文土器（Ⅲ-14図-3）：覆土3層上部に出土した。深鉢の破片。縄文時代中期のものと考えられる。

高坏（Ⅲ-14図-4）：覆土3層上部出土。口縁無文部の破片である。内面は黒色でていねいに磨かれており、焼成もきわめて良い。



Ⅲ-14図 H-7 出土遺物



- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. 茶褐色土 | 9. 暗茶褐色土 (炭化物を多量に含む) |
| 2. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 10. 赤橙褐色土 (焼土) |
| 3. 暗黄褐色土 | 11. 赤褐色砂 (礫を少量含む) |
| 4. 褐色土 (砂を多く含む) | 12. 赤褐色砂 |
| 5. 砂 (礫を含む) | 13. 赤茶褐色土 (焼土を多く含む) |
| 6. 黄褐色粘質土 | 14. 茶褐色土 (焼土と炭化物が少量混じる) |
| 7. 黒褐色粘質土 | 15. 黄褐色土 |
| 8. 暗褐色土 (炭化物を含む) | |

■-15図 H-8 実測図

遺 構

位置：1-23・24, m-23・24 形状：菱形 規模：南北4.82m×東西4.86m 深さ 0.28m 床面積 18.1㎡

カマド：煙道方位N→E24° 北壁中央部につくられている。焚口に掘りこみはない。煙道床面は外にむかって上っており、奥壁は急傾斜で立ち上っている。焚口から煙道にかけて炭化物を含む焼土が堆積している。煙道天井部はのこっていない。袖石は焚口の東側に2個、西側には約1mほどはなれて2個出土している。いずれも扁平な川原石である。

柱穴：1 径26cm、深さ39cm、2 径20cm、深さ28cm、3 径18cm、深さ30cm、4 径21cm、深さ38cm。内部には砂を含む粘土が入っている。柱底は検出されなかった。

床面：全面に砂層が露出している。袖石の出土状態をみると、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられる。しかし、覆土の掘り下げあるいは断面観察によってもこれを確認することはできなかった。

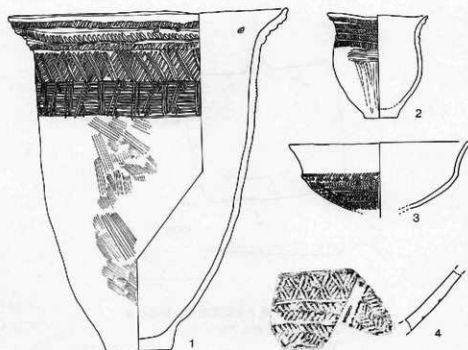
炉跡：検出されていない。

遺物

いずれも覆土3層上部から出土した。

深鉢（Ⅲ-16図-1・2）：1は大型の深鉢で器高35.8cm、口径29.8cmである。口縁部はゆるく外反し端部まで直線的にのびている。口縁部には刻文が3段めぐる。胴上部上段には左下がりの刻線の上から2本単位の右下がりの刻線を描いている。下段には横走沈線文上に針葉樹文のモチーフを連続的に描いている。内面は黒色で、口縁部から胴上部は横位に、以下は縦位にヘラ磨きが施されている。2は器高10.9cm、口径10.6cmの胴部がふくらむ小型の深鉢である。口縁部から胴部にかけて5段の刻文がめぐっている。ハケ目はなく、胴部から底部にかけてヘラによる縦のヘラ調整が行なわれている。内面は黒色でていねいに研磨されており、焼成も良好である。

高坏（Ⅲ-16図-3・4）：3は坏部のみで脚部を欠損している。器高（坏部）8.5cm、口径



Ⅲ-16図 H-8 出土遺物

19.1cm。2本単位の縦位の刻線によってぜんたいを8分割し、その間に横位の矢羽根状文と鋸歯状文を描いている。口縁内面は横に、胴部は放射状にへらによって磨かれている。内面は黒色で光沢がある。表面は明るい褐色である。4は坏部の破片である。矢羽根状の刻文と鋸歯状文を描き、これを2本単位の放射状刻線で区画しているものと思われる。

H-9

遺構

位置：c-23 形状：長方形 規模：南北2.62m×東西3.12m 深さ 0.20m 床面積 約5㎡

カマド：煙道方位N→E20° 北壁中央部につくられている。焚口にあたる部分は煙道床面と同じ高さで、掘りこみはみられない。袖石は検出されていない。煙道内に灰を含む焼土が堆積している。

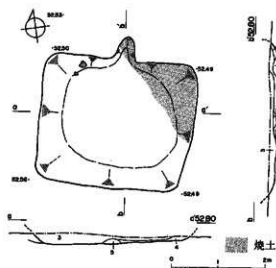
柱穴：検出されていない。

床面：ぜんたいに凹凸が多い。壁の立ち上がりは不明瞭である。北東壁ぎわに多量の灰を含む焼土が堆積していた。

炉跡：検出されていない。

遺物

出土していない。



3. 暗黄褐色土
4. 暗黄褐色土(焼土と炭化物が少量混じる)
5. 赤橙褐色土(焼土ブロック)
6. 黄褐色土

Ⅲ-17図 H-9 実測図

2 小 括

昭和55年度の調査区は範囲確認調査によって明らかになった遺跡の範囲のうち、最北端の2,500㎡である。遺跡が立地する微高地のうち、もっとも北側にあたる。調査区内は北西から南半部にかけてほぼ平坦になっているが、北東側は外へ向って徐々に低くなっている。

耕作表土を除去したのち、全域にわたって遺構確認調査を行った。地山は北東側に低くなっている部分では砂礫層があらわれており、古い河道跡と考えられる。北西部から南半部の平坦なところでは砂質の黄褐色土が広がっている。この砂質黄褐色土中にも、いたるところに砂や礫の層が露出している。地山上には、炭化物を含む落ちこみが数か所に確認された。平面形はほぼ円形あるいは隅丸方形で、径は2m～3mほどである。炭化物は落ちこみの縁の部分に多く、この内側は茶褐色土で炭化物をわずかに含んでいる。周辺の詳細な調査を行ったところこの落ちこみを取り囲むように方形のプランと一部に焼土が確認されたため、カマドをもつ竪穴住居跡と判断するにいたった。検出された9軒の住居跡は、いずれもこのようにして確認されたものであるが、炭化物の混入が少なく、プランの確認が困難なものもあった。

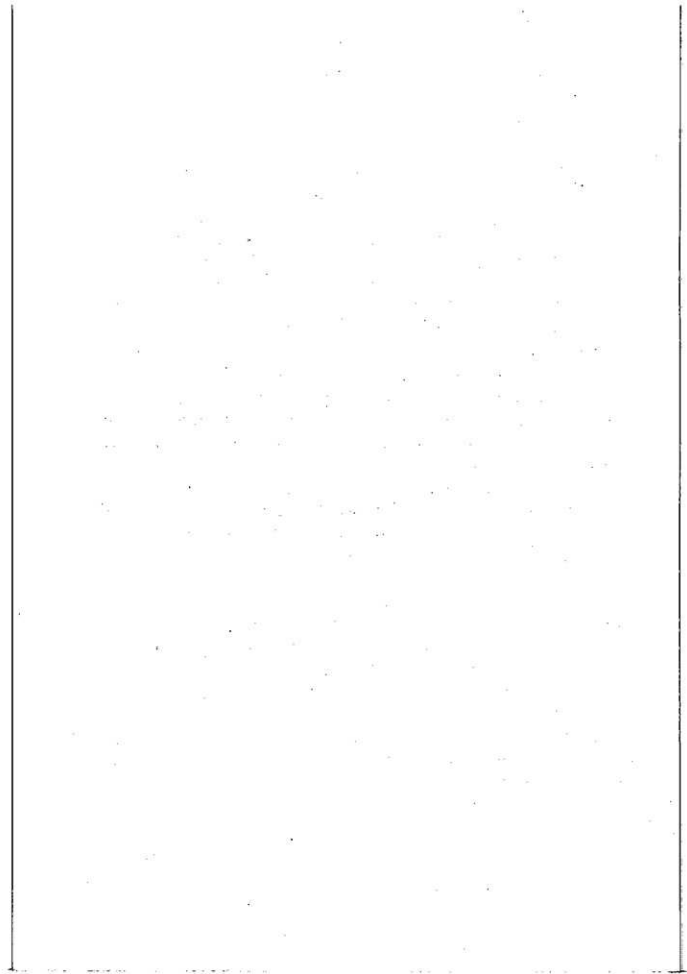
住居跡の調査にあたっては、まずこの炭化物を含む覆土の性格を明らかにすることを目的とした。この層を掘り下げると皿状のくぼみになる。炭化物は笹の根、あるいは木の枝状のもので、くぼみの底から壁にはほぼ一定の厚さで堆積していた。この炭化物を含む層中からは、縄文土器、弥生土器の破片がわずかに出土している。

第Ⅱ章で述べたように付近の人々の話によれば、明治30年代の開拓当時、調査区のあたりには多くのくぼみがみられたといわれており、今回の調査で確認された炭化物を含む落ちこみがこれにあたるものと考えられる。くぼみ内の茶褐色土は、開拓当時の耕作によって埋められたものと推定されるが、炭化物の層が竪穴住居廃棄後の何時の時代に形成されたかについては不明である。

住居跡の壁はすべて大きく傾斜している。しかし構築当時からこのように傾斜していたものとは考えがたい。床の壁ぎわに砂が堆積している例が数軒の住居跡にあった。壁は砂質黄褐色土中に掘りこまれているものが多いが、この壁ぎわの砂が壁の崩落によって堆積したものか、住居廃棄後に周囲から流れこんだものか確認することはできなかった。

住居跡には、9軒ともつくりつけのカマドがある。焚口あるいはその付近には扁平な川原石が出土しているものが多いが、これは両袖に立てられていたものと考えられる。しかし実際に石が立てられた状態で検出された住居跡はない。

9軒の住居跡の分布状態から、本遺跡が北西の微高地外へ続く可能性が考えられたために、調査面積を2,100㎡追加した。(鬼柳 彰)

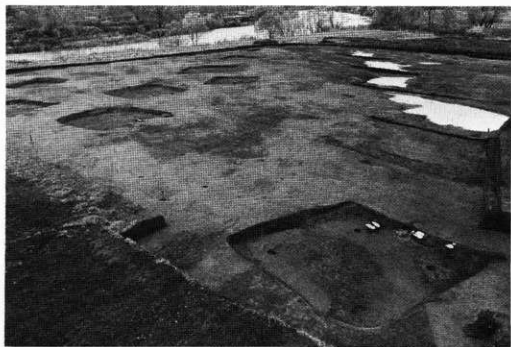


写真図版

中國圖史



遺跡遠景



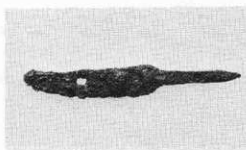
全完掘風景



H-1 完 掘



H-1 カマド



H-1 カ 子



H-2 完 掘



H-2 カマド



H-2 高坏出土状況



H-2 深鉢出土状況



H-2 深鉢出土状況



H-2 深鉢出土狀況



H-2 高杯



H-2 深鉢



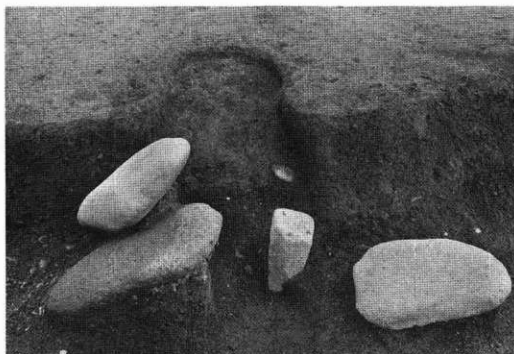
H-2 深鉢



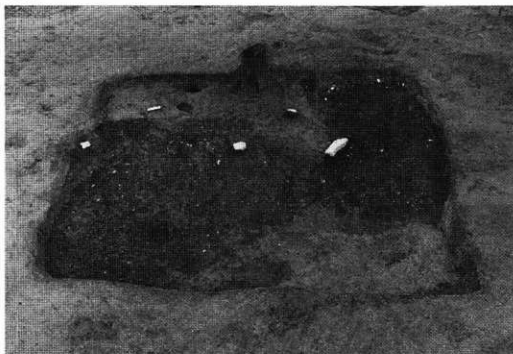
H-2 深鉢



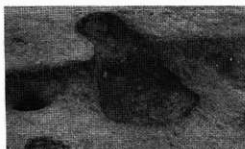
H-3 先 掘



H-3 カマド



H-4 完 掘



H-4 カマド



H-4 深鉢・高坏脚部出土状況



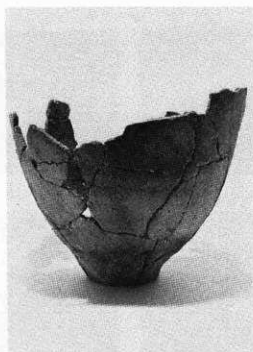
H-4 高坏出土状況



H-4 高环脚部



H-4 高环



H-4 深钵



H-5 完掘



H-5 カマド



H-5 深鉢出土状況



H-5 深鉢出土状況



H-5 高坏出土状況



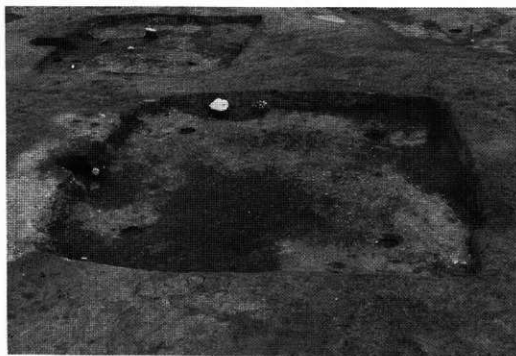
H-5 深鉢



H-5 深鉢



H-5 高坏



H-6 完 掘



H-6 カマド



H-6 集 石



H-7 完 掘



H-7 カマド



H-7 深鉢出土状況



H-7 深鉢出土状況



H-7 深鉢



H-7 深鉢



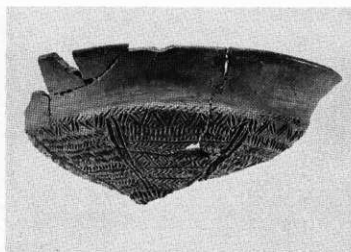
H-8 発掘



H-8 カマド



H-8 高塚出土状況



H-8 高 坏

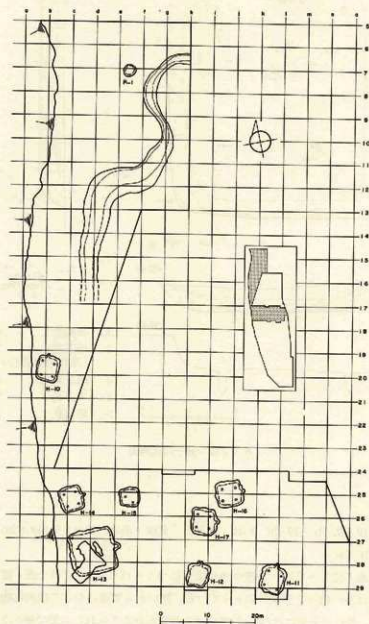


H-8 深 鉢



H-8 深 鉢

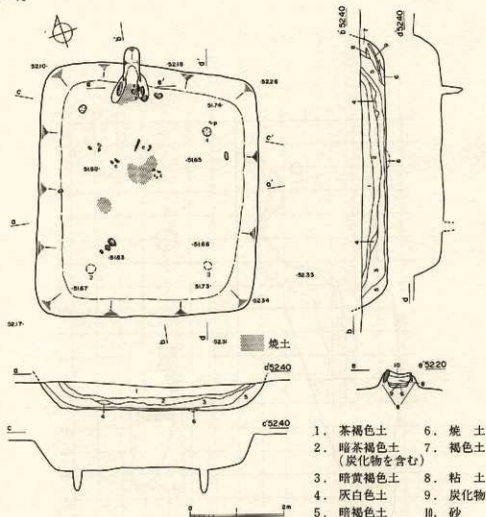
IV 昭和56年度の調査



IV-1 図 遺構位置図 (1/800)

1 住居跡

H-10



IV-2 図 H-10実測図

遺 構

位置：a-19・20, b-19・20 形状：長方形 規模：南北5.21m×東西4.63m 深さ 0.46m 床面積 16.6㎡

カマド：煙道方位N→E23° 北壁中央西よりにつくられている。焚口は浅く掘りこまれており、煙道床面は外へ向って急傾斜で上っている。焚口から煙道にかけては炭化物を含む焼土が堆積している。焚口の右側には2個、左側には1個袖石が立てられた状態で検出された。これは構築当時の状態でのこされているものと考えられる。袖石はいずれも扁平な川原石で、下半部

は土でかためられており、この土は火を受けて焼けている。竈口内部にはにぎり拳大の石が1個出土している。

柱穴：1 径17cm 深さ44cm, 2 径20cm 深さ不明, 3 径17cm 深さ不明, 4 径18cm 深さ56cm, 2と3は床面に確認されたが、断面観察によっても、掘り形を判別することができなかった。1と4は内部に砂質粘土が入っており、柱痕は検出されなかった。

床面：平坦ではほぼ水平になっている。床面中央部とカマド内に炭化木片が5点検出された。

炉跡：中央部北よりに検出された。床面よりわずかに高い。火熱を受けて硬化しており、ゼンたいにヒビが入っている。これより南西約1mの床面にも焼土が検出されている。

遺物

炭化木片以外の遺物は出土していない。

H-11

遺構

位置：k-27・28・29, 1-28・29 形状：長方形 規模：南北5.74m×東西5.14m 深さ0.52m 床面積 20.1m²

カマド：煙道方位N→E30° 北東壁中央部につくられている。竈口に掘りこみはない。煙道は壁外へ約40cm張り出している。煙道床面はほぼ水平にのび、奥壁は垂直に立ち上っている。煙道天井部は煙道内に落ちこんでいる。竈口の掘りこみは焼けてかたくなっている。煙道内部には炭化物を含む焼土が堆積しており、この上に軸石に使用されたものと考えられる扁平な川原石が一端を重ねた状態で出土した。

柱穴：1 径24cm 深さ68cm, 2 径31cm 深さ78cm, 3 径28cm 深さ54cm, 4 径28cm 深さ62cm, このうち3では柱痕が判別できた。太さは約12cmで先端はほぼ平らになっている。掘り形部には粘土を含む砂が入っていた。

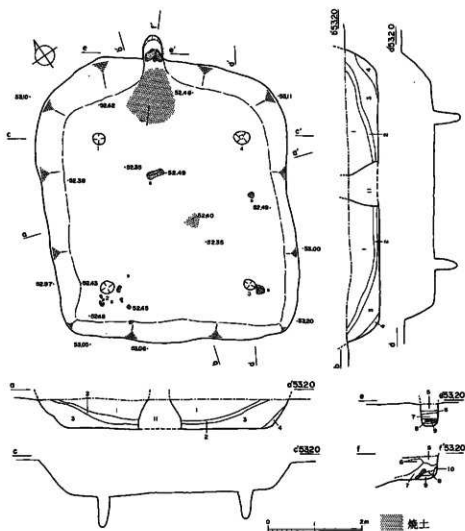
床面：平坦で、ほぼ水平になっている。全面砂層に達しており、壁ぎわにも砂の堆積がみとめられる。

炉跡：中央南よりにある。床面よりわずかに高く、掘りこみはみられない。

遺物

土器片が出土しているが、いずれも覆土3層上部にあり、床面および覆土3層下部には出土していない。

深鉢 (IV-4 図-1・2・3)：1は中型深鉢の胴上部破片である。頸部がわずかにくびれ、この上に横走する凹縁で段がつくられている。体部には縦位のハケ目がある。内面は黒色で、

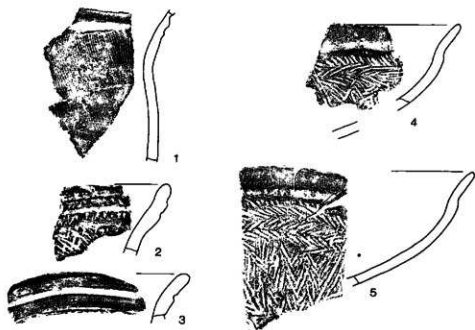


- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 茶褐色土 | 7. 黑褐色土(焼土+炭化物) |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 8. 炭化物 |
| 3. 暗黄褐色土 | 9. 焼土 |
| 4. 砂 | 10. 壁剝落土 |
| 5. 暗褐色土 | 11. 攪乱 |
| 6. 明褐色土 | |

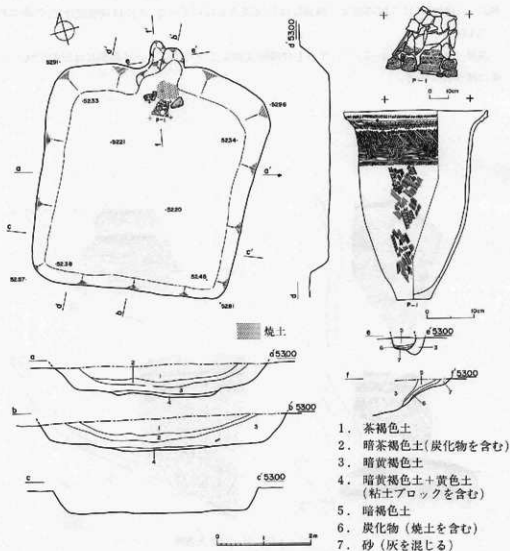
IV-3 図 H-11 実測図

研磨されている。表面は黒褐色。胎土に石粒の混入が少なく、焼成は良好である。2は口縁部破片。口縁部には3段の刻文、頸部には斜交叉文を描いている。3は口縁部破片で、凹線がめぐっている。

高坏 (IV-4 図-4・5)：いずれも口縁無文部でくびれている。坏胴部には矢羽根状文が縦横に描かれている。



IV-4 図 H-11 出土遺物



IV-5 図 H-12実測図

遺 構

位置：h-27・28, i-28 形状：ほぼ正方形 規模：南北4.48m×東西4.38m 深さ 0.20m 床面積 13.7㎡

カマド：煙道方位N→E 9°, N→E 20° 北壁中央部につくられている。焚口には多量の焼土が堆積しており、これの南側には焚口から倒れた状態で深鉢1個体が出土した。煙道は二つに分かれている。西側の煙道には炭化物を含む焼土が堆積しているが、東側の煙道にはこれがないことから、前者が後につくられたものと考えられる。焚口の焼土の西側に2個、東側に1個、

袖石が倒れた状態で出土している。いずれも扁平な川原石である。

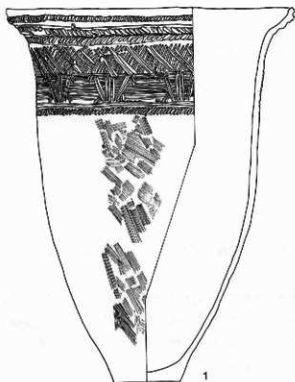
柱穴：柱穴は検出されなかった。

床面：床面は全面砂礫層に達している。中央部がわずかに低くなっている。この部分からは覆土3層に黄褐色の砂とブロック状の粘土が検出された。しかし覆土3層との境は不明瞭であり、貼り床のようなものとはみとめがたい。北東床上にカワシンジュ貝の殻皮が出土している。炉跡：検出されなかった。

遺物

深鉢(IV-6図-1)：カマド焚口部から出土した。器高39.7cm、口径30.7cmの大型深鉢である。口縁は外反し端部で立ち上っている。口縁部外面には3段の刻文をめぐらせている。胴上部の文様は上段には左下がりの刻線上に2本単位の右下がりの刻線を描き、下段には横走沈線の上から、針葉樹状文のモチーフを等間隔に配している。さらにこの下にも刻文がめぐっている。文様帯の上部から口縁部にかけて7個の補修孔がある。内面は褐色で、ていねいに研磨されている。焼成は比較的良好である。表面には炭化物が付着している。

高坏(IV-6図-2)：脚部のみ。覆土3層下部に出土した。刻線と竹管文を施している。裾部には2条の沈線をめぐらし、その間に刻文を付す。下端には4カ所の切りこみがある。



図版 15



H-12 高坏脚部

IV-6図 H-12出土遺物

H-13

遺構

位置：b-27・28, c-27・28, d-28 形状：正方形 規模：南北9.0m×東西8.87m 深さ0.56m 床面積 67.9㎡

カマド：煙道方位N→E90° 東壁中央部につくられている。煙道は壁外に約80cmのびている。焚口に掘りこみはみられない。煙道床面は外へ向って斜めに上がり、奥壁で立ち上っている。煙道天井部は煙道内に落ちこんでいる。焚口から煙道にかけて炭化物と焼土が堆積している。焚口の焼土上には深鉢の底部が出土。この南側に径15cmほどの川原石があるが、袖石と考えられる石はみられない。

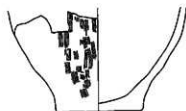
柱穴：北西コーナーと南西コーナーの壁ぎわに1個ずつ、西壁中央部より約1m内側に1個、東壁ぎわに2個検出された。径は10cm～15cmで深さは10cmほどしかない。

床面：この住居跡は中央から南西部にかけて大きく擾乱を受けており、床面の約3分の1ほどはのこっていない。遺存する床面をみるとぜんたいに凹凸があり、砂層があらわれている。

炉跡：検出されていない。

遺物

深鉢 (IV-7図)：カマド焚口の焼土上に出土した。上半部は欠損している。内面は黒色で、よく研磨されている。



IV-7図 H-13出土遺物

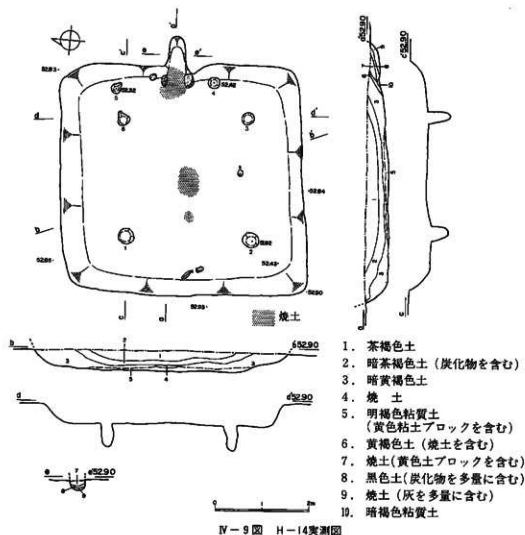
H-14

遺構

位置：c-25, d-25 形状：正方形 規模：南北5.03m×東西4.80m 深さ 0.44m 床面積 18.4㎡

カマド：煙道方位N→E88° 東壁中央部につくられている。煙道床面はほぼ水平で、奥壁が急傾斜で上っている。焚口から煙道内にかけて、炭化物と灰を含む焼土が堆積している。袖石は焚口の両側に立てられた状態で検出された。構築当時の状態がこのこされているものと考えられる。袖石にはいずれも扁平な川原石が使用されている。

柱穴：1 径28cm 深さ40cm, 2 径24cm 深さ48cm, 3 径24cm 深さ56cm, 4 径28cm 深さ55cm, いずれも内部には粘土を含む砂が入っているが、柱痕は検出できなかった。このほか



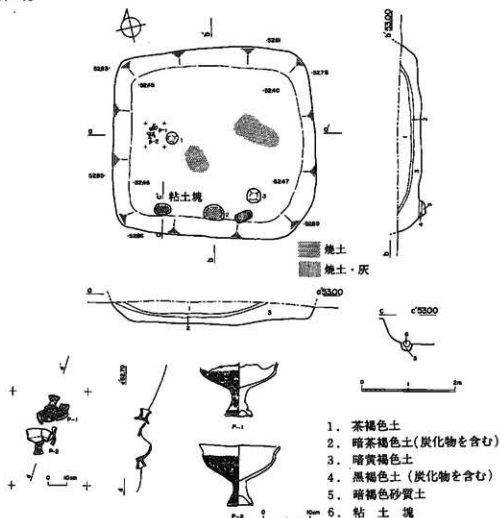
に東壁ぎわのカマドの両脇に1個ずつ、北東コーナー部壁ぎわに1個浅い柱穴がある。

床面：中央部の柱穴の内側がやや低くなっている。このくぼみの内部は、覆土3層よりも明るい砂質の褐色土で、ブロック状の粘土を多量に含んでいる。しかし覆土3層との境は不明瞭である。

炉跡：床面中央部に検出された。検出された床面より5cmほど高くなっており、掘りこみはみられない。中央西よりも、これより小さい焼土が検出された。

遺物

出土していない。



IV-10図 H-15実測図

遺構

位置：f-24・25 形状：ほぼ正方形 規模：南北3.70m×東西4.0m 深さ 0.44m 床面積 9.6㎡

カマド：カマドは検出されなかったが、カマド焚口に類似するピットがある。(後述)

柱穴：南東コーナー部に1個、中央西側に1個検出されている。前者は径32cm、深さ5cm、後者は径24cm、深さ5cmで、ほかの住居の柱穴に比べて浅い。

床面：地山の黄褐色土中にあり、中央部がやや低くなっている。床面中央部東よりに、炭化物を含む焼土が堆積していた。床面が焼けていないことから、ほかの場所からここに投棄され

たものと考えられる。

炉跡：中央南西よりに炉跡がある。床面よりわずかに高く、掘りこみはない。

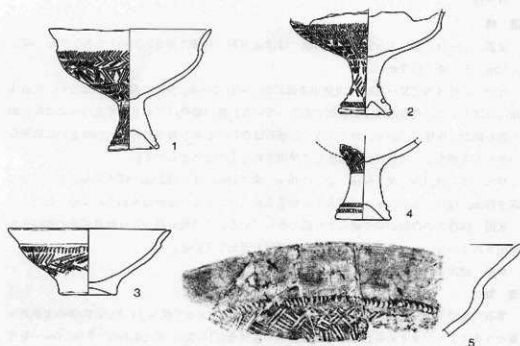
ピット：南壁ぎわに2個のピットがある。このうち南壁中央部にあるものは、形状・位置、内部に炭化物を含む黒褐色土が検出されていること、またこれの東よりには、ほかの住居跡で袖石に使用されているものと同様の扁平な川原石が出土していることなど、カマドの焚口に類似する要素が多い。しかし煙道は掘りこまれていない。

南壁西よりのピットからは、長さ28cm、幅12cm、厚さ10cmの黄灰色の粘土塊が出土した。

遺 物

高坏 (IV-11図-1・2)：西壁ぎわの床面上に2個の高坏が向い合った状態で出土した。1は口縁無文部がくびれ坏胴部には矢羽根状文と鋸歯状文を描いている。脚部にも縦の矢羽根状文を施し、この上に竹管文が付されている。裾部には刻文がめぐり、脚の下端には6ヵ所の切りこみがある。2は口唇部を欠損している。坏胴部には矢羽根状文と鋸歯状文を描き、この上に2本単位の縦位の刻線を8ヵ所配している。脚部には短刻線と竹管文、裾部には隆起帯上に刻文を付している。脚の下端には6ヵ所の切りこみをもつ。脚底の内側には、突起がつくり出されている。1・2とも内面は黒色で口縁部は横に、坏胴部は縦位に、ヘラ磨きが施されている。外面は明褐色。胎土中に石粒が少なく、焼成は良好である。

坏 (IV-11図-3)：覆土3層上部に出土。3分の2は欠損している。器高17.2cm、口径約17cm。口縁は無文。胴部には刻文と粗雑な矢羽根状文が描かれている。底面はくぼんでいる。内



IV-11図 H-15出土遺物

面は黒色で研磨。焼成良好である。

高坏 (IV-11図-4・5) : 4は覆土3層上部に出土。坏部の大部分を欠損している。坏胴部から脚上部にかけて、斜位の刻線を重ねて描いているらしい。据部には段をもち、この上に刻文がめぐっている。5は胎土・焼成及び文様からみて、5の脚部と同一個体の土器と考えられる。

H-16

遺 構

位置 : i-24・25, j-24・25 形状 : はほぼ正方形 規模 : 南北5.27m×東西5.25m 深さ0.62m 床面積 18.7㎡

カマド : 煙道方位N→E95° 東壁中央部につくられている。焚口に掘りこみはない。煙道床面はほぼ水平で、奥壁はほぼ垂直に立ち上っている。焚口は焼けており、煙道内部には炭化物を含む焼土が堆積している。カマド近くに袖石はない。しかし南東コーナーの壁ぎわに扁平な川原石が1個出土しており、袖石として使用されたものと考えられる。

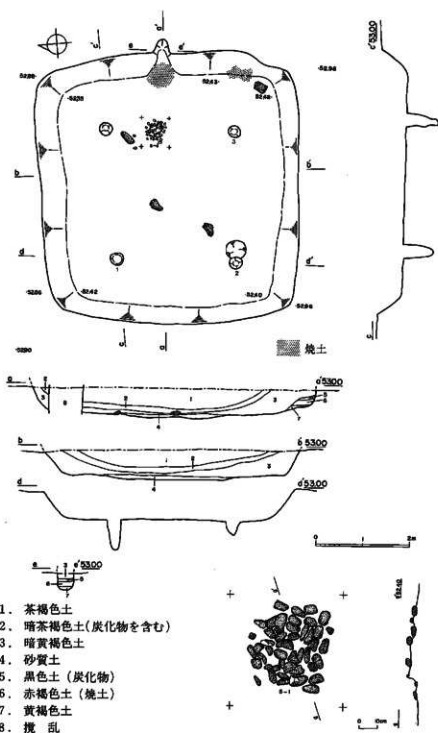
柱穴 : 1 径24cm 深さ64cm, 2 径26cm 深さ34cm, 3 径20cm 深さ50cm, 4 径28cm 深さ70cm。柱穴内部には粘土を混入する褐色土が入っている。柱底は検出されなかった。

床面 : 四柱穴の内側がやや周辺より低くなっている。この低い部分には暗黄褐色の砂質土が検出されている。また北壁近くの床面には礫層が露出している。

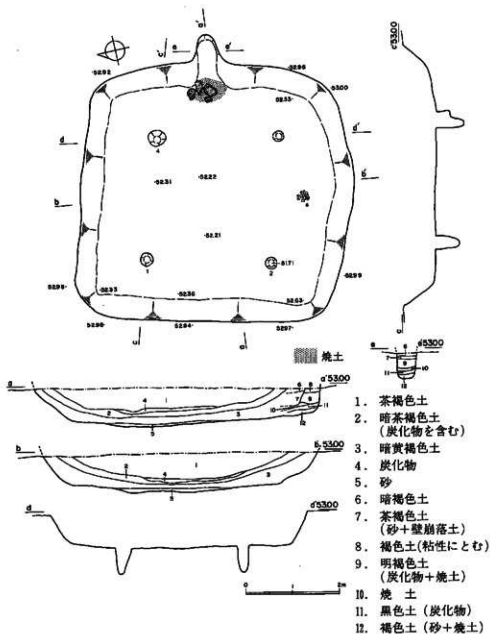
炉跡 : 検出されていない。

遺 物

集石 : カマド焚口の西約1mの床面直上に小礫がまとまって検出された。計60個の川原石が重なり合うようにまとめられている。計測値一長径最大10.3cm, 最小4.0cm, 平均7.6cm・短径最大6.2cm, 最小2.6cm, 平均2.4cm・重量最大250g, 最小55g, 平均145.3g。



IV-12図 H-16実測図



IV-13図 H-17実測図

遺 構

位置：h-25・26, i-25・26 形状：ほぼ正方形 規模：南北5.30m×東西5.07m 深さ0.81m 床面積 19.1㎡

カマド：煙道方位N→E93° 東壁中央部につくられている。焚口は焼けて堅くなっている。掘りこみはみられない。煙道床面は外へ向ってゆるやかに上り、奥壁はほぼ垂直に立ち上って

いる。煙道天井部は煙道内に崩落しているが、土層断面では煙出しの形状が、ほぼとらえられる。焚口には4個の石が出土しているが、このうち3個は扁平な川原石で、袖石として使用されたものと考えられる。

柱穴：1 径28cm 深さ51cm, 2 径25cm 深さ56cm, 3 径22cm 深さ58cm, 4 径32cm 深さ62cm。いずれも内部には粘土を混入した褐色土が入っている。柱痕は検出されなかった。

床面：中央部がわずかに周辺より低くなっている。この低い部分には黒褐色の砂が検出されているが、覆土3層との境は明瞭ではない。

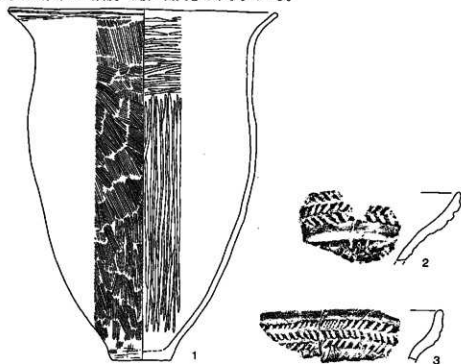
炉跡：検出されていない。

遺物

集石：南壁ぎわの床面に小礫が18個まとまって出土した。1個ずつ床面上に置かれた状態になっており、重なっていない。計測値—長径最大9.6cm, 最小4.8cm, 平均6.8cm・短径最大5.1cm, 最小2.6cm, 平均4.0cm・重量最大155g, 最小50g, 平均94.7g

深鉢 (IV-14図-1・2・3)：覆土3層上部に出土。1は器高37.2cm, 口径28.6cmの大型深鉢。口縁部は外反して端部まで直線的にのびている。口唇に一条の沈線をめぐるしている。器面は口唇部のみを横位に、以下を縦あるいは斜め方向のハケ目調整が行われている。内面は黒褐色で、胴上部から口唇部までは横に、以下底部まで縦にへうで磨かれている。焼成はきわめて良い。外面には炭化物がわずかに付着している。

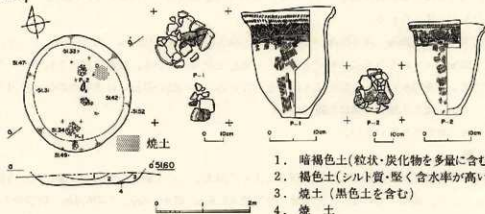
2と3は深鉢の口縁部。3段の刻文をめぐるしている。



IV-14図 H-17出土遺物

2 ビット

P-1



IV-15図 P-1 実測図

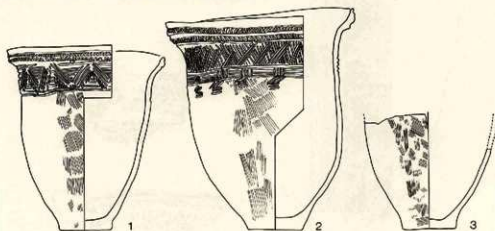
遺 構

位置：e-6・7 形状：ほぼ円形 規模：直径 2 m 深さ 0.3m

円形の浅い土堀である。床面はほぼ水平で、壁は傾斜している。東側の壁ぎわに炭化物を含む焼土が堆積していた。床面からは 3 個体の土器と、石が 1 個出土している。

遺 物

深鉢 (IV-16図-1・2・3)：1 は器高 19.4cm、口径 16.8cm の中型深鉢。口縁部はゆるく外反し、端部が立ち上がっている。口縁部外面に 2 段の刻文をめぐらしている。胴上部文様は、横走る沈線の上から、鋸歯状文を描き、これに沿って短刻線が付されている。内面は黒色。焼成は良好である。口縁部には一対の補修孔がある。



IV-16図 P-2 出土遺物

2は器高22.9cm、口径19.9cmの中型深鉢である。口縁部はゆるく外反し、端部がほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部外面には刻文が2段めぐり、胴部文様は上段に右下がりの刻線の上から左下がりの3本単位の刻線を、下段には横走する沈線の上に4本単位の縦位の刻線を描く。内面は黒色で、よく研磨されている。胎土中に砂粒が多く、焼成も不良である。口縁部に一對の補修孔がある。

3は深鉢の底部。内面は黒色で、焼成は良好である。

3 小 括

昭和56年度の調査区は、前年度の調査結果によって追加した北西部の2,100㎡と、南側の1,500㎡である。北西の調査区は南端部以外では微高地からはずれ、低くなっている。

住居跡は8軒検出された。前年度と同様にいずれも微高地にある。北西の調査区では北端に土境1基と南西から北東へ続く浅い溝跡が検出された。これらの遺構は、すべて前年度と同様に炭化物を含む落ちこみが確認されて判明したものである。この炭化物を含む住居跡の覆土1層と2層中からは前年度と同様にわずかの土器片が出土したのみであった。

住居跡の大きさをみると8軒中7軒は、およそ10㎡～20㎡の間にある。前年度発掘されたH-9のように小規模のものはなく、反対に1辺8mの床面積68㎡におよぶ大規模な住居跡H-13が検出された。

柱穴はH-12を除くほかの住居跡に検出されているが、H-13とH-15ではほかの住居跡と異なり、規則性がみられない。

住居跡の床面は、中央部がやや周囲より低くなっているものが4軒あった。この低い部分には粘土を含む砂が多く含まれているが覆土3層との境は明瞭ではなかった。

各住居跡の壁は、斜めになっている。壁ぎわには砂が堆積しているものが2軒あるが、前年度と同様に住居外から流れこんだものか、壁の崩落を示すものかを判別できなかった。

カマドの焚口には前年度調査と同様に、扁平な川原石が出土した。H-10のカマドでは、この石が両軸に立てられた状態で出土しており、これらの石が軸石として使用されたことが、ほぼ明らかになった。

H-15にはカマドが検出されていない。この住居の南壁にカマドの焚口に類似するピットが検出されているが煙道はつくられていない。前年度調査の9軒を含めて初めての例である。

住居跡は北西の調査区には1軒のみで、このさらに北側の微高地からはずれる部分には発見されなかった。南側の調査区では、55年度に検出された9軒に連続して調査区全域に住居跡の分布が広がる傾向にある。カマドの煙道方位は前年度の調査結果と同様に、北東ないし東向き

と北北東向きになっている。

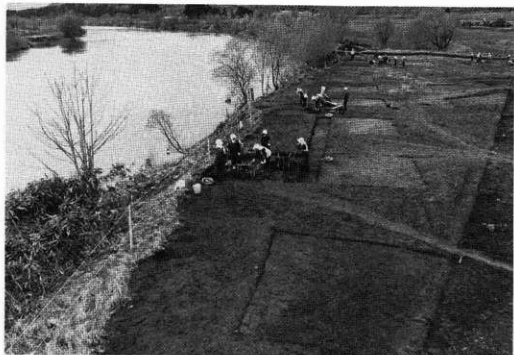
大型の住居跡H-13は、中央部から南西部にかけて大きな被掘壕がある。深さは1 m50cmほどで、砂礫層に達している。この被掘壕は、盗掘を目的にしたものか、あるいは砂の採取を行なったものであろう。（鬼柳 彰）



溝 跡

写 真 图 版

琴 真 圖 題



調査風景（北西）



全完掘風景



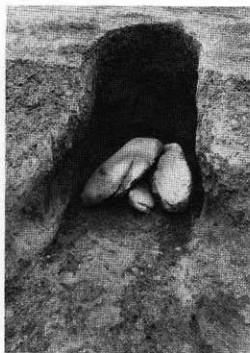
H-10 完 壺



H-10 カマド



H-11 完掘



H-11 カマド



H-12 完 掘



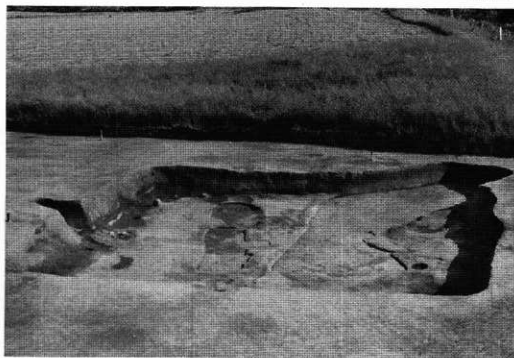
H-12 カマド・深鉢出土状況



H-12 深鉢出土状況



H-12 深 鉢



H-13 完 掘



H-13 カマド



H-13 炭化材出土状況



H-14 完 掘



H-14 カマド



H-15 完 攝



H-15 粘土出土状況



H-15 高 坏出土状況



H-15 高坏脚部



H-15 高坏



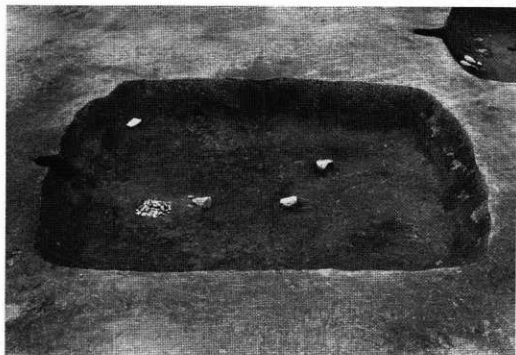
H-15 坏



H-15 高坏



H-15 炉跡と焼土



H-16 完 堀



H-16 カマド・集石



H-16 集 石



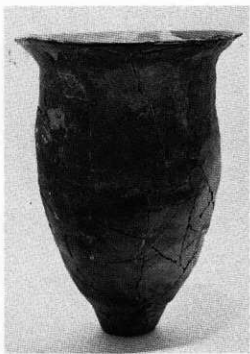
H-17 完 掘



H-17 カマド



H-17 深鉢出土状況



H-17 深鉢



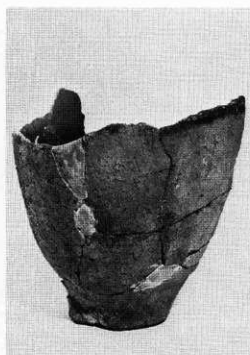
P-1 壳 掘



P-1 深鉢出土状況



P-1 深鉢出土状況



P-I 深鉢

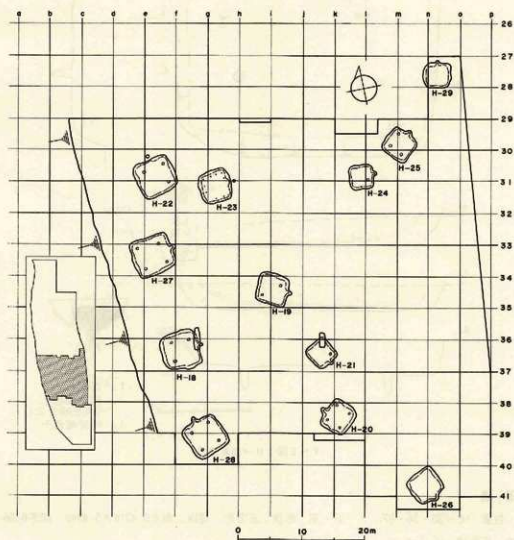


P-I 深鉢



P-I 深鉢

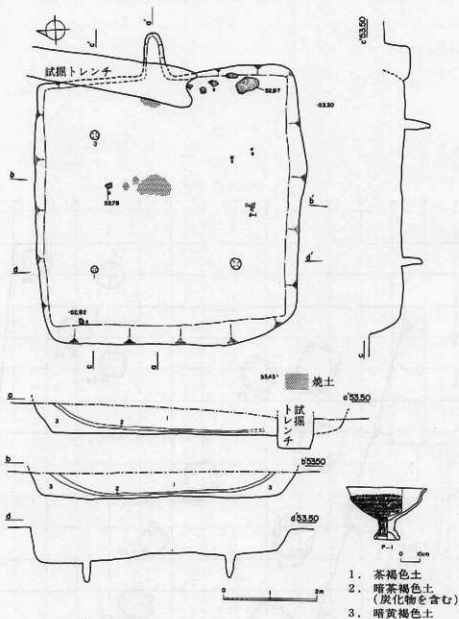
V 昭和57年度の調査



V-1 図 遺構位置図 (1/600)

1 住居跡

H-18



V-2 図 H-18実測図

遺 構

位置：e-35・36・37, f-35・36 形状：正方形 規模：南北5.42m×5.49m 深さ0.56m 床面積 25.7㎡

カマド：煙道方位N→E86° 東壁中央部につくられている。試掘トレンチによって切られて

いるが、焚口には焼土の堆積がみられる。煙道は外へ向ってゆるやかに上り、奥壁は急角度で立ち上っている。煙道内部に炭化物および焼土の堆積は確認されていない。袖石と考えられる扁平な川原石が南東コーナー部に2個出土した。このうち1個は床面にあり、ほかの1個は壁に立てかけられた状態で検出された。このほかにも10cm大の石が2個カマド近くにある。

柱穴：1 径16cm 深さ44cm, 2 径20cm 深さ50cm, 3 径20cm 深さ56cm。いずれも腐植土を含む砂が入っている。柱痕は検出されていない。南東コーナー部には柱穴が確認されなかった。

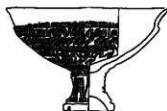
床面：四柱穴の内側がわずかに低くなっており、この部分には砂を多量に含む黄褐色土があらわれている。床面の形状は正方形で、コーナーはほぼ直角になっている。

炉跡：中央部北東より検出された。床面よりわずかに高く、掘りこみはない。

遺物

この住居跡の覆土2層からは、多量の炭化物に混って、練物の贅留が出土している。

高坏(V-3図)：南壁近くの覆土3層下部に出土した。器高10.9cm, 口径17.0cm。口縁無文部がくびれている。坏胴部上端には刻文がめぐり、以下に縦位の刻線、矢羽根状文、鋸歯状文が配されている。脚部にも鋸歯状文が施され、この上に竹管文が付されている。脚の上端と裾部に刻文がめぐり、脚の下端には6か所の切りこみがある。内面は黒色で、口縁部は横位に、坏胴部は縦位に磨かれており、光沢がある。胎土中に石粒の混入は少なく、焼成は良好である。



V-3図 H-18出土遺物

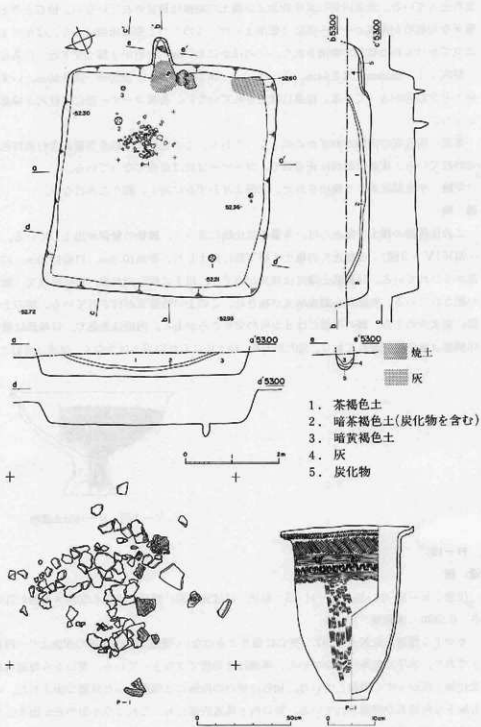
H-19

遺構

位置：h-33・34・35, i-34・35 形状：ほぼ正方形 規模：南北4.50m×東西4.70m 深さ0.26m 床面積17.8㎡

カマド：煙道方位N→E107° 焚口に掘りこみはない。煙道床面は住居の床面より一段高くなっており、水平に壁外へびでている。奥壁は急角度で立ち上っている。焚口から煙道内部には炭化物と灰がうすく堆積していた。袖石は焚口の南側に2個重なった状態で出土した。いずれも扁平な川原石が使用されている。焚口内と煙道内部にも、これより小型の石が出土した。

柱穴：1 径14cm, 深さ26cm, 2 径15cm, 深さ28cm。いずれも内部には腐植土を含む砂が入っており、柱痕は検出されていない。北西及び南東コーナーには確認されなかった。



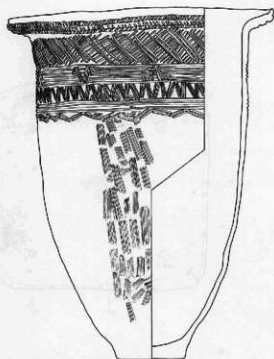
V-4 図 H-19実測図

床面：ほぼ平坦で水平になっているが全面に砂礫を含んでいる。床面の南東コーナー壁ぎわには灰が堆積している。中央の北東よりに深鉢1個体が出土した。これは多数の破片になっており、床面直上に貼りついた状態で検出されていることから、この面が生活面と考えて間違いないものと思われる。

炉跡：検出されていない。

遺物

深鉢(V-5図)：北西よりの床面直上に出土した。器高37.1cm、口径28.4cmの大型深鉢である。口縁は強く外反し、端部が垂直に方ち上っている。口縁部外面には3段の隆起帯があり、この上に刻文が付けられている。胴上部には左下がりの刻線上に3本単位の右下がりの刻線を描き、この下には横走する沈線上に、等間隔の針葉状文のモチーフを配している。最下段には山形文をめぐらしている。内面は黒色で口縁部は横位に、胴部から底部は縦位にへうで磨かれている。外面には炭化物が付着している。



V-5図 H-19出土遺物

H-20

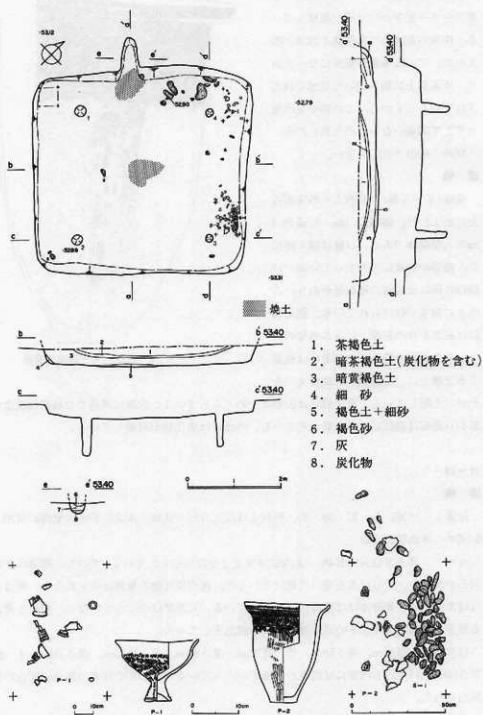
遺構

位置：j-38, k-37・38・39 形状：ほぼ正方形 規模：南北4.37m×東西4.01m 深さ0.50m 床面積15.8㎡

カマド：煙道方位N→E48° 北西壁中央北よりにつくられている。焚口から煙道にかけては凹凸が激しい。焚口は火を受けて焼けているが、灰や炭化物の堆積はみられない。煙道床面はほぼ水平にのび奥壁はほぼ垂直に立ち上っている。天井部はのこっていない。柏石と考えられる扁平な川原石がカマドの北東側床上に3個出土している。

柱穴：1 径23cm、深さ60cm、2 径22cm、深さ80cm、3 径16cm、深さ70cm、4 径18cm、深さ60cm。いずれも内部には褐色の腐植土が入っている。3と4では底の部分に灰色の粘土が検出された。

床面：四柱穴の内側にわずかに低くなっている。この部分からは覆土3層に砂を混入した土壌が検出されたが、覆土3層との境は不明瞭であった。遺物と炉跡の出土状態からみると生活



V-6 図 H-20 実測図

面は検出された床面より上部にあるものと考えられる。

炉跡：床面中央部に検出された。床面よりわずかに高くなっている。

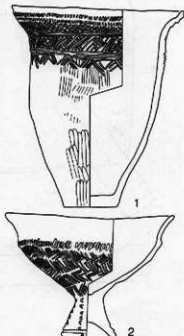
遺物

集石：北東壁ぎわに小礫がまとまって出土した。個数は58個である。計測値—長径最大10.5cm, 最小5.9cm, 平均7.8cm・短径最大4.9cm, 最小2.5cm, 平均3.9cm・重量最大280g, 最小50g, 平均121.7g

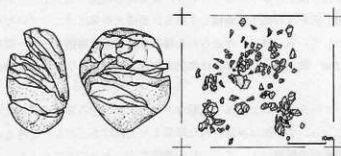
黒曜石剥片(V-8図)：80点ほどの剥片が住居跡北西コーナーの壁ぎわにまとまって出土した。接合を試みたところ3個体の円礫が復元できた。3個体とも小円礫になり、ほぼ同じような剥離過程である。図示したものは、もっとも原石の形状に近いもので、小円礫の長軸方向に沿って打点の順進がみられ、連続的な剥片剥離がおこなわれたことがわかる。左図では中央部分、右図では左辺の礫表皮面が打面であり、顕著な打面調整はみられない。復元した礫にはすきまがあるが、この部分の剥片のいくつかは石器として使われ、ほかのところへ持ち去られたものと考えられる。

高坏(V-7図-2)：北壁ぎわの床面上に出土した。器高12.8cm, 口径17.8cm。坏部が深く脚が低い高坏である。口縁無文部がくびれ、坏胴部には矢羽根状文を描いている。脚部には竹管文の列を縦に6か所配している。脚の裾部には段が2つめぐり、下端には1か所の切りこみがある。焼成はきわめて良好である。

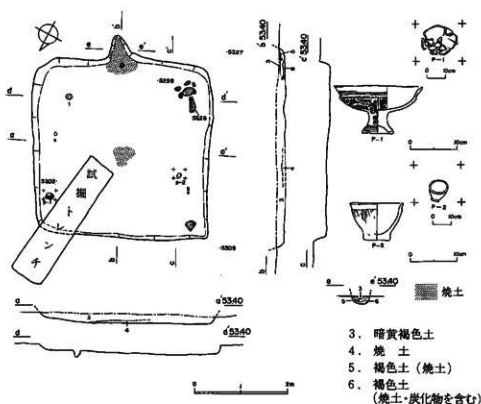
深鉢(V-7図-1)：覆土3層下部に出土した。口縁はゆるく外反し、端部が立ち上っている。口縁部外面には2段の刻文と斜交叉文が施され、胴上部には斜交叉文と鋸歯状文が描かれている。



V-7図 H-20出土遺物



V-8図 H-20出土剥片接合資料



V-9図 H-21実測図

遺 構

位置: j-36, k-36 形状: 正方形 規模: 南北3.58m×東西3.65m 深さ 0.22m 床面積 12.1㎡

カマド: 煙道方位N→E150° 南東壁中央部につくられている。竈口に掘りこみはない。煙道床面は竈口とほぼ同じ高さで水平になっており、奥壁は急角度で立ち上っている。竈口から煙道床面には炭化物和灰を含む焼土が堆積している。煙道天井部はのこっていない。竈口中央部に、礫が1個出土している。袖石と考えられる扁平な川原石は南西コーナー部に2個出土した。

柱穴: 1 径12cm 深さ16cm。内部には褐色土が入っている。このほかに柱穴は確認できなかった。

床面: ぜんたいに凹凸が多い。袖石・土器などの出土状況を見るといずれも床面から8cmほど上部にあることから、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられるが、覆土の掘り下げ、土層断面の観察によって、これを確認することはできなかった。

炉跡: 床面中央部に検出されている。床面より8cmほど高くなっている。

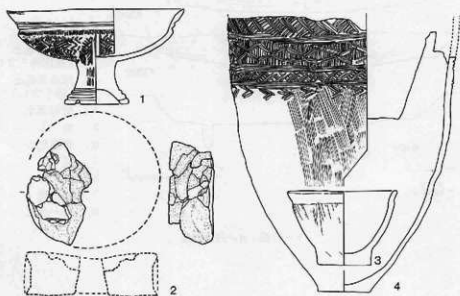
遺物

高坏(V-10図-1):北コーナー壁ぎわの覆土3層下部に出土した。器高10.0cm,口径18.8cm。坏部が浅く脚の低い高坏である。口縁無文部の下側に2条の凹線をめぐらせている。坏胴部文様は、3条単位の縦の刻線でぜんたいを4分割し、この間に縦と横の矢羽根状文を描いている。脚の裾部には3つの段がつけられている。下部は3分の2ほど欠損しているが切りこみが1か所入っている。内外面とも褐色で焼成は良好である。

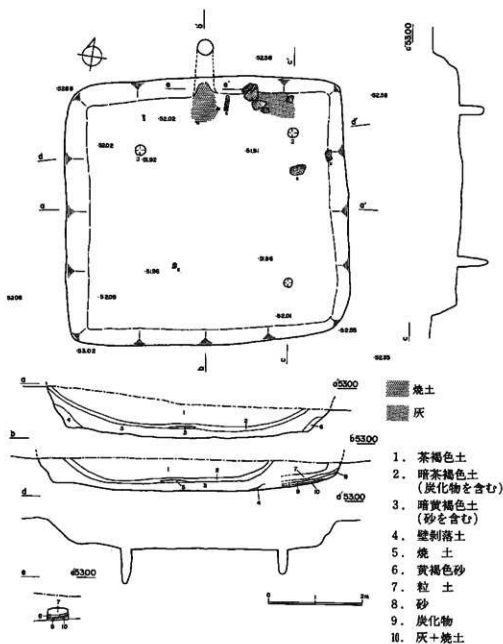
紡錘車(V-10図-2):覆土3層下部に出土した。3分の2が欠損しているが、径は7cmほどのものと思われる。厚さは2.3cm。両面ともに文様はみられない。

深鉢(V-10図-4):覆土3層下部に出土。上部を欠損している。文様帯は上段から、左下がりの刻線上に2本単位の右下がりの刻線・縦位の刻線上に連続する2本単位の刻線による菱形文・右下がりの刻線上に2本単位の左下がりの刻線を順に配し、この間にそれぞれ横走る刻線をめぐらせている。最下段には2本単位の矢羽根状文が等間隔に配されている。内面は黒色で縦にヘラで磨かれている。

坏(V-10図-3):西壁ぎわ覆土3層下部に出土。器高7.8cm,口径11.7cmの壳形品である。口縁は無文でわずかにくびれている。底には高さ1cmほどの台をもつ。表面は粗雑なハケ目がみられる。内面は黒色で、研磨されている。



V-10図 H-21出土遺物



V-11図 H-22実測図

遺 構

位置：d-30・31, e-30・31, f-31 形状：ほぼ正方形 規模：南北5.38m×5.79m 深さ 0.76m 床面積 24.7㎡

カマド：煙道方位N→W11° 北壁中央部につくられている。焚口は床面よりわずかに低くなっており、煙道は崩落せずにトンネル状にのこされている。焚口から煙道内部には、炭化物と灰が厚く堆積している。焚口の東側には炭化した木片が出土した。袖石と考えられる扁平な川原石は、焚口東側の壁ぎわに3個検出されている。

柱穴：1 径20cm 深さ76cm, 2 径17cm 深さ67cm, 3 径20cm 深さ50cm。いずれも内部には腐植土をわずかに含む砂が入っている。南西コーナー部には確認されなかった。

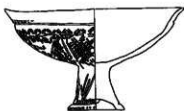
床面：ほぼ平坦で水平になっている。北東壁ぎわには炭化物を含む灰が堆積しており、袖石と考えられる石はこの上にある。

炉跡：検出されていない。

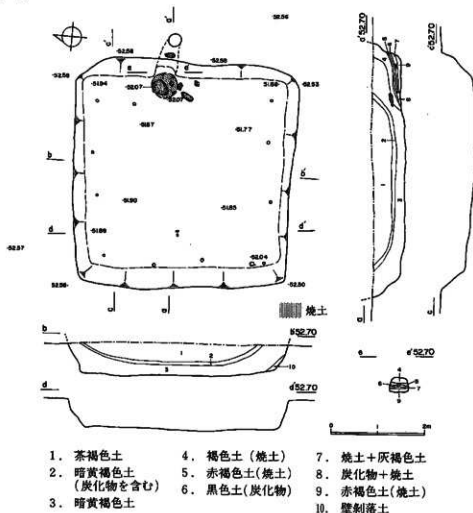
遺 物

高坏(V-12図)：東側床上に出土。器高10.5cm, 口径18.9cm。坏胴部には鋸歯状文、矢羽模状文、斜交叉文などが描かれている。脚部には3本単位の鋸歯状文。

据部に刻文がめぐられている。底部内側には突起がある。内面は黒色で、ていねいに研磨されている。



V-12図 H-22出土遺物



V-13図 H-23調査図

遺 構

位置：f-30・31, g-30・31 形状：ほぼ正方形 規模：南北4.51m×東西4.35m 深さ0.60m 床面積 16.1m²

カマド：煙道方位N→E90° 東壁中央部北よりにつくられている。焚口は円形に浅く掘りこまれており、煙道は崩落せずにトンネル状にのこっている。煙道は壁に対して直角方向よりやや南西向きである。煙道床面はほぼ水平に壁外へのび、煙出しの上部は外へ向って傾いている。焚口から煙道にかけて、炭化物を含む焼土が厚く堆積している。袖石と考えられる扁平な川原石が焚口内に1個倒れた状態で検出された。

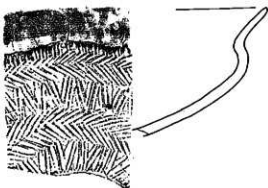
柱穴：壁ぎわに11個の小ビットが等間隔に検出された。断面をみると、径約5cm、深さ約10cm

で先端を尖らせた杭状の木を床面に打ちこんだものと考えられる。

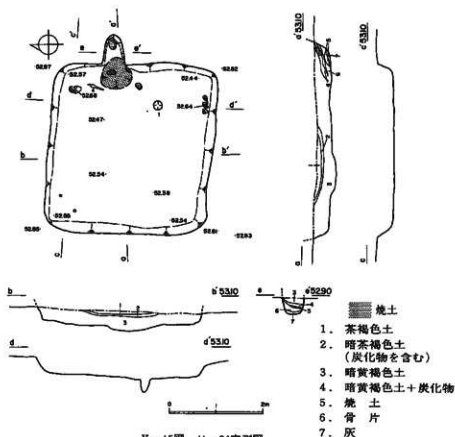
炉跡：検出されていない。

遺 物

高坏(V-14図)：覆土3層上部に出土した。口縁部破片である。口縁部が大きくくびれ、胴上部が張り出す。坏胴部には矢羽根状文と麗齒状文が描かれている。内面は黒色で、よく研磨されている。外面は明褐色。口縁部に一対の補修孔がある。



V-14図 H-23出土遺物



V-15図 H-24実測図

遺構

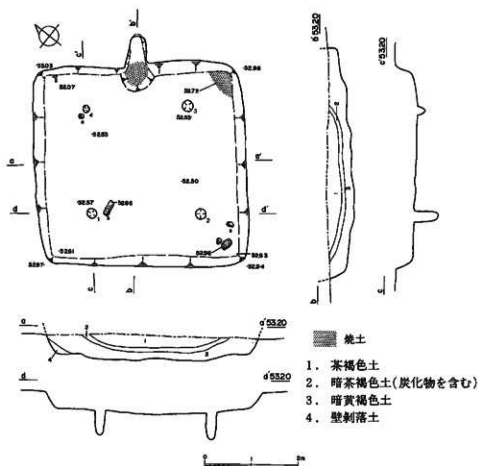
位置: k-30-31, l-30-31 形状: 正方形 規模: 南北3.30m×東西3.35m 深さ 0.40m 床面積 9.6㎡

カマド: 煙道方位N→E94° 東壁北よりにつくられている。焚口には円形の浅い掘りこみがある。煙道床面はほぼ水平に壁外にのび、奥壁は急角度で立ち上っている。焚口から煙道にかけて、炭化物を含む焼土が厚く堆積している。煙道内部に袖石と考えられる扁平な川原石が1個出土した。焚口内にもこれより小型の石が1個ある。

柱穴: 1 径20cm 深さ28cm。この柱穴は床面コーナーから離れ、カマドの焚口近くにある。内部には腐植土を含む砂が入っている。このほかに柱穴は確認されていない。

遺物

遺物は出土していない。



V-16図 H-25実測図

遺 構

位置：1-29・30, m-29・30 形状：正方形 規模：南北4.10m×東西4.20m 深さ 0.62m 床面積 15.4㎡

カマド：煙道方位N→E54° 北壁中央部につくられている。焚口は円形に浅く掘りこまれている。煙道床面はほぼ水平に壁外にのびており、奥壁は急角度で立ち上っている。袖石は出土を受けて焼けているが、焚口から煙道にかけて炭化物および灰の堆積はみられない。袖石は出土していない。

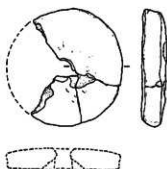
柱穴：1 径20cm 深さ58cm, 2 径20cm 深さ58cm, 3 径22cm 深さ24cm, 4 径16cm 深さ16cm。1と2は内部に黒褐色腐植土が、3と4では腐植土を含む砂が検出されている。柱痕は検出されていない。

床面：中央部がわずかに低くなっている。南東コーナ一壁ぎわは炭化物を含む灰が堆積していた。

炉跡：検出されていない。

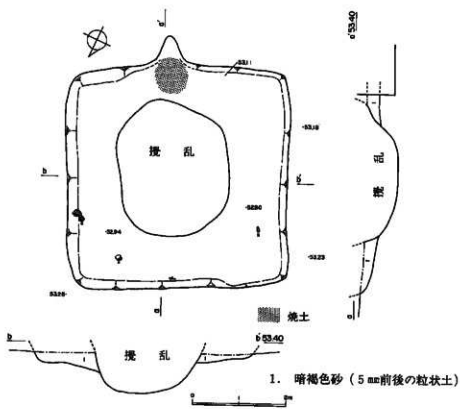
遺物

紡錘車（V-17図）：覆土3層中に出土した。径6.2cm、厚さ1.3cm。側面には浅い凹線がわずかにみとめられる。両面ともに文様はない。ぜんたいにつくりは粗雑である。



V-17図 H-25出土遺物

H-26



V-18図 H-26実測図

遺構

位置：m-40・41, n-40・41 形状：正方形 規模：南北4.63m×東西4.40m 深さ 0.40m 床面積 17.2㎡

カマド：煙道方位N→E157° 南東壁中央部につくられている。焚口に掘りこみはなく、煙道床面はほぼ水平に壁外へのびている。天井部はのこっていない。焚口から煙道にかけて焼土がわずかに堆積している。袖石は出土していない。

柱穴：検出されていない。

床面：中央部に約3m×2.2mの被堀溝があり内部には馬骨が一体、頭を北にして横臥した状態で検出された。足には蹄鉄、口には馬銜が付けられている。馬高は約1.6mほどで、蹄鉄の大きさからみて、開拓当時使用された農耕馬と考えられる。

床面の遺存する部分は凹凸がみられる。覆土は1層のみで、中央部以外にも攪乱を受けているものと考えられる。

炉跡：検出されていない。

遺物

出土していない。

H-27

遺構

位置：d-32・33・34, e-32・33・34 形状：台形 規模：南北5.68m×東西5.83m 深さ 0.82m 床面積 28.9㎡

カマド：煙道方位N→E84° 東壁中央部につくられている。焚口には掘りこみはない。煙道床面は浅く掘りこまれており、奥壁は急角度で立ち上っている。煙道には炭化物を含む焼土がわずかに堆積している。天井部はのこっていない。焚口には5個の川原石が出土しているが、このうち大型の2個は床に埋められた状態で出土していることから袖石として使用されたものと考えられる。このほかにも南東コーナー壁ぎわに袖石に使用したと考えられる扁平な川原石がある

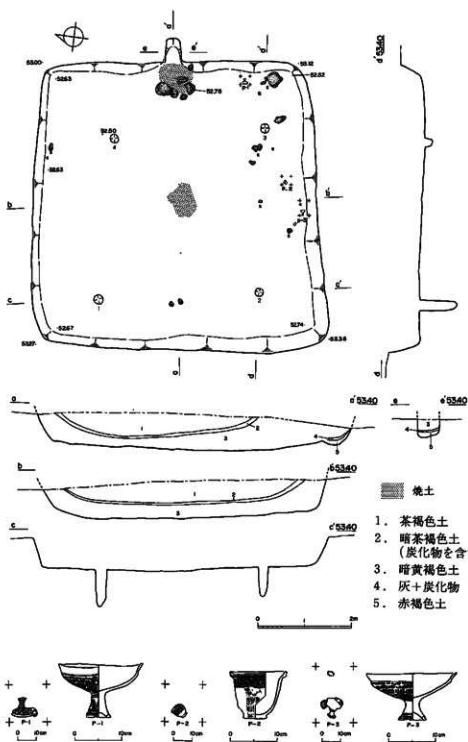
柱穴：1 径20cm 深さ60cm, 2 径18cm 深さ65cm, 3 径20cm 深さ81cm, 4 径18cm 深さ15cm。2は上部の45cmほどが空洞になっており、底には褐色の腐植土が検出された。1・3・4には腐植土を混入する砂が入っている。柱底は検出されていない。

床面：ほぼ平坦で水平になっている。遺物の出土状況からみて、検出された床面がほぼ生活面と一致するものと考えられる。

炉跡：ほぼ中央部に検出された。床面とほとんど同じ高さにある。

遺物

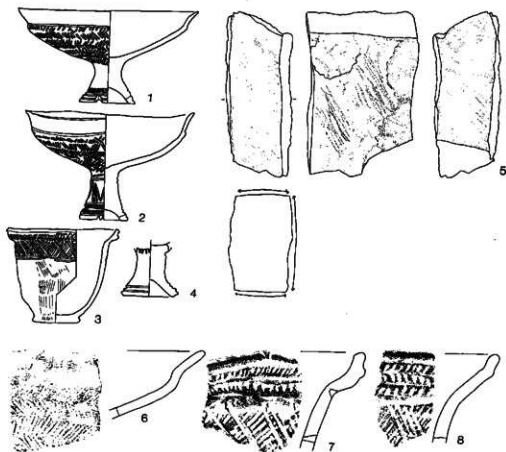
高環（V-20図-1・2）：1は床上に出土した。器高9.6cm, 口径19.2cm。環部が浅く、脚が低い高環である。環胴部には矢羽根状文が描かれている。脚部にはハケ目がわずかにみとめられ、



V-19図 H-27実測図

脚の裾部には段がつくられている。脚の下端には4か所の切りこみがある。内面は黒色で研磨されている。2は器高11.3cm、口径17.9cm。坏部が大きくゆがんでおり、2か所にひび割れがある。このひびは1cmほど開いており焼成中にひびが入ったものを、そのまま使用したものと考えられる。坏胴部には矢羽根状文と鋸歯状文が描かれている。胴部にも3本単位の鋸歯状文が施される。脚の上部には2条の刻線がめぐっており、裾部には刻線の間に刻文が付されている。脚の下端には2か所に2本単位の切りこみがあり、2か所は幅の広い切りこみがある。切りこみはそれぞれ相対する位置にある。内面は黒色で研磨されている。

深鉢（V-20図-3）：床上に出土した。器高9.9cm、口径11.9cm。口縁部は強く外反して、端部は垂直に立ち上っている。口縁端部には一条の凹線をめぐらし、この下に矢羽根状文を配している。胴上部には左下がりの刻線に2本単位の刻線を描き、この下段に2条の横走る沈線をめぐらしている。刻線はいずれも粗雑に描かれている。底部には張り出しがある。内面は黒色で、口縁部は横位に胴部以下は縦位にヘラで磨かれている。焼成は良好である。



V-20図 H-27出土遺物

高坏 (V-20図-4・6): 覆土3層上部に出土。4は脚部のみである。裾部には段が2つある。6は1とはほぼ同様の器形・文様と考えられる。

深鉢 (V-20図-7・8): 覆土3層中に出土。口縁に刻文をめぐらし、胴上部には、左下がりの刻線上に右下がりの2本あるいは4本の刻線を描いている。

砥石 (V-20図-5): 床面に出土。砂岩製。幅約4cm、高さ8cmである。長さは約12cmあるが破損している可能性がある。側面にも斜め方向の使用痕がある。

H-28

遺 構

位置: f-38・39, g-38・39 形状: ほぼ正方形 規模: 南北5.19m×東西5.49m 深さ0.46m 床面積 26.7㎡

カマド: 煙道方位N→W17° 北壁中央西よりにつくられている。焚口に掘りこみはない。煙道床面は外へ向ってゆるやかに上り、奥壁は急角度で立ち上っている。煙道天井部はのこっていない。焚口から煙道内部には、灰を含む焼土が堆積している。カマド付近に袖石は検出されていないが、北東コーナー部床上に10個の川原石があり、この中に袖石として使用されたものが含まれているものと考えられる。

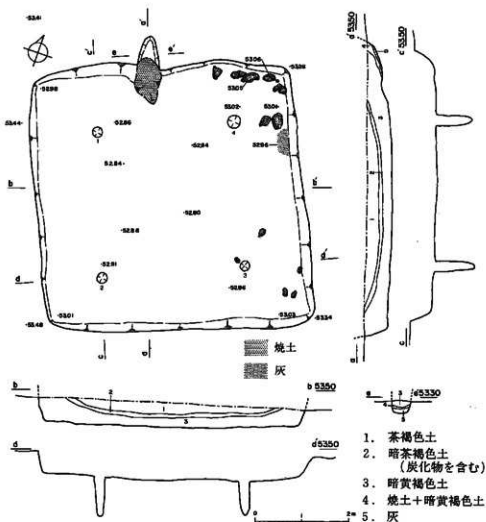
柱穴: 1 径22cm 深さ78cm, 2 径20cm 深さ85cm, 3 径22cm 深さ72cm, 4 径24cm 深さ92cm。いずれも内部には、腐植土を含む砂が入っている。柱痕は検出されていない。

床面: ほぼ平埒で、水平につくられている。北東コーナー部の川原石は検出された床面直上にあるが、出土した土器はすべて10cmほど、床面の上部にある。東壁北部には、炭化物を含む灰が堆積している。

炉跡: 検出されていない。

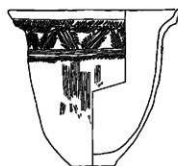
遺 物

深鉢 (V-22図): 覆土3層下部に出土。器高16.5cm、口径17.9cmの中型深鉢である。口縁部

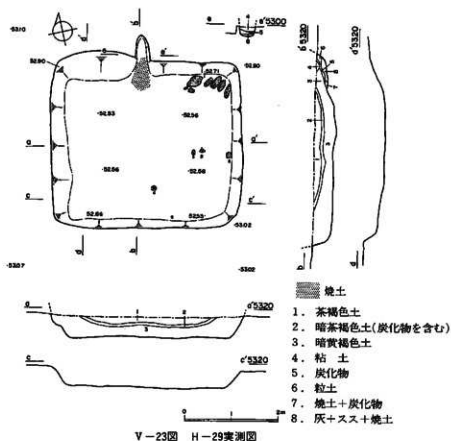


V-21図 H-28実測図

は外反し端部が立ち上っている。口縁部外面に1条の沈線と、その下に矢羽模状文をめぐらしている。頸部には左下がりの刻線をめぐらし、胴上部には鋸歯状文を描く。この鋸歯状文の上下に沿って刻文を付けている。文様帯の最下段には3条の横走る沈線と刻線文をめぐらせている。内面は黒色。胎土には細かな石粒を多量に含み、焼成は不良。



V-22図 H-28出土遺物



遺 構

位置：m-27・28, n-27・28 形状：長方形 規模：南北3.40m×東西3.85m 深さ 0.42m 床面積 9.65㎡

カマド：煙道方位N→E 北壁中央やや西よりにつくられている。焚口は検出された床面より10cmほど高くなっている。煙道床面はほぼ水平に壁外へのび、奥壁は急角度で立ち上っている。煙道天井部はのこっていない。袖石と考えられる扁平な川原石は、北東壁ぎわに5個並べられた状態で出土している。

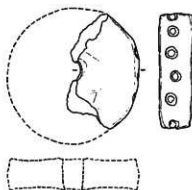
柱穴：検出されていない。

床面：凹凸が多いが、ぜんたい的にほぼ水平になっている。カマド焚口の高さ・袖石の出土の状況を見ると、生活面は検出された床面より上部にあったものと考えられる。しかし覆土の掘り下げ、土層断面の観察によってこれを確認することはできなかった。

炉跡：検出されていない。

遺 物

紡錘車(V-24図): 覆土3層中に出土。3分の2を欠損しているが径は約7cmとみられる。両面には文様はなく、側面に竹管文が等間隔に施されている。



V-24図 H-29出土遺物

2 小 括

昭和57年度の調査区は、56年度調査区の南に続く部分で、調査面積は3,000㎡である。住居跡は12軒検出された。

住居跡の覆土2層が形成された時期については、昭和55・56年度の調査結果から結論を出すことはできなかった。この年の調査では一例のみであるが、H-18の覆土2層から開拓当時に使用されたものとみられる練物の贅留が出土した。このことから覆土2層にみられる多量の炭化物は、この付近で開墾が行なわれたころの野焼きによって形成されたものと考えられる。

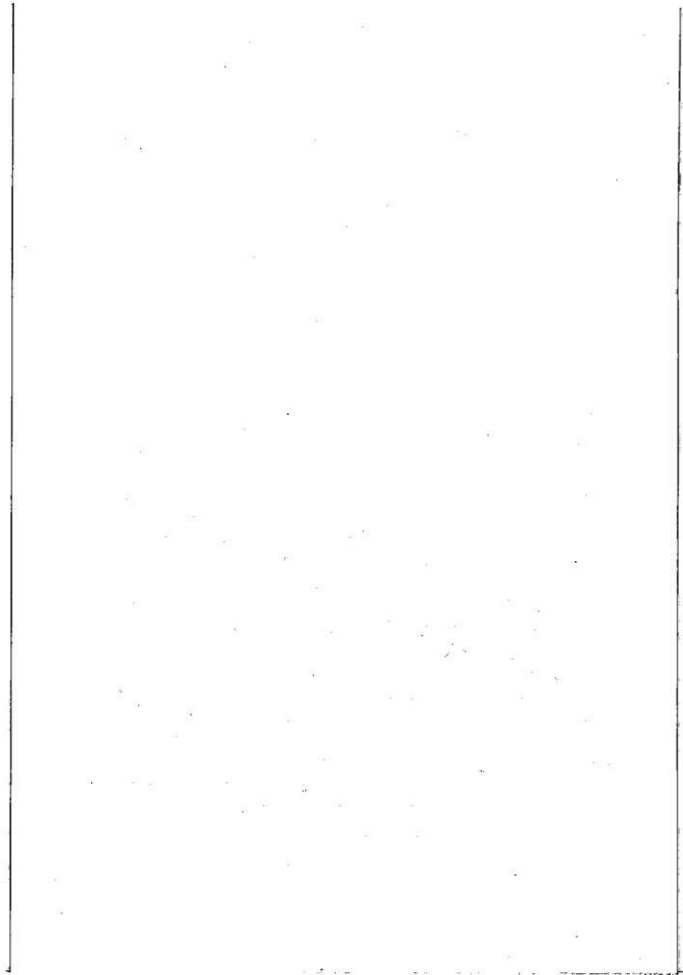
またH-26では住居跡の中央部に被掘溝があり、開拓当時使役されていたと考えられる馬の骨が一体埋められていた。おそらく死亡した馬を開墾前までのこっていた住居跡のくぼみに穴を掘って埋めたものと考えられる。このことから本遺跡付近に住む人々の話の通り、開拓時代には住居跡のくぼみがのこされていたことは間違いないことと考えられる。

この年の調査によって初めて、カマドの煙道が崩落せずに構築当時の状態でのこされている住居跡が2軒発見された。

住居の壁は、過去2年の調査の結果と同様に傾斜しているものが多いが、H-22・25では壁の崩落土と考えられる層位が確認された。H-19・28では壁がほぼ垂直に近い立ち上りをもっており、構築時の状態をほぼのこしているものと考えられる。H-18付近では地山に砂の混入が少ないため壁がほとんど崩れなかったものであろう。

カマドの煙道方位には、南南西すなわち天塩川の川上を向いている例が2軒あった。ほかの10軒では、煙道方向がおおむね昭和55・56年度調査によって検出されたものと同様である。

住居跡の分布をみると、調査区北東部の3軒と西側の天塩川に平行して2列に並ぶものに分かれている(鬼柳 彰)



写 真 图 版

筆真圖



遺跡遺景



全完掘風景



H-18 完掘



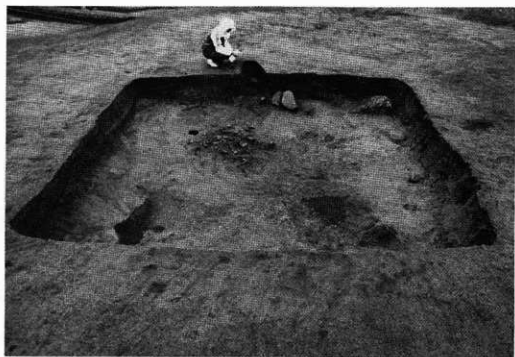
H-18 カマド



H-18 高 坏



H-18 高坏出土状況



H-19 完掘



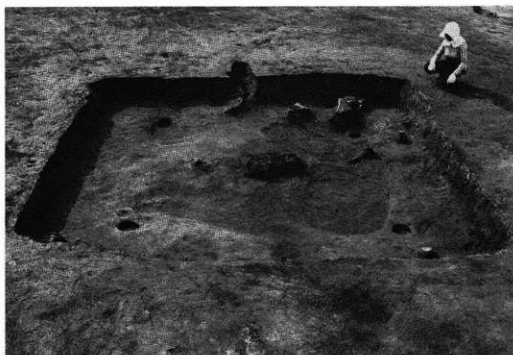
H-19 カマド



H-19 深鉢出土状況



H-19 深鉢



H-20 完 掘



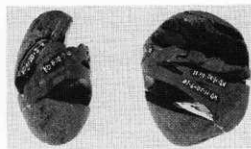
H-20 カマド



H-20 深鉢出土状況



H-20 高坏出土状況



H-20 接合資料



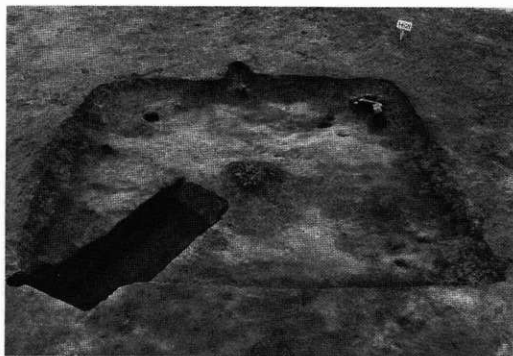
H-20 集石



H-20 深鉢



H-20 高杯



H-21 実 掘



H-21 カマド



H-21 高環出土状況



H-21 深鉢出土状況



H-21 坏出土状況



H-21 坏



H-21 紡錘車



H-21 高 坏



H-21 深 鉢



H-22 竈 掘



H-22 カマド



H-22 高 坏



H-23 完掘



H-23 カマド



H-24 完 壺



H-24 カマド



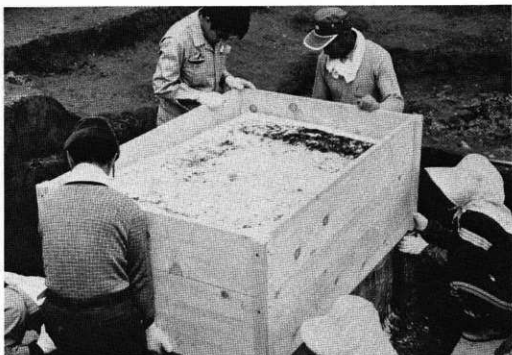
H-25 完 掘



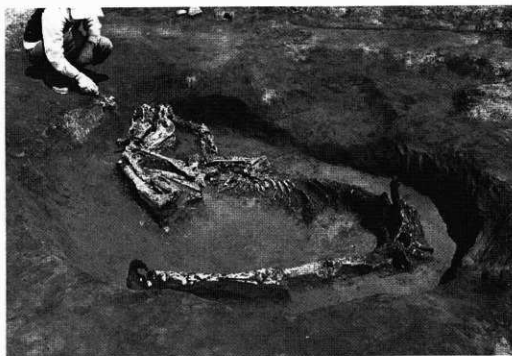
H-25 カマド



H-25 紡錘車



H-26 カマド取り上げ風景



H-26 馬骨出土状況



H-27 発掘



H-27 カマド



H-27 高坏出土状況



H-27 深針出土状況



H-27 高坏脚部



H-27 高坏



H-27 高坏



H-27 深鉢



H-27 床面出土土器セット



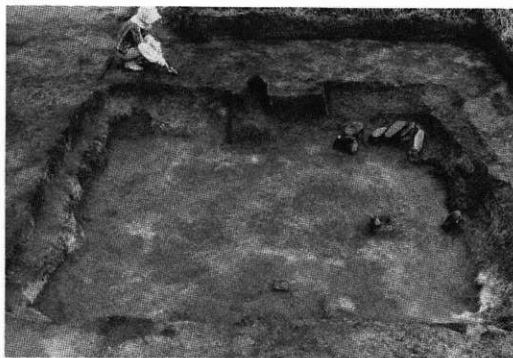
H-28 完 掘



H-28 カマド



H-28 深鉢



H-29 売堀

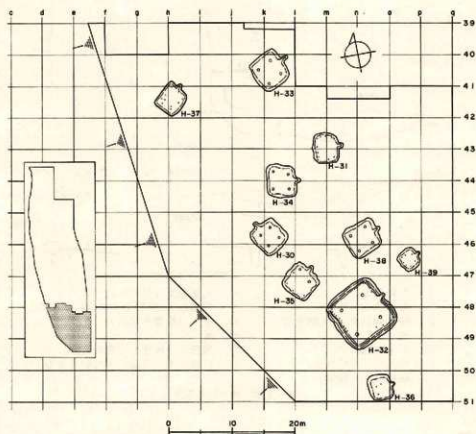


H-29 カマド



H-29 紡錘車

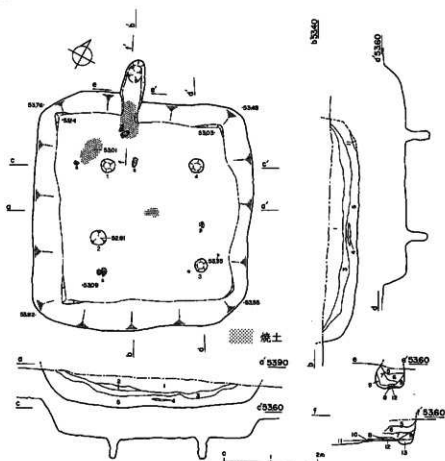
VI 昭和58年度の調査



IV-1 図 遺構位置図 (1/600)

1 住居跡

H-30



- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. 茶褐色土 | 8. 黄褐色土 (粘性土) |
| 2. 茶褐色土 + 焼土 | 9. 暗褐色土 (黒色土と炭化粒が混在) |
| 3. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 10. 焼土 (焼骨を含む) |
| 4. 焼土 | 11. 焼土 |
| 5. 暗黄褐色土 | 12. 黒色土 (炭化粒を含む) |
| 6. 暗褐色土 (粒状土) | 13. 暗褐色土 (多量の炭化粒を含む) |
| 7. 暗褐色土 (砂質) | |

VI-2 図 H-30実測図

遺構

位置: j-45・46, k-45・46 形状: 正方形 規模: 南北4.63m×東西4.6m 深さ 0.64m
床面積 14.2㎡

カマド: 煙道方位 N → W29° 北壁の中央部やや西よりにつくられている。煙道は壁より85cm外へ張り出す。煙道床面は外へ向ってゆるやかに上っており、煙出しはほぼ垂直に立ち上っている。煙出し直下には、煙出しを先に掘り込んだ時にできたと考えられる径20cm、深さ10cmの

円形のくぼみをもつ。竈道天井部は崩落しているが、内部には黒色土が堆積していた。竈口の西側から川原石が2個出土したが、径15cmほどで袖石とは考えられない。

柱穴：1 径32cm 深さ44cm，2 径34cm 深さ18cm，3 径26cm 深さ50cm，4 径32cm 深さ46cm。いずれもほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴内には黒褐色土が入っている。柱痕は検出されていない。

床面：わずかな凹凸はあるが、ほぼ平坦で固くしまっている。

炉跡：住居跡中央部に検出されたが、床面より20cmほど上部にある。

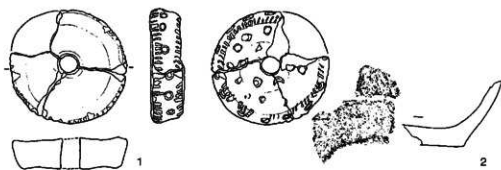
遺 物

床面から紡錘車・礫、覆土中から土器破片・礫などが出土した。

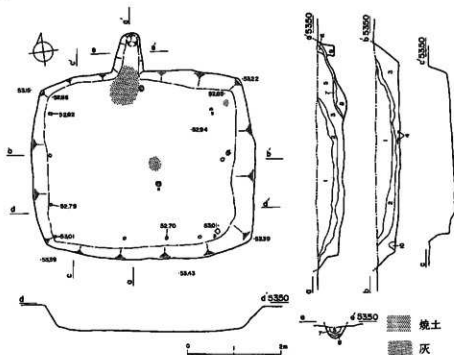
紡錘車(VI-3図-1)：住居跡南東壁ぎわの床面から出土した。直径6.2cm，厚さ1.4cm，中心の孔の径1.0cmで、断面は台形である。表面と裏面の周縁にキザミが施されている。裏面と側面には、竹管状の施文具による刺突がある。側面にも等間隔に刺突文が並んでいる。孔の周縁はわずかにもり上がっている。

深鉢(VI-3図-2)：覆土3層出土の深鉢底部破片である。中型の深鉢と考えられる。厚さ5mmほどで、焼成は悪い。表面は磨滅しており、わずかにハケによる調整の跡がのこっている。内面は斜方向のヘラによる調整が行われており、黒色である。

柱穴確認のため床面を掘り下げたところ、カマド竈口の東西から焼土が検出され周辺から縄文土器の破片2点と黒曜石のフレイク1点が出土した。この住居跡付近には縄文時代の遺物包含層が確認されていることから、縄文時代の焼土と考えられる。



VI-3図 H-30出土遺物



VI-4 図 H-31実測図

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 暗黄褐色土+灰・焼土 |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 7. 黒色土(炭化物と灰を含む) |
| 3. 暗黄褐色土 | 8. 焼土 |
| 4. 焼土 | 9. 暗黄褐色土 |
| 5. 炭化物+暗黄褐色土 | 10. 攪乱 |

遺構

位置：m-47・48・49, n-47・48・49 形状：長方形 規模：南北4.72m×東西3.95m 深さ0.48m 床面積 13.9㎡

カマド：煙道方位N→E95° 東壁中央部につくられている。焚口はわずかに掘りこまれており、煙道は外へ向って上っている。煙道の天井部分は崩落していた。煙出しの直下をさらに掘りこんで直径20cm、深さ16cmのピットがあった。このピットの上面には、焼土・炭化物層が堆積していた。焚口からは直径15cmほどの礫が1個出土したが軸石のようなものはない。

柱穴：ほかの住居跡にみられるような、四本柱跡は検出されなかったが、壁ぎわをめぐる9個のピットが検出されている。径5～8cm、深さ6～30cmの小さなピットで、カマドがある東壁にはみられず、北壁に4個、西壁に3個、南壁に2個検出されている。断面をみると先端を尖らせた枕状の木を床面に打ちこんだものと思われる。

床面：床面は中央部がやや低くなっている。全体に凹凸が多い。南東のコーナー近くには、

灰がわずかに堆積している。

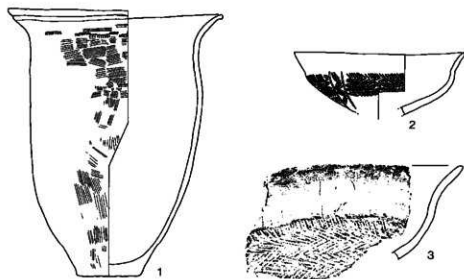
炉跡：床面中央部には炉跡と思われる焼土があった。

遺物

深鉢（VI-5図-1）：覆土3層出土。器高27cm，口径22cm。口縁部に粗雑な沈線がめぐるのは無文。口縁部には横位に，胴部には縦位のハケ目調整がみられる。内面は黒色で，横位のへら磨きがみとめられる。

高坏（VI-5図-2）：覆土3層出土。坏部分のみ出土した。口径19cm。2本単位の縦の刻線の上に矢羽根状の刻線を施している。口縁部の無文帯は横位に調整されている。口縁部内面は横位に，坏胴部内面は縦位のへら磨きがみとめられる。

高坏（VI-5図-3）：床面出土。南西のコーナー近くから出土した。口縁部破片である。胴部には斜めの短刻線と矢羽根状の刻線が描かれている。



VI-5図 H-31出土遺物

遺構

位置：m-47・48・49, n-47・48・49, 0-47・48 形状：ほぼ正方形 規模：南北9.12m×東西8.70m 深さ 0.66m 床面積 54.0㎡

カマド：煙道方位 N → E64° 東壁中央部につくられている。焚口は浅い掘りこみをもつ。煙道は外へ向ってゆるやかに上っており、煙出しはさらに急勾配で立ち上っている。袖石は焚口に向けて倒れた状態で北側に2個、南側に2個検出された。ともに扁平な川原石が使用されている。焚口の床面、煙道の天井部および床面は焼けて堅い。煙道はつぶれており、天井部直下に焼土、灰が堆積している。

屋内構築物：幅30cm～50cm、高さ10cm～15cmの盛り土（ベンチ状構築物）が壁ぎわに構築されている。このベンチ状構築物は土層断面図で明らかのように、ベンチ状に掘りのこしたのではなく、床面上に土を盛って構築したものである。この内側の壁ぎわには小ピットが不規則に並んでおり、壁には横列に棒状の痕跡と思われる腐植物が一部に残存していた。これからみて小坑を立て、棒状のものを横に組んで土止めをしていた可能性があらう。

柱穴：1 径20cm 深さ70cm, 2 径16cm 深さ58cm, 3 径16cm 深さ116cm, 4 径20cm 深さ52cm。埋土は褐色土である。床面では柱穴の輪郭を明瞭にすることができず、ひょうたん形の明褐色土が識別された程度であった。また柱穴4の上には砂利、小礫がおおい、この明褐色土も明瞭でなかったが断面観察の結果、上記の規模を確認することができた。断面によると床面で確認した明褐色土は柱穴の上部を覆っている。また柱穴4の上を覆っていた砂利・小礫は明褐色土の中にも混入している。これらのことから四本の柱は住居廃棄後に抜き取られたものと考えられる。

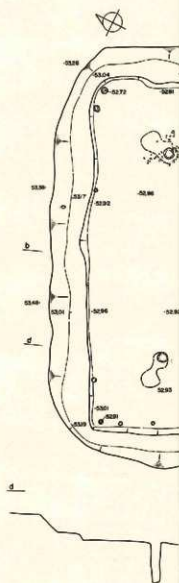
床面：わずかに凹凸があり、軟弱である。地山（砂質）の上には暗黄褐色土に黄色土が混入した土が数cm堆積しており、焼土、カマドのレベルからみてこの堆積土の上面が床面と思われる。この床面上には全面に薄く黄色砂が堆積していた。南東壁寄りには焼土、炭化物、灰が広く厚く堆積しており、これには土器片、紡錘車片、礫などが含まれていた。

炉跡：床面から焼土が3カ所確認されたが、炉跡に相当するものか否か不明瞭である。

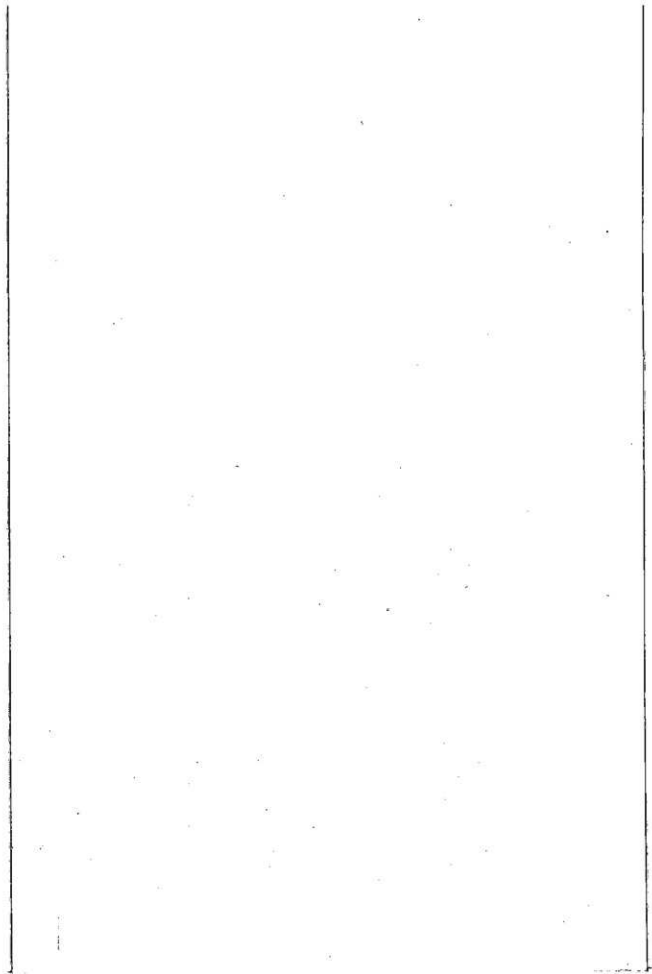
遺物

深鉢（VI-7図-6）：南東壁中央部床面より出土。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はほぼ垂直に立ちあがる。口縁部内面は横ナデ調整を施し、胴部内面は縦方向にみがかれている。口縁部外面は一段の隆起帯の上に斜位の刻文が付されている。頸部には6～12本の刻線により鋸歯状文が描かれ、その上に山形あるいは横位の刻線文が描かれている。胴部には3～5本の刻線で鋸歯状文を描き、その両脇に丸味をもつ列点文が付されている。色調は外面が淡灰褐色、内面は黒色である。

高坏（VI-7図-1）：カマドの南側、床面より内面を上にし、押しつぶされた状態で出土。器高は11.6cm（坏部6.2cm、胴部5.4cm）、口径は17.8cmである。坏胴部はわずかなふくらみをも



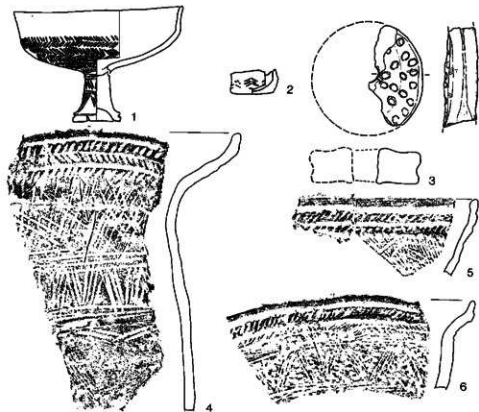
1. 現耕作土
2. 茶褐色土
3. 暗茶褐色土(炭化物を
4. 暗黄褐色土
5. 暗茶灰色土(粒状土
6. 暗黄灰色土
7. 暗黄褐色土+焼土



つ。口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、口縁端部はわずかに外反する。口縁部内外面はていねいな横ナデ調整が施され、胴部内面は縦方向にていねいに磨かれている。肩部外面の文様は横位の矢羽根状文が平行して一周する。脚部には二条の沈線がめぐり、それぞれ3本の刻線文を一単位とする鋸歯状文が描かれている。また脚部には一条の沈線がめぐり、脚の下端には等間隔に三角形の5カ所の切りこみがある。焼成は良好で堅緻。色調は外面が暗灰色、内面は黒色である。

紡錘車 (VI-7 図-3) : 南東壁中央部の焼土、炭化物、灰の堆積物の中より出土。径6cm、厚さ1.7cm。中央部には径0.6cm~0.7cmの孔があげられている。孔のまわりと周縁部はわずかに隆起し、側面中央部はくぼんでいる。断面はほぼ長方形である。片面には不規則に竹管文が付されている。色調は暗灰褐色。焼成は良好である。

深鉢 (VI-7 図-4・5) : 4は覆土3層より出土。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はほぼ垂直に立ちあがる。口縁部内面は横ナデ調整、頸部内面には短いケズリ痕がみられ、胴部内面は縦方向にみがかれている。口縁部外面には低い隆起帯の上にハの字状の刻文が付されている。頸部には斜位の刻線がめぐり、胴部には3本の横走る沈線の間に3~4本を単位とする鋸歯状文が描かれている。胴下部には2本単位のゆるやかな山形文が付されている。5は覆

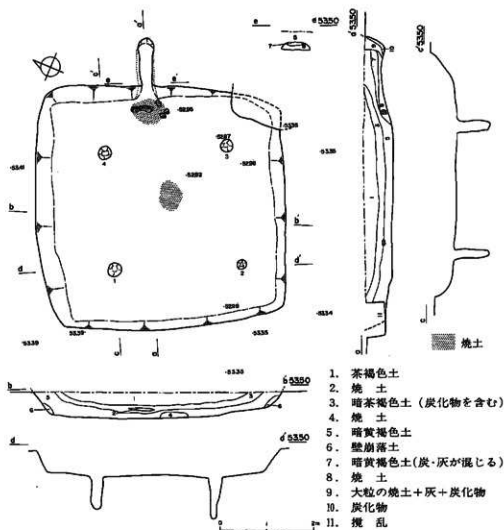


VI-7 図 H-32出土遺物

土3層より出土。口縁部は内湾しつつ立ちあがる。口縁部内面は横ナデ調整を施す。口縁部外面は低い二段の隆起帯の上に斜位の刻文が付されている。胴部残存部には斜位の刻線を不規則に交差させている様子がうかがえる。焼成は良好で堅緻、色調は外面が暗灰色で、内面は黒色である。

ミニアチュア土器(VI-7 図-2)：カマドの北側、覆土3層より内面を下に向けて出土。器高2cm、口径5cmで口縁部内外面はていねいな横ナデ調整が施されている。外面の調整は粗く、2～3本の刻線で粗雑な山形文を描いている。色調は外面が淡褐色、内面は暗灰褐色である。焼成は良好である。

H-33



VI-8 図 H-33実測図

遺 構

位置：j-40・41, k-39・40・41 形状：正方形 規模：南北5.25m×東西5.17m 深さ0.62m
床面積 22.2㎡

カマド：煙道方位 N → E27° 東壁中央部につくられている。煙道は外へ向って斜めに上っている。天井部分は崩落していた。焚口からは袖石と思われる礫が5個、倒れた状態で出土した。

柱穴：1 径8cm 深さ52cm, 2 径14cm 深さ74cm, 3 径10cm 深さ82cm, 4 径14cm 深さ87cm。3は、内部が空洞になっていた。柱はのこっていないかったが、半截後、石コウで空洞部を一部充填し、形取りすることができた。これによると、柱の断面は一辺12cmほどの三角形で、柱の先端はほぼ平らになっている。

床面：中央部が周辺部よりもやや低くなっている。東のコーナーは後代の掘りこみによって破壊されていた。南西壁の中央部にもわずかに擾乱がみられる。

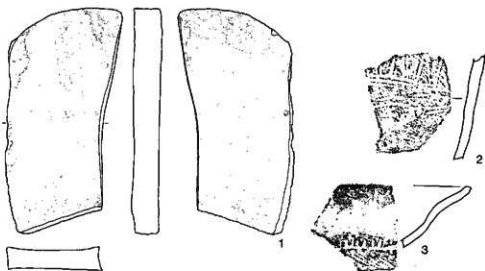
炉跡：床面の中央部から炉跡と思われる焼土が検出された。床面より5cmほど高くなっている。

遺 物

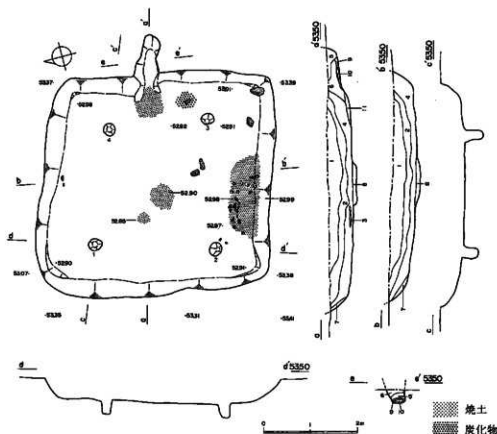
深鉢(VI-9図-2)：床面出土。胴部破片である。ハケ目調整の上に縦の刻線が施され、それを切って不揃いな刻線が横走している。内面は黒色で、縦にへら磨きされている。

高坏(VI-9図-3)：床面出土。口縁部破片である。横にへら磨きされている。文様帯はわずかにのこっているのみであるが、縦の短刻線とその下に斜めの短刻線がみられる。内面は黒色で、横位にへら磨きされている。

砥石(VI-9図-1)：床面出土。砂岩製である。両面と一側縁が使用によってなめらかになっている。



VI-9図 H-33出土遺物



- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 茶褐色土 | 7. 壁崩落土 |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 8. 暗黄褐色土(粘性はなく砂質) |
| 3. 焼土 | 9. 焼土を含む黒色土 |
| 4. 暗黄褐色土 | 10. 焼土 |
| 5. 粒状の焼土を含む暗黄褐色土 | 11. 焼土+炭化物 |
| 6. 炭化物を含む暗黄褐色土(粒状) | |

遺構

VI-10図 H-34実測図

位置: k-43・44, l-43・44 形状: 正方形 規模: 南北4.80m×東西4.68m 深さ 0.48m
床面積 16.6㎡

カマド: 煙道方位 N → E101° 西壁の中央部やや北よりにつくられている。煙道は壁より85cm張り出しており、外へ向って斜めに上っている。煙出しは、煙道より急角度で立ち上っている。煙道天井部は崩落していた。南東コーナーに扁平な川原石が1個出土しており、袖石に使用された可能性がある。

柱穴: 1 径26cm 深さ22cm, 2 径28cm 深さ22cm, 3 径28cm 深さ42cm, 4 径25cm 深さ33cm。1と4はほぼ垂直に掘られているが、2は住居跡の外側へ、3は内側へ傾いている。

柱痕は検出されていない。

床面：中央部がやや低くなっている。周辺は固くしまっており、平坦である。炉跡の北西と南壁ぎわに焼土が検出された。北西側の焼土中からは遺物は出土していないが、南壁ぎわの焼土中からは、土器小破片・直径5cmほどの礫・カワシンジュ貝の殻皮などが出土した。これらの焼土は、床面・壁が焼けていないことから、この場所で火が焚かれたものではなく、カマド内あるいは炉の焼土を投棄したものと考えられる。

炉跡：住居跡中央部に検出された。床面より5cmほど高くなっている。

遺 物

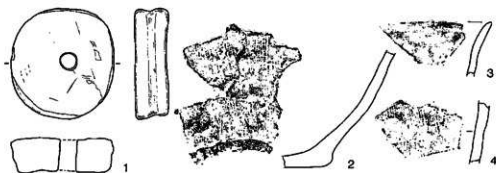
床面から土器破片・黒曜石のフレイク・礫、覆土中から土器破片・紡錘車・黒曜石のフレイク・礫、焼土中から土器破片・礫・カワシンジュ貝の殻皮などが出土した。

深鉢(VI-11図-2)：床面出土の大型深鉢の底部破片である。厚さ5mmほどで、焼成は良好である。内外面とも縦方向のハケによる調整が行われている。内面は黒色。内外面ともに炭化物が付着している。

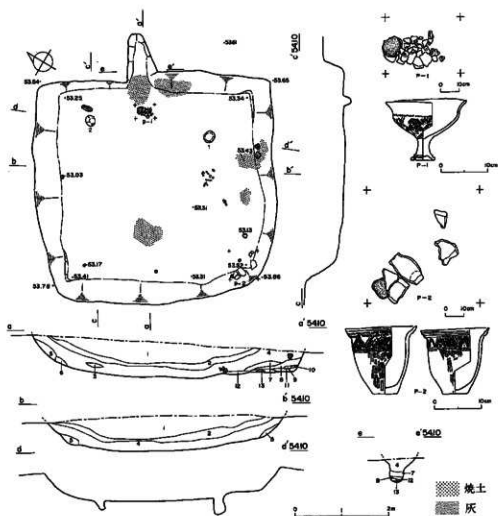
紡錘車(VI-11図-1)：覆土3層出土。直径5.5cm、厚さ1.8cm、中心部の孔の直径0.8cmで断面は台形である。表・裏面とも文様は施されていないが、側面に溝状のくぼみがめぐっている。

高坏(VI-11図-3)：覆土3層出土。口縁部破片である。焼成は良好である。外面は横方向に2mm～3mm幅のヘラによって調整されている。内面は黒色である。

深鉢(VI-11図-4)：カマド焚口の焼土中から出土した。焼成は良好である。外面は縦方向のハケによって、内面は3mm～4mm幅のヘラによる縦方向の調整が行われている。小破片のため、器高・口径などは不明である。



VI-11図 H-34出土遺物



- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. 茶褐色土 | 8. 暗茶灰色土 (粒状) |
| 2. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 9. 炭化物+少量の焼土 |
| 3. 焼土 | 10. 暗茶灰色土+炭化物 |
| 4. 暗黄褐色土 | 11. 暗茶灰色土+黄色土 |
| 5. 壁崩落土 | 12. 焼土+炭化物 |
| 6. 木の根痕 | 13. 炭化物 |
| 7. 暗茶灰色土+焼土 | |

VI-12図 H-35実測図

遺 構

位置：k-46・47, l-46・47 形状：正方形 規模：南北5.06m×東西4.90m 深さ 0.68
床面積 16.8㎡

カマド：煙道方位 N → E46° 西壁中央部やや北につくられている。煙道は壁から1.5mほど水平にのびている。煙出しは、ほぼ垂直に立ち上っている。煙道天井部は崩落していた。焚口から煙道にかけて、炭化物を含む焼土が厚く堆積している。

柱穴：1 径22cm 深さ34cm 2 径20cm 深さ18cm。柱底は検出されていない。また西・南・北の各壁の20cmほど内側に、径5cm 深さ10cmほどの柱穴が5個確認された。

床面：中央部がわずかにくぼむが、周囲は固くしまっていてほぼ平坦である。カマド焚口の東側と南東の壁の中央部に焼土が検出された。焼土中からは、土器破片・礫などが出土している。どちらも焼土下の床面には火を受けた跡がないことから、カマド焚口あるいは炉の焼土が投棄されたものと考えられる。

炉跡：中央部よりやや南西よりに検出された。住居跡床面より10cmほど高い。

遺 物

床面近くから完形土器・土器破片・礫、覆土中から土器破片・紡錘車・礫・カワシシユ貝の殻皮などが出土している。

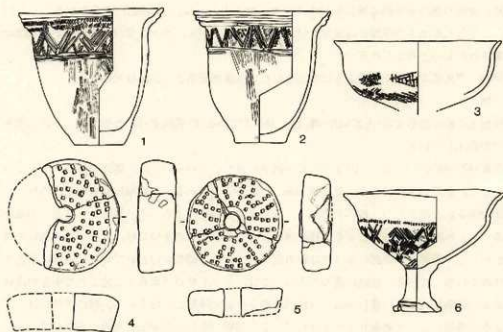
深鉢(VI-13図-1・2)：1・2ともに床面から出土している。1は、南西壁のコーナーから出土した。中型の深鉢である。器高14.3cm、口径15.5cmである。口縁部はゆるやかに外反し、刻文が施された段をもつ。段の下位には、3～5本の刻線による「八」形と2～3本の刻線による「V」形の組み合わせによる文様が施されている。刻文の下位には、3～4本の横位の刻線がめぐる。胴部から底部にかけては縦方向のへらによる調整が行われている。内面は黒色で、炭化物が付着している。焼成は良好である。2は、カマド焚口の南東から出土した中型の深鉢である。器高13.8cm、口径14.6cm。口縁部はゆるやかに外反し、段をもつ。段の下位には、2～3本の刻線によって鋸歯状文が施されている。刻線の横には部分的に列点状が施されている。刻文の下位には、1～2本の刻線がめぐる。表面は胴部から底部にかけて縦方向のへらによる調整が行われており、内面は横方向のへらによる調整が行われている。内面は黒色で、炭化物が付着している。焼成は良好である。

高坏(VI-13図-3)：住居跡中央部のやや南壁よりの床面から出土した。脚部は欠損している。口径は18cm、坏部の高さ4cm。坏胴部の下半はほぼ平らで、口縁部はゆるやかに外反する。坏胴部には、横方向に矢羽根状の文様が脚部との境まで施されている。口縁部内外面は、横方向のへらによる調整が行われている。

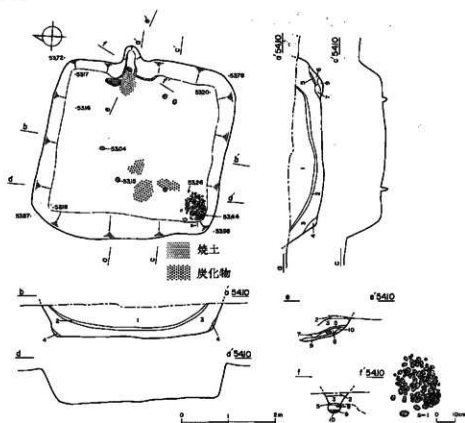
紡錘車(VI-13図-4・5)：4・5ともに床面から出土した。4は直径6.0cm、厚さ2.1cm、中心部の孔の径0.7cmで、断面台形の紡錘車である。表面全体には孔を中心として放射状に斜め方向からの刺突が行われている。この刺突は方形ないし台形で、向い合った二辺に曲面部をもつところから、クマイザサ・ネマガリダケなどが施文具として使用されたものと考えられる。5

は、直径5.1cm、厚さ1.5cm、中心部の孔の径0.8cmで、断面台形の紡錘車である。4と同様な施文具によって、表面周縁に刺突がめぐり、さらに孔を中心にして2列一組の刺突が放射状に施されている。表・裏面の孔の周縁はわずかにもり上っている。

高坏(VI-13図-6)：覆土3層から出土した。口縁部はゆるやかに外反する。口縁部と胴部の境に段をもち、段上には刻文が施されている。胴部には複数の刻線によって、鋸歯状文が向い合うような形で施され格子目状になっている。坏部と脚部の境には、2本の沈線が施されている。脚部は無文。脚裾部に段がつくられている。脚の下端には4か所の切りこみがある。口縁部内外面は横方向、胴部内面は縦位のへらによる調整が行われている。



VI-13図 H-35出土遺物



- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 赤色土 |
| 2. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 7. 灰 (少量の焼土を含む) |
| 3. 暗黄褐色土 | 8. 暗褐色土 (粒状) |
| 4. 壁崩落土 | 9. 暗褐色土+焼土 |
| 5. 暗赤褐色土 | 10. 暗黄色砂 |

VI-14図 H-36実測図

遺 構

位置：n-50, o-50, 形状：正方形 規模：南北3.84m×東西3.80m 深さ 0.68m 床面積 9.5㎡

カマド：煙道方位 N→E77° 東壁中央部につくられている。焚口の掘りこみはなく、煙道、煙出しは外へ向って斜めに上っている。袖石は焚口の北側に向けて倒れた状態で1個検出された。扁平な川原石である。焚口の床面の天井部の一部および床面は焼けて堅くなっている。煙道天井部は煙道内に落ちこんでいる。天井部と床面上の焼土、炭化物の間にはボロボロの暗褐色



H-36 集石



IV-15図 H-36出土遺物

色土（覆土3層）が堆積していた。

柱穴：中央部寄りに5個のビットが検出された。これらは径10cm、深さ約20cmで、断面をみると先端ののがった杭状の形を示している。床面では、内側より暗褐色土、淡青灰色土、橙色土と同心円状にみられ、他住居跡の柱穴の断面（柱穴の下、あるいはその周囲に淡青灰色土、橙色土が薄く堆積しているものが何か所かある）などから判断すると暗褐色土が杭状のものの痕跡と考えられる。

床面：中央部がわずかに低くなっており、非常に堅い。カマドの北側にカワシンジュ貝の殻皮が出土している。また南西部には炭化物が散在している。床面中央部よりには焼土と炭化物が混りあった堆積物がみられた。

炉跡：検出されていない。

遺物

集石：南西コーナー壁ぎわの床面上に90×120cmの範囲に125個の小礫が重なり合うことなく出土した。計測値一長径最大10.5cm、最小4.3cm、平均6.4cm・短径最大6.4cm、最小2.2cm、平均4.2cm・重量最大432g、最小28g、平均103.8g

深鉢（VI-15図）：覆土3層出土。南西コーナー壁ぎわより、小破片となり流れこんだ状態で一括出土した。これらは集石の東側、床面上より出土した三点の破片と接合した。器高19.8cm、口径19.9cmの中型深鉢である。胴上部はふくらみ、口縁部は比較的ゆるやかに外反する。口縁端部はほぼ垂直に立ちあがっている。口縁部内面および胴部内面上方は横方向にみがかれている。口縁部外面には、二段の隆起帯の上に斜位の刻文が付されている。頸部には3～4本の刻線を1単位とする鋸歯状文が描かれている。胴上部の文様帯上段には横走する8～10本の沈線の上に、3本を単位とする縦位の刻線文と2～3本を単位とするくの字形の刻線文を組み合わせた文様が描かれている。この下には2本を単位とする斜位の短刻線が4つずつ反対方向に付されている。焼成は良好で堅緻。色調は外面が暗褐色、内面は黒色である。

柱穴：径4cm～8cmほどの小さなビットが13個検出された。深さは、浅いもので約15cm、深いものでは38cmある。断面の観察によると、太さ5cm～6cmほどの先端を尖がらせた杭状の木を床面に打ちこんだものと考えられる。内部には炭化物を含む淡褐色土が入っている。これらのビットは、おもに壁近くにあるが配置に規則性がみられない。また中央部には径16cm、深さ8cmの柱穴状のビットがある。断面をみると先端は丸いものである。

床面：ほぼ水平につくられているが、小さな凹凸がみられる。遺物の出土状態からみて、検出された床面が、ほぼ生活面に一致するものと考えられる。

ビット：カマドと南コーナー間の壁ぎわに検出された。2個のビットが連なり、ひょうたん形になっている。深さは北側では約13cmあるが、南側では5cmほどしかない。内部には炭化物を含む覆土3層と同様の土が入っていた。

炭化材の出土状況：この住居跡では覆土3層上部から、床面にいたるまで多量の炭化木が検出された。これらは、出土状態及びその形状からみて、この住居の内部施設及び上屋を構築していた材木が火災にあって焼け落ちた状態を示しているものと考えられる。

炭化木は2～3層に重なった状態で検出された。上層の炭化木は幅4cm～5cm、厚さ数mmのもので、放射状に倒れた状態で出土した。壁ぎわでは曲がって壁の立ち上りに張りついた状態になっている。断面は浅いU字形で、木の芯が腐蝕してなくなり皮とこれに近い部分のみのこったもののようにみえる。この放射状に検出された炭化木のすき間や直下には、笹のような植物が炭化したものが多数検出された。

下層の炭化木は、北東と北西のコーナー部にとくに多い。この部分では面をとった板状の材が並べられたように検出されている。厚いものでは5cmほどあるが、これらの炭化材も木質がのこっているのは表面のみで、下面と芯の部分はまったくない。北コーナー付近から床面中央部にかけて太さ約10cm、長さ約1mの丸材が出土している。また北コーナーにも太さ20cm、長さ約50cmのこれと同様の炭化材がある。いずれも芯はなく表面のみがのこっている。これは、上屋を支える柱として使用された材とも考えられるが、前述のようにこの住居ではこのような太い柱を立てたと思われる柱穴は検出されていない。下層の炭化材は北東及び南東側では少なく、大きな板材はみられない。

遺物

集石：南コーナー付近の床面上に小礫が一面に敷き詰められたような状態で出土した。個数は142。計測値－長径最大9.2cm、最小4.2cm、平均6.2cm・短径最大5.2cm、最小2.3cm、平均3.6cm・重量最大170g、最小45g、平均82.8g

深鉢（VI-19図-1・2・3・4）：1は中央南東よりの床上に炭化材に混じって出土した。器高10.7cm、口径11.9cmの小型深鉢である。口縁部は強く外反し、端部がくの字状になっている。口縁部下端には刻文がめぐる。胴上部文様は横走する刻線をはさんで上段に縦あるいは斜めの刻線、下段には左下がりの刻線を描いている。ぜんたいに文様は粗雑である。内面は黒色で、研磨されている。外面は約3分の2が黒色でほかは褐色である。焼成は良好。



VI-17図 H-37炭化材出土状況図

2は中央西よりの床面直上に出土した。口縁部はほぼ水平に外反し、端部が立ち上がっている。器高33.8cm、口径30.5cm。口縁部には刻文が2段めぐっている。胴上部文様は上段から、斜交交叉文・縦位の刻線上に2本単位の刻線による菱形文・左下がりの刻線上に2本単位の右下がりの刻線・低い山形文を順に描いている。文様は非常に粗雑である。内面は黒色で、よく研磨されている。

4はカマドの焚口に倒れた状態で出土した。この中には、3の小型深鉢と5の高環が入っていた。4の深鉢は器高31.6cm、口径27.1cm。口縁部は外反し、端部が立ち上がっている。胴上部文様帯には鋸歯状文をめぐらし、その上方に縦位の沈線を描いている。文様はぜんたいに粗雑であるが、焼成は良好である。内面下半部は黒色、内面上半部と表面は明褐色である。

3は器高13.9cm、口径12.7cmの中型深鉢である。口縁部には1条の凹線によって段がつけられている。頸部がくびれ、胴上部にはふくらみをもつ。体部はハケ目のみで文様はない。この土器は14個の破片に割れているが、破片によって黒色のものと明褐色のものがある。後者は火を受けて酸化したものと考えられる。内面はいいに研磨されており、焼成は良好である。

高環 (VI-19図-5)：器高10.0cm、口径18.1cm。脚の低い高環である。口縁無文部がわずかにくびれ、坏胴部には刻文が2段めぐり、以下に横位の矢羽根状文が描かれている。脚部は縦にへら磨きがなされ、裾部には2つの段がある。この土器は2つの破片に割れているが、一方は内外面とも黒色で、他方は明褐色である。後者は火を受けて酸化したものであろう。

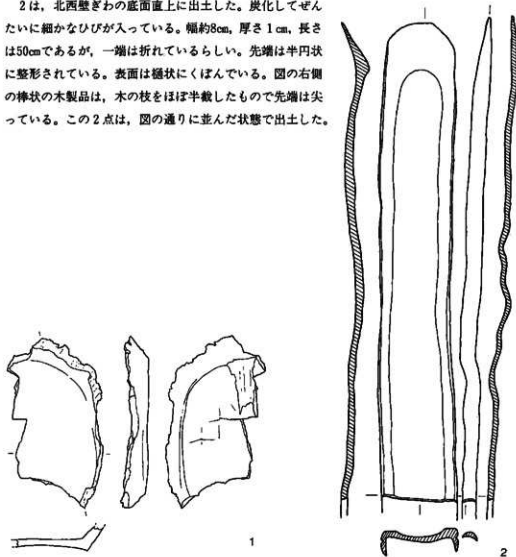
紡錘車 (VI-19図-6・7・8・9)：いずれも床面上に出土。6は径6cm、厚さ2.2cmで断面は台形である。表面に6か所の矢羽根状文が放射状に描かれ、縁には刻文が付けられている。裏

面は緑の部分が高くなっている。胎土には砂粒が含まれており、焼成は不良である。7は径5.2cm、厚さ2cm、断面は台形である。側面にくびれがある。表面には竹管文が放射状に施されている。8は径4.3cm、厚さ1.2cm、断面は丸みをもつ長方形である。文様はない。9は径8cm、厚さ1.8cm。断面は台形である。表面に竹管文が放射状に施されている。

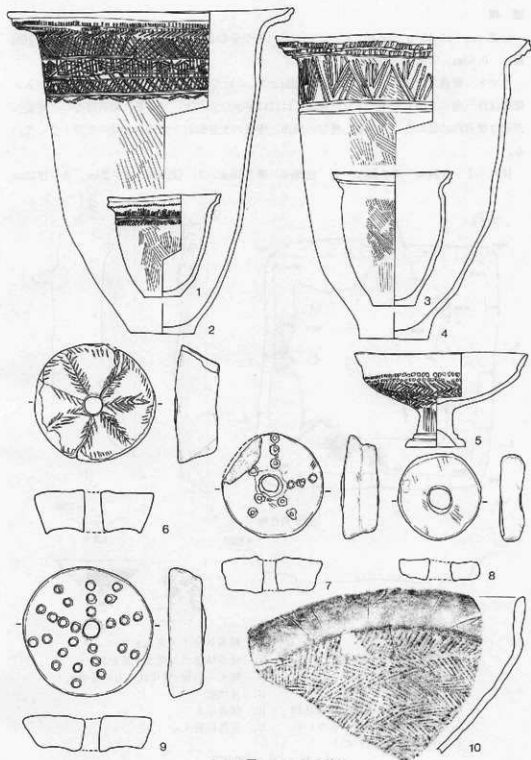
高坏(VI-19図-10)：炭化材に混じて出土した。坏部破片である。坏胴部に横位の矢羽根状文を描いている。

木製品(VI-18図-1・2)：1は、中央北よりの炭化材に混じて検出された炭化した木器である。ぜんたいの約3分の2ほどと考えられる。口縁部はまったくのこっていない。底面をみると、楕円形の皿と考えられる。

2は、北西壁ぎわの底面直上に出土した。炭化してぜんたいに細かなひびが入っている。幅約8cm、厚さ1cm、長さは50cmであるが、一端は折れているらしい。先端は半円状に整形されている。表面は樋状にくぼんでいる。図の右側の棒状の木製品は、木の枝をほぼ半截したもので先端は尖っている。この2点は、図の通りに並んだ状態で出土した。



VI-18図 H-37出土木器



VI-19圖 H-37出土遺物

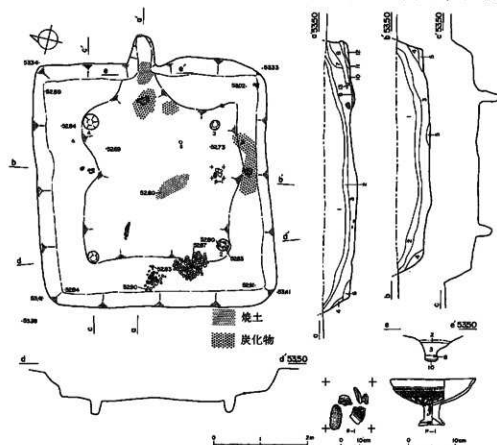
H-38

遺構

位置：m-45・46, n-45・46 形状：正方形（やや菱形） 規模：南北4.91m×東西5.10m
深さ 0.66m 床面積 20.1㎡

カマド：煙道方位N→E76° 東壁中央部につくられている。焚口には浅い掘りこみがある。煙道は外へ向ってゆるやかに上り、煙出しはほぼ垂直に立ち上っている。袖石はない。煙道天井部は煙道内に落ちこんでいる。焚口の床面、煙道の天井部および床面は焼けて堅くなっている。

柱穴：1 径24cm 深さ33cm, 2 径26cm 深さ28cm, 3 径20cm 深さ29cm, 4 径33cm



- | | |
|------------------|----------------------|
| 1. 茶褐色土 | 8. 暗茶灰色土+黄色土ブロック |
| 2. 暗茶褐色土(炭化物を含む) | 9. 暗茶灰色土+焼土+炭化物 |
| 3. 暗黄褐色土 | 10. 焼土(砂質・骨片状のものを含む) |
| 4. 壁崩落土 | 11. 炭化物 |
| 5. 暗黄褐色土+焼土+炭化物 | 12. 壁崩落土 |
| 6. 暗茶灰色土(やわらかい) | 13. 黄色粘質土 |
| 7. 暗茶灰色土(粒状) | |

VI-20

H-38実測図

深さ43cm。1以外の柱穴には断面に柱痕が検出された。これによると柱の太さは、2が12cm、3が16cm、4が14cmである。

床面：中央部が10cmほどくぼんでおり、このくぼみの四隅に柱穴が掘られている。床面は非常に堅い。南壁中央部には焼土と炭化物が厚く堆積している。

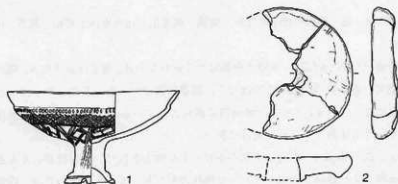
炉跡：床面中央部に炉跡と思われる焼土が検出された。

遺物

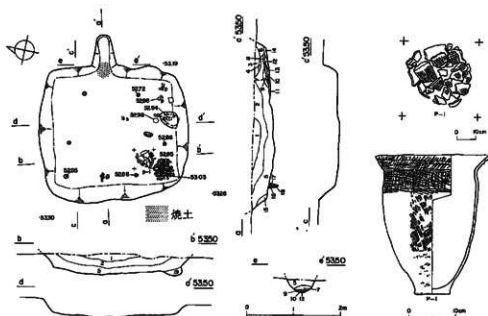
集石：西壁ぎわ南よりの床面上に3カ所に分散して小礫のまとまりが出土した。北から、59個、89個、22個、総数170個である。計測値一長径最大9.7cm、最小1.4cm、平均5.1cm・短径最大7.3cm、最小1.2cm、平均3.7cm・重量最大270g、最小2g、平均81.7g

高坏（VI-21図-1）：南壁中央部北よりの床面上に押しつぶされた状態で出土。器高9.6cm（坏部5.3cm、脚部4.3cm）、口径18.0cm。坏胴部はわずかにふくらみをもち、口縁部は浅いくびれをもってゆるやかに外反する。口縁部内外面は横ナデ調整を施し、坏胴部内面は上半が横方向に、ほかは縦方向に磨かれている。坏部には斜位の刻文が一周し、その下方には斜交文、横走する二条の沈線、斜格子目文の上に2～3本を単位とする縦位の刻線文を描いている。脚部には縦方向に粗いハケ目調整が施されている。また脚部部には一条の沈線がめぐり、下端には等間隔に三角形の5個の切りこみがある。焼成はあまり良くなく、軟質である。色調は外面が暗灰褐色、内面は黒色である。

紡錘車（VI-21図-2）：北壁東より床面上に出土。径約6.9cm、厚さ1cm、孔の径は0.8～0.9cmである。断面は台形で、孔の周りおよび周縁部は隆起している。つくりは粗雑である。



VI-21図 H-38出土遺物



- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. 茶褐色土 | 11. 暗黄灰色土+焼土+炭化物 |
| 2. 暗茶褐色土 (炭化物を含む) | 12. 炭化物 |
| 3. 暗黄色土 | 13. 赤褐色土 (焼土) |
| 4. 暗茶灰色土+焼土 | 14. 暗茶灰色土 (壁崩落土) |
| 5. 暗黄褐色土 | 15. 暗黄褐色土 (壁崩落土) |
| 6. 暗茶灰色土+黄色粘質土ブロック | 16. 淡褐色土 |
| 7. 暗黄色粘質土 (堅い) | 17. 淡青灰色土 |
| 8. 暗茶灰色土+黄色粘質土ブロック | 18. 赤灰色土 |
| 9. 暗赤褐色土 (焼土) | 19. 暗黄褐色土+炭化物+焼土 |
| 10. 暗黄灰色土+炭化物 | |

VI-22図 H-39実測図

遺構

位置：o-46, p-46 形状：ほぼ正方形 規模：南北3.17m×東西2.85m 深さ 0.44m 床面積 5.7㎡

カマド：煙道方位 N → E72° 東壁中央部につくられている。煙道は長さ80cm、幅24cmで65cmほど壁外に出ている。焚口の掘りこみはなく、煙道床面は外へ向ってゆるやかに上がり、煙出しはほぼ垂直になっている。天井部は煙道内に落ちこんでいる。煙道内には焼土・炭化物が厚く堆積しており、煙道床面と天井部は焼けて堅い。

柱穴：壁より20～30cmほど内側に7個の小ピットが検出された。断面観察によると、これらは径6～9cm深さ4～15cmで先端のとがった杭状の形を示している。床面では、内側より暗褐色土、淡青灰色土、橙色土と同心円状にみられるが、ほかの住居跡の柱穴断面（柱穴の下、あ

るいはその周囲に淡青灰色土、橙色土が薄く地積しているものが何カ所かある）と比較すると暗褐色土が枕状のものの痕跡であると思われる。

床面：全体に凹凸がはなはだしい非常に堅い。南東壁中央部には床面より掘りこまれたビットが検出された。平面形は底径32cm高さ38cmの三角形状で深さは16cmである。覆土は汚れてボソボソしているが覆土3層と同質のものであり、その下層には少量の焼土、炭化物が混入している。

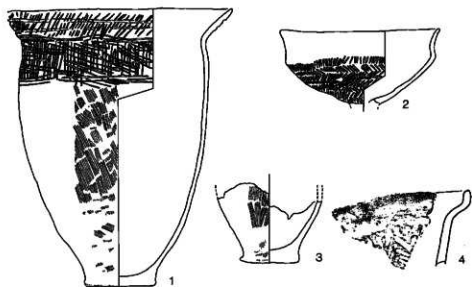
炉跡：検出されていない。

遺 物

集石：南コーナー壁ぎわ床面上に45×55cmの範囲で79個の小礫が重なり合うことなく出土した。計測値—長径最大7.7cm、最小3.0cm、平均6.0cm・短径最大5.1cm、最小2.3cm、平均3.8cm・重量最大170g、最小30g、平均91.3g

深鉢(VI-23図-1・3・4)：1は集石のすぐ北側、床面より横倒しのまま押しつぶされた状態で出土。器高29.3cm 口径24.1cmの大型深鉢である。口縁部はゆるやかに外反する。口縁部内面と胴部内面上半は横方向にみがかれ、下半は縦方向にナデ調整が施されている。口縁部外面には2条の浅い凹線がめぐり、斜位の刻線文が乱雑に付されている。胴部にはハケ目調整後、縦位、横位、斜位の刻線を付している。焼成はあまり良くない。色調は外面が淡褐色、内面は黒色である。一對の補修孔がある。3は南東壁中央部のビット内床面より出土。底部のみである。4は煙道内より出土。口縁部の破片である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はほぼ垂直に立ちあがる。内外面ともに横方向にみがかれている。頸部外面には斜位の刻文が横走する。焼成は良好で堅緻。色調は外面が黒灰色、内面は黒色である。

高坏(VI-23図-2)：南壁東よりの床面から出土。口径17.0cm、器高(坏部)7.7cm。坏胴部は直線



VI-23図 H-39出土遺物

的にのび、口縁部の付根で強いくびれをもち口縁部は外反する。坏胴部には矢羽根状文が2列にめぐり、その下方には斜交交叉文が描かれている。焼成は良好で堅緻、色調は外面が暗灰色、内面は暗黄灰色である。

2 小 括

昭和58年度の調査区は、前年度調査区の南に続く部分で、本遺跡の範囲のうち最南端にあたる。調査区は西側がやや高く、東に向かってわずかに傾斜している。

検出された10軒の住居跡は、前年度の調査で検出された住居跡のうち、天塩川に平行して並ぶものにはほぼ連続して分布している。

住居跡の規模は、8軒が1辺4 m～5 mと平均的な大きさであるが、H-32は1辺約8.5 mで、昭和56年度調査で検出されたH-13にほぼ匹敵する。またH-39は、55年度調査のH-9に次いで規模が小さい。H-32では壁ぎわにはほかの住居跡にはみられないベンチ状の段が検出されている。

各住居跡の壁は前年度までの調査で検出された住居跡と同様に、外へ向って傾斜しているが、6軒から壁の崩落土が確認された。

住居跡H-37は火災にあった住居跡と考えられ、多量の炭化材と深鉢・高坏・紡錘車・木器および小礫のまとまりが出土した。これらの遺物の出土状態は、この住居に人が生活していた時の有様をよくのこしているものと考えられる。

住居跡H-32の北東側の地山中からは、縄文時代中期初頭のものとみられる押型文土器が出土した。また、住居跡H-35の床面下には縄文時代のもものとみられる黒曜石フレークと焼土が検出された。各住居跡の調査を終えてから、トレンチ調査を行なったところ、調査区南部に縄文時代のうすい包含層があることが判明した。しかし、上記の遺物以外に出土した遺物は、数点にとどまった。このほかに調査区西端の黒色表土中からも縄文時代中期の天神山式土器に相当する深鉢が1個出土している。

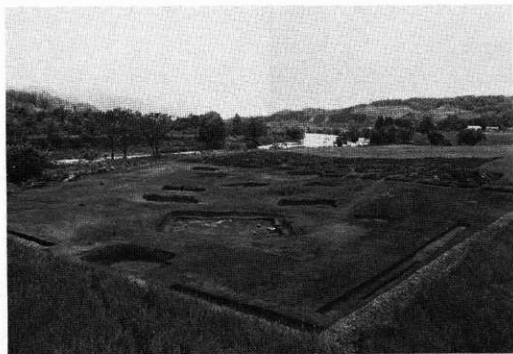
(和泉田毅)

写真図版

聯國真容



調査風景



全貌撮影風景



H-30 甕 掘



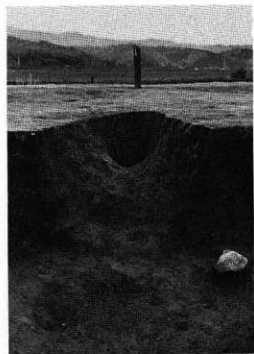
H-30 カマド



H-30 紡錘車



H-31 完掘



H-31 カマド



H-31 高坏



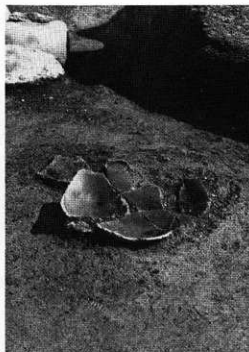
H-31 深鉢



H-32 売堀



H-32 カマド



H-32 高坏出土状況



H-32 ミニチュア土器



H-32 紡錘車



H-32 高杯



H-32 柱穴断面



H-32 柱穴断面



H-33 売 堀



H-33 カマド



H-33 柱穴断面



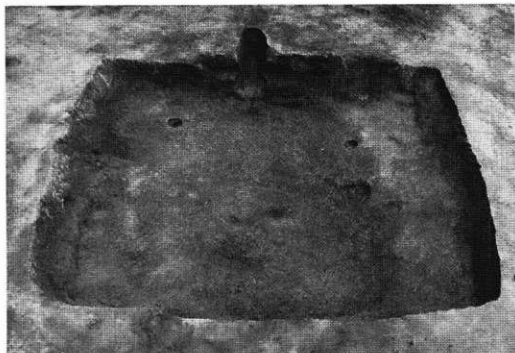
H-34 兜 掘



H-34 カマド



H-34 紡錘車



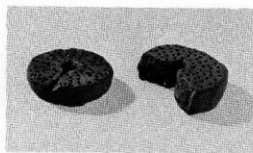
H-35 完 掘



H-35 カマド・深鉢出土状況



H-35 深鉢出土状況



H-35 紡錘車



H-35 高 杯



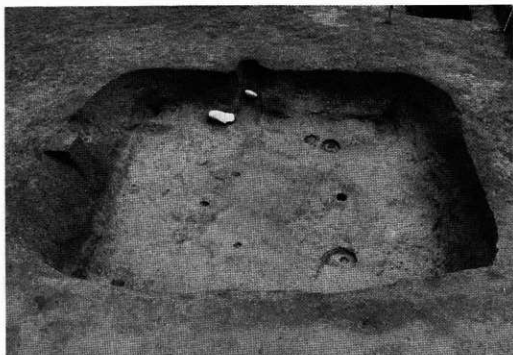
H-35 高 杯



H-35 深 鉢



H-35 深 鉢



H-36 完掘



H-36 カマド



H-36 深鉢



H-37 完掘



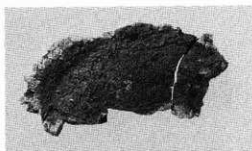
H-37 カマド・深鉢出土状況



H-37 深鉢出土状況



H-37 深鉢・紡錘車出土状況



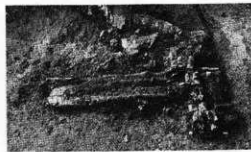
H-37 出土木器（表）



H-37 出土木器（裏）



H-37 集石



H-37 木器出土状況



H-37 紡錘車



H-37 高環



H-37 高環



H-37 深鉢



H-37 深鉢



H-37 深鉢



H-37 深鉢



H-38 発掘



H-38 カマド



H-38 高坏出土状況



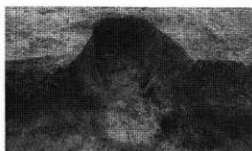
H-38 紡錘車



H-39 高坏



H-39 完掘



H-39 カマド



H-39 高環出土状況



H-39 礫石・深鉢出土状況



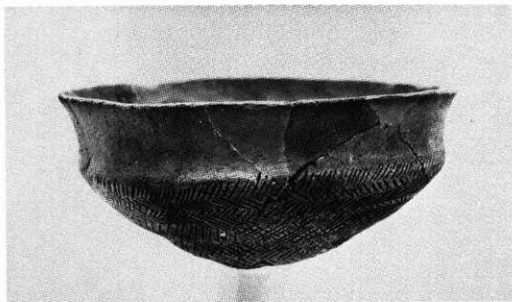
H-39 深鉢底部出土状況



H-39 深鉢底部



H-39 深鉢



H-38 高鉢

1. The first part of the paper discusses the importance of the study of the history of the English language. It is noted that the English language has a long and rich history, and that the study of its development is essential for a full understanding of the language. The paper then goes on to discuss the various factors that have influenced the development of the English language, including the influence of other languages, the influence of social and cultural changes, and the influence of technological advances.

2. The second part of the paper discusses the importance of the study of the history of the English language. It is noted that the English language has a long and rich history, and that the study of its development is essential for a full understanding of the language. The paper then goes on to discuss the various factors that have influenced the development of the English language, including the influence of other languages, the influence of social and cultural changes, and the influence of technological advances.

VII 遺構外出土の遺物

本遺跡から出土した遺物は約9,000点(破片数)であるが、このうちの大部分は堅穴住居跡にともなって出土したものである。このほかの遺物は調査区南端部の縄文式土器包含層と耕作土中から出土したものである。また住居跡覆土1層及び2層から出土した遺物は、耕作によって住居跡のくぼみの中に混入したことが判明している。ここではこれらの遺物を一括して記述する。

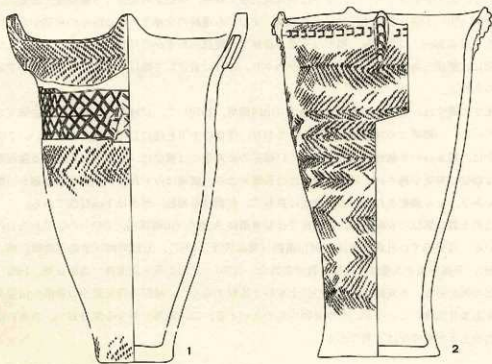
縄文式土器は約50点出土しているが、南端部の縄文式土器包含層出土の土器以外は、小破片が多く器形全体をうかがうまでには至らなかった。

、擦文式土器は文様構成、器形などからみて、遺構にともなって出土した土器と同様に擦文文化期の比較的新しい時期に位置づけられるものと思われる。

石器も12点出土している。住居跡床面から石器類がほとんど出土していないことから、これらの石器は縄文時代のもと考えられる。

1 土 器

(1) 縄文式土器



Ⅶ-1 図 遺構外出土遺物(土器)

縄文：深鉢（Ⅶ-1図-1）：n-47区から出土した。土器は、全体の3分の1しかないうえ、いずれも細かく割れており、接合を試みたが全体を復元できなかった。底部は平底で、器形は深鉢形と思われ、図上ではⅦ-1図のように複元できる。口縁部はわずかに外反し、幅4.5cmの肥厚帯と4つの山形突起がある。口縁をめぐる肥厚帯は、その下縁が山形突起に対応して弧状をなしている。割れ口断面の観察によれば、肥厚帯と山形突起は貼り付けによるものである。

文様の種類は縄文と押型文の2種類で、口唇上および口縁の肥厚帯上には縄文、胴部上半には押型文と縄文が施文されている。図のように押型文と縄文が重複することなく、両者の文様帯がはっきりと区別されるのが特徴である。胴部下半の文様は不明だが、底部には縄文が認められる。

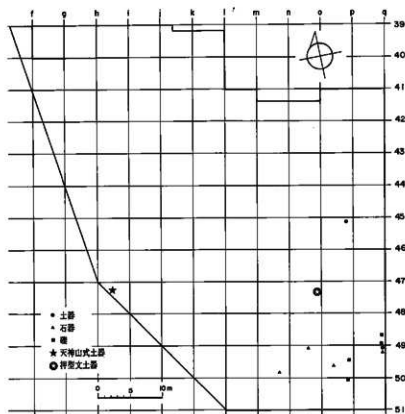
縄文は、第1種の結束羽状縄文（山内清男，1979）で、口縁部と胴部ではその向きが逆になっている。これは、施文原体の上下を逆にしたためらしい。押型文は2本の並行沈線を斜めに交差させることによって、2重の格子目を形づくるもので、原体の側に刻線が施されるいわゆる「凹型」である。文様は直線で上下に区画され、文様の観察から施文具は、長さ53mm、直径14mm程度の大きさの棒状のものと推定される。

胎土には繊維を含まず、焼成は良好だが風化している。色調は茶褐色である。内面には細かい擦痕が横位にみられ、よく調整されている。内面は整形後、新たに粘土をなでつけたらしく、大半が剥落していた。厚さは胴部縄文帯で10mm、押型文の部分で9mm程度である。

深鉢（Ⅶ-1図-2）：h-46区の北西隅、すなわち遺跡の立地する河岸段丘の肩部から出土した。器高36cm、口径22cm、器形は平底の深鉢で、底部がわずかに外側に張り出している。口縁部には断面三角形で幅2cmの隆起帯がめぐり、これに直交して縦位の隆起帯と4つの小突起がみられる。

地文の縄文は、第1種の結束羽状縄文（山内清男，1979）で、口縁部をのぞく全面に施文されている。一部縄文の向きが反対になっており、原体の上下を逆にして施文したらしい。このほかに、幅8mmの半截竹管様の施文具で口縁部の隆起帯には横位に、小突起と垂下する隆起帯には縦位に刺突が施されている。胎土には砂礫を含み、繊維はみられない。内面には細かい擦痕があり、よく調整されている。焼成は良好で、色調は茶褐色、厚さは1cm程度である。

この土器と類似の資料には、道北部では智東遺跡A地点（山崎博信，1968）の土器が知られている。道央部では札幌市平岸天神山遺跡（菊地俊彦，1967）、七飯町峠下遺跡（高橋正勝，1979）、千歳市美々5遺跡（北海道教育委員会，1979）、江別市荻ヶ岡遺跡（高橋正勝，1982）などの例がある。本資料は、ほかの出土資料と比較すると、口縁部の隆起帯や口唇部の山型突起があまり発達しないなど、やや異例のものといえる。この差異が単なる地方差か、あるいは年代差を示すものかは不明である。



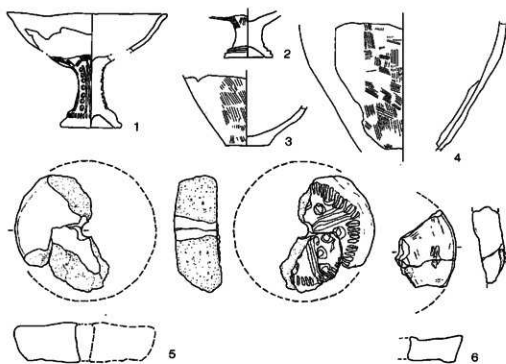
VII-2 図 縄文包倉層遺物分布図

(2) 縄文式土器

本遺跡の遺構外から出土したおもな土器と紡錘車を図示した。(VII-3 図)

1は、n-41グリッドの表土から出土した高坏である。脚部と口縁部破片数点から復元したもので、大きさは推定で器高11.0cm、口径18.5cmである。口縁部は無文で、ゆるやかに外反する。口縁部と胴部の境にわずかが段をもつ。段上には刻文は付されていない。胴部文様は不明。脚部には縦に2～3本を一単位とする刻線が施され、刻線との間に縦方向に並ぶ刺突が施されている。脚底部の張り出しには段が形成され、刻文が施されている。脚底面には、突起がつくり出されている。内面は黒色である。焼成は不良で、表面には剥落している部分がある。2は、d-28グリッドの表土から出土した無文の高坏脚部である。裾部の張り出しに段をもつ。下端には4か所の切りこみがある。焼成は良好。3は、d-30グリッドの表土出土の深鉢の底部である。中型の深鉢と思われる。斜方向にハケによる調整が行なわれている。内面は黒色で、炭化物が付着している。焼成は悪く、表面は摩滅している。4は、a-18グリッドの表土出土の深鉢の胴部破片である。表面は不規則な方向のハケによる調整が行なわれている。内面は黒色である。焼成は悪く、表面は摩滅している。5は、c-22グリッドの表土出土の紡錘車である。大きさは推定で直径6.5cm、厚さ1.9cm、中心部の孔の径0.9cmである。断面は台形。裏面の

周縁に刻文が施され、孔を中心にして2～3本単位の刻線が放射状に施されている。この刻線の間には竹管状の施文具で刺突が施されている。表面は黒色で、ヘラによって磨かれている。これは本遺跡では唯一の裏面にも施文された紡錘車である。6は、表面採取の紡錘車である。大きさは推定で直径7.0cm、厚さ1.1cm、中心部の孔の径0.7cmである。断面は台形。表・裏ともに無文である。孔は裏側からあけられており、表面の孔周縁には孔をあけた際に生じた胎土を折り返してある。



Ⅷ-3図 遺構外出土遺物（土器）

2 石器

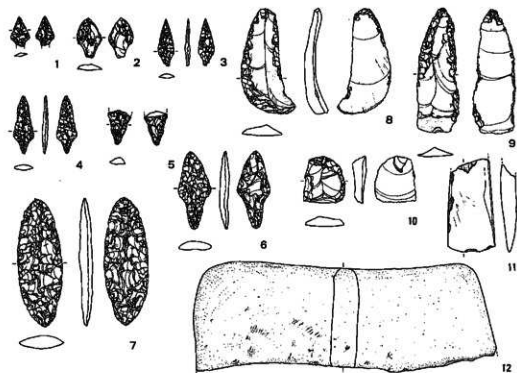
遺構外出土の石器には、石鏃・石槍・ナイフ状石器・スクレイパー・石斧・砥石・台石などがある。

石鏃(VII-4図-1~4)：石鏃は4点出土している。1・3・4は有茎で、2は基部が明瞭にみられないものである。すべて黒曜石製である。1は、e-32グリッドの表土から出土。両面加工で、尖頭部から基部にかけて厚さが一様である。基部が欠損している。2は、H-32の覆土2層から出土。菱形で表面の左側縁に調整を加えただけの粗雑なものである。素材面を残している。3は、f-26グリッドの表土から、4は、d-15グリッドの表土から出土。3・4ともに両面加工で基部が短かく、細身のものである。3は、基部の先端が欠損している。

石槍(VII-3図-5・6)：黒曜石製。5はd-22グリッドの表土から出土した。石槍の基部と考えられる。6は、a-19グリッドの表土から出土。両面加工であるが、裏面の調整は粗雑である。基部と両側縁の刃部の摩滅が著しい。

ナイフ状石器(VII-4図-7)：H-15の覆土1層から出土。黒曜石製である。両面加工で、刃部には入念な調整が施されているが、右側縁部が著しく摩滅している。

スクレイパー(VII-4図-8~10)：8・10は黒曜石製で、9は頁岩製である。8はH-14の覆土1層から出土。縦長の剥片の表面両側縁に調整が加えられ、刃部が作り出されている。表面右側に素材面を残す。9はH-14の覆土1層から出土。縦長の剥片の表面の両側縁と裏面の右側縁に調整が加えられ、刃部が作り出されている。打痕付近の表裏が両縁部より入念な調整



VII-4図 遺構外出土遺物(石器)

が施されており、尖頭部がつくり出されている。また、この尖頭部の摩滅が著しいところから、刺突具として使用された可能性がある。

石斧（Ⅶ-3図，11）：c-15グリッドの表土から出土。黒色片岩製である。全面磨製で、刃部の一部と茎部が欠損している。刃部の欠損は、使用時の刃こぼれと思われる。表面は入念に磨かれているが、裏面は素材面も残っており、磨きも粗雑である。

砥石（Ⅶ-3図，12）：e-27グリッドの表土から出土。砂岩製である。一部に砥石として使用したと考えられる痕跡がある。数箇所に鼠歯状のストーン・リタッチャー的な使用の痕跡も残っている。

写 真 图 版

平泉圖



h-46 表土出土の深鉢



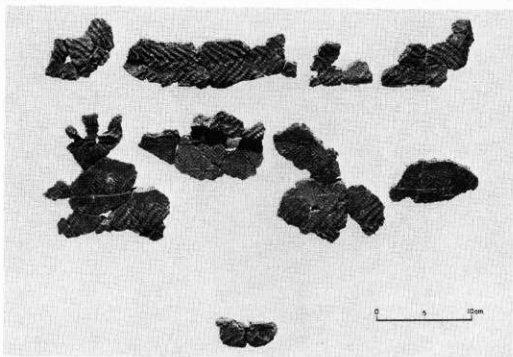
n-14 表土出土の高杯



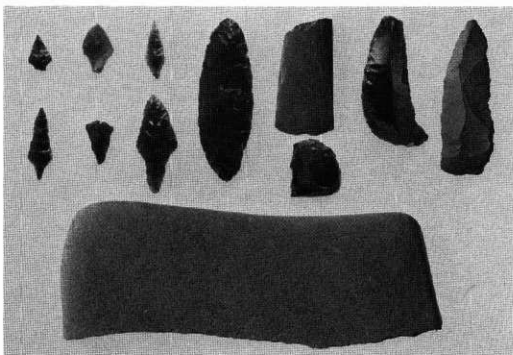
c-22 表土出土の紡錘車



表探 紡錘車



n-47 包含層出土の押型文土器



遺構外出土の石器

VIII まとめ

昭和55年度から昭和58年度までの延べ8ヶ月の発掘調査によって、竪穴住居跡が39軒、土塀1基、溝跡1条が検出された。溝跡を除いて、すべて弥文文化期の遺構であることが判明している。

39軒の住居跡はすべて周辺よりわずかに高い微高地にある。昭和55年度調査区内の北東側と、昭和57年度調査区内の東側は微高地内でも低い部分にあたり、住居はこれを避けて構築されていることがわかる。住居跡の分布をみると調査区の北側では近接して弧状になっており、南側では天塩川にはほぼ平行するように並んでいる。

P-1は円形の浅い土塀で微高地から離れ、住居跡群の北端よりさらに50mほど北に検出されている。

調査区北西部に検出された溝跡は、人工的に掘られたものではなく、天塩川の氾濫の際に水が流れた跡と考えられる。内部からはわずかの土器片と黒曜石チップが出土しているが、形成された時期は明確ではない。

住居跡の平面形はほぼ正方形のものがもっとも多い。長方形につくられているものは5軒で、台形あるいは菱形に近い例もある。

各住居跡の床面積を比較すると、小規模なものではH-9の約5㎡、H-39の5.7㎡、大規模なものではH-32の54㎡とH-13の68㎡があり、このほかの住居跡の床面積は9㎡から28㎡の間にある。なかでも床面積15㎡～22㎡が16軒と最も多く、ぜんたいの平均床面積は18.8㎡である。しかし住居跡の規模に、このような違いがあるにもかかわらず、出土遺物の種類、量に傾向はみとめられない。

検出された住居跡の深さは、深いもので約80cm、浅いものでは約20cmである。これは床面積と比例しない。しかし浅い住居跡はどかまの煙道が短かく、底の部分しかのこっていない傾向がある。煙道が崩落せずにトンネル状にのこされていたH-22では壁の高さが約80cmあるところから、ほかの住居跡も本来このくらいの深さがあったものと考えられよう。現在調査区内はほぼ平坦になっているが、これらの住居跡が本来同じくらいの深さにつくられていたものとする、構築当時集落の生活面にはかなりの起伏があったものと考えなければならない。おそらく明治30年代からの畑地造成のために、高い位置にあった住居跡は上部を大きく削平され、各住居跡の深さにこのような差異が生じたものと推定される。

住居跡の壁は外へ向って大きく傾斜しているものが多い。しかしぜんたいの5分の1にあたる8軒の住居跡で、壁の崩落と考えられる土層が確認されており、壁は本来ほぼ垂直につくられていたものと思われる。調査区北部の住居跡では地山に砂が多量に混入しており、さらに住居内にも砂が堆積しているものが多いことから、壁の崩落土が検出できなかったものと考えられる。H-19・28などでは壁が垂直に近く立ち上っており、構築時の状態をよくのこしているものと思われる。

住居跡の床は調査区北部では地山の砂層あるいは砂礫層に達しているものが多く、南端部では縄文土器の包含層になっている暗褐色土中に床がつくられている。このほかの調査区中央部では、地山の黄褐色土が床面にあらわれている。床面は平坦でほぼ水平につくられているが、凹凸のある例もみられる。また四本柱跡の内部が周囲よりわずかに低くなっている例が多数ある。出土遺物の多くが床面より上部に検出され、炉跡も床面よりわずかに高くなっていることから、生活面は構築された床面より上部にあったものと考えられる。しかし貼り床とみとめられるような層位は検出されていない。H-12・13・14・16・17では床の中央の低い部分に粘土ブロックを混入した砂層が検出されているが、覆土3層との境は不明瞭で貼り床とするには問題がある。

柱穴は家屋上部を支えていたと考えられる四本柱の跡が検出されたものが21軒ある。床面の調査を終えた後、各柱穴を半截して断面観察を行なったところ、掘り形と柱底が明瞭に区別できたものも多数みられた。これによると、柱の太さは10cm～18cmほどで、先端は平らになっているものが多い。

四本柱跡がまったく確認されなかった住居跡は11軒あるが、このうちH-12などでは、床面が砂礫層になっているために確認できなかった可能性が高い。

四本柱跡とは異なる径数cmの小ピットが検出されている例が8軒ある。断面をみると先端を尖がらせた木を枕のように床面に打ちこんだものと考えられる。これらは四本柱跡のない住居跡に多く、H-13・23・31・32・35では壁ぎわに並んでいる。しかしH-37・39などでは、壁から離れており配置に規則性がみられない。

H-15を除く38軒の住居跡にはつくりつけのカマドが構築されている。カマドの煙道方向は北西ないし北東すなわち川下を向いているものが10軒、反対に南ないし南南東すなわち川上を向いているものが3軒である。このほかの25軒では北東ないし東南東向きになっており、北西ないし南南西すなわち天塩川の方向を向いているものはまったくない。

カマドはほぼ構築当時の状態でのこされているH-22・23をみると、住居の壁の下部から外へ向って煙道をトンネル状に掘りこみ、壁から1mほどの所で煙出しの立ち上りになっている。このほかの住居跡では、煙道天井部が煙道内に落ちこんでいるものが15軒確認されたが、調査区北部の住居跡では、上部を大きく削平されているために煙道は天井部をまったく欠き溝状になっているものが多い。またH-15にはカマドがつくられていないが、南壁ぎわにカマドの焚口に類似する掘りこみがあり、内部からは炭化物を含む焼土が検出された。さらにこの掘りこみの東側には、ほかの住居跡の袖石と同様の扁平な川原石が1個出土していることから、カマドの構築を途中で放棄したか、何らかの理由で煙道を掘りこまなかった可能性があらう。

煙道の床面は住居外へ向ってゆるやかに上っており、煙出しの立ち上りとの境が不明瞭なものが多いがH-35・38のように水平に掘りこまれ、煙出しが垂直に立ち上る例もある。

カマドの焚口は浅く掘りこまれているものと、掘りこみが浅いものがある。H-10・15・37では両袖に扁平な川原石が立てられており、下部は壁と同様の土で覆われている。この土は火

を受けて焼けているが袖石を粘土などで固定した様子はみられない。13軒の住居跡では、袖石が焚口内かその付近に倒れた状態で出土。9軒の住居跡では袖石に使用されたものと考えられる扁平な川原石がカマドの焚口から離れて検出されている。このほかの13軒からは袖石と考えられるものは出土していない。また焚口内にはにぎり拳大の石がある例が多数みられる。

カマドは住居内からみて壁の中央左よりにつくられているものが多い。ほぼ中央にあるとみられるものも計てみるとやや左によっている例が多く、右によってつくられているものはまったくない。

大型の住居跡H-32には、壁の内側にベンチ状の段がつくられている。同規模のH-13をよくめて、ほかの住居跡にはこのような構築物は検出されていない。昭和45年に発掘調査された美深町紋穂内遺跡の3軒の住居跡にもこれと同様のベンチ状の段がめぐらされている。

P-1は円型の浅い土壇で内部からは3個体の深鉢が出土し、さらに炭化物を含む焼土が検出されている。このような土壇は調査区内のほかの場所には検出されなかった。

遺物のうち大部分は遺構内出土の縄文土器である。完形および器形を復元できたものは深鉢29個体、高坏20個体、坏2個体である。これらはすべて住居跡の床面あるいは、覆土3層中から出土したものである。覆土3層中のものには床面近くにあり、また出土状態からみて住居内で使用されていたと考えてはば間違いないものと、上部にあって、住居廃棄後流れこんだ可能性のあるものがある。しかしこれを厳密に判別することは困難であった。

深鉢には斜交文、鋸歯状文を主体とする複段の文様が描かれている。器高30cmを超える大型から、10cmほどの小型のものまでであるが、大型の土器ほど胎土に石粒の混入が多い。大型から小型までのいずれも、内面は黒色でよく研磨されている。大型品には内外面に炭化物が付着しているものが多い。

高坏は矢羽根状文を主体とする文様が描かれている。脚の下端には等間隔にいくつかの切り込みがあるものが多数ある。内面はていねいに研磨されており、胎土中には石粒の混入が少ない。焼成も深鉢に比較すると良好である。

9軒の住居跡床面からは、長さ5cmから10cmほどの小礫がまとまって出土している。個数は9個から170個の範囲にあり、2軒を除いてカマドに向って住居跡の右半部に検出されている。従来、漁網あるいは、網み物用の錘という推定があるが、今回の調査からその用途を直接に推察し得る結果は出ていない。

住居跡内からはこのほかに、鉄製刀子1点、紡錘車11点、砥石2点、カワシンジュ貝の殻皮などが出土した。

調査区南端部には、暗褐色土が広がっており、縄文土器をわずかに包含している。器形を復元することはできなかったが、回転押型文と縄文を施した深鉢が1個体出土している。このほかに遺構外からは、縄文土器・縄文土器の破片・黒曜石のフレイク・チップなどが出土しているが、これらの遺物は耕作土中に入ったもので本来の位置から動かされている。また住居跡覆土1層及び2層中の遺物も、明治以来の畑地造成によって住居跡のくぼみに入りこんだもので

あることが判明しているため、住居跡出土の遺物としては取り扱わなかった。

昭和57年度調査区の西端には、一部黒色の表土があり、縄文時代中期の天神山式に比定される土器が1個体出土した。(鬼柳 彰)

遺構	形状	規模			住居の 長軸方向	カマド 方向	柱丈	伊勢	出土遺物(個体数)	備考
		南北×東西(m)	深さ(m)	床面積(m ²)						
H-1	正 方 形	4.57×4.52	0.43	15.91	—	東	4	なし	床面 刀子1	
H-2	ほぼ正方形	5.55×5.58	0.24	25.15	—	東	3	なし	竈土3層 竈鉢2 床面 竈鉢2 高坪1	
H-3	ほぼ正方形	5.06×5.05	0.22	19.35	—	東	4	なし	床面 礫石(9個)	花崗と北西角部に 張り出し
H-4	ほぼ正方形	3.99×4.21	0.10	13.84	—	東北東	3	なし	竈土3層下部 高坪1	
H-5	ほぼ正方形	4.75×5.09	0.20	19.34	—	東南東	4	なし	竈土3層下部 竈鉢1 高坪1	北東壁外に張り 出し
H-6	ほぼ正方形	5.49×5.35	0.15	23.72	—	北東	4	なし	竈土3層下部 高坪1 床面 礫石(21個)	
H-7	台 形	4.44×4.53	0.25	17.89	—	東北東	4	なし	—	
H-8	腰 形	4.82×4.86	0.28	19.08	—	北北東	4	なし	竈土3層 竈鉢2高坪1	
H-9	長 方 形	2.62×3.12	0.24	—	—	南東東	北北東	なし	—	
H-10	長 方 形	5.21×4.63	0.46	16.55	—	北北東	北北東	4	あり	—
H-11	長 方 形	5.74×5.14	0.52	20.12	—	北北東	北北東	4	あり	—
H-12	ほぼ正方形	4.48×4.38	0.20	13.69	—	北北東	—	なし	床面 漆鉢1	カマド壁端が2 つ
H-13	正 方 形	9.0×8.87	0.56	67.90	—	東	—	なし	—	壁端に小ピット が4個
H-14	正 方 形	5.05×4.8	0.44	18.35	—	東	4	あり	—	カマドの北と南 に小ピット3個
H-15	ほぼ正方形	3.70×4.0	0.44	9.57	—	—	2	あり	竈土3層 竈鉢1 床面 高坪2 漆鉢1	
H-16	ほぼ正方形	5.27×5.25	0.62	18.69	—	東	4	なし	床面 礫石(50個)	南東コーナーに 竈土の残骸
H-17	ほぼ正方形	5.30×5.07	0.81	19.14	—	東南東	4	なし	竈土3層 漆鉢1	
H-18	正 方 形	5.42×5.49	0.56	25.73	—	東	3	あり	竈土3層下部 高坪1	
H-19	ほぼ正方形	4.50×4.70	0.56	17.84	—	南東	2	なし	床面 漆鉢1	南東コーナーに 床の残骸
H-20	ほぼ正方形	4.37×4.01	0.50	15.77	—	北西	4	あり	生面 高坪1 竈土3層 高坪1 高坪1 高坪1 高坪1	
H-21	正 方 形	3.58×3.65	0.22	12.07	—	南南東	1	あり	3層下部 高坪1 漆鉢1	
H-22	ほぼ正方形	5.38×5.79	0.76	24.69	—	北	3	なし	床面 高坪1	カマドの東に床 の残骸
H-23	ほぼ正方形	4.51×4.35	0.60	16.06	—	東	—	なし	—	壁端に11個の小 ピット
H-24	正 方 形	3.30×3.35	0.40	9.55	—	東	1	なし	—	
H-25	正 方 形	4.10×4.20	0.62	15.44	—	北東	4	なし	—	東コーナーに竈 土の残骸
H-26	正 方 形	4.63×4.40	0.40	17.22	—	南南東	—	なし	—	
H-27	台 形	5.68×5.83	0.82	28.89	—	東	4	あり	床面 高坪2 漆鉢1	
H-28	ほぼ正方形	5.19×5.49	0.46	26.7	—	北北西	4	なし	床面 漆鉢1	北壁に床の残骸 北東コーナーに高坪
H-29	長 方 形	3.40×3.85	0.42	9.85	—	南東東	北	なし	床面 漆鉢車1	
H-30	正 方 形	4.63×4.60	0.64	14.21	—	北北西	4	あり	床面 漆鉢車1	
H-31	長 方 形	4.72×3.95	0.48	13.93	—	北東東	東	あり	竈土3層 漆鉢1高坪1	壁端に9個の小 ピット
H-32	ほぼ正方形	9.12×8.70	0.66	53.98	—	東北東	4	なし	床面 高坪1漆鉢車1	ベンチ
H-33	正 方 形	5.25×5.17	0.62	22.18	—	東北東	4	あり	床面 礫石1	
H-34	正 方 形	4.80×4.68	0.48	15.55	—	東	4	あり	竈土3層 漆鉢車1	南壁に竈土の残 骸
H-35	正 方 形	5.06×4.90	0.68	16.80	—	北東	2	あり	床面 漆鉢2 高坪2 高坪1 高坪1 高坪1 高坪1	壁端に6個の小 ピット
H-36	正 方 形	3.84×3.80	0.68	9.52	—	東	—	なし	3層 漆鉢1 高坪1 高坪1 高坪1 高坪1	
H-37	ほぼ正方形	4.02×4.12	0.44	13.19	—	北東	—	なし	高坪1 高坪1 高坪1 高坪1	大瓦片跡 小ピット14
H-38	正 方 形	4.91×5.10	0.66	20.06	—	東北東	4	あり	床面 高坪1 漆鉢車1 高坪1 高坪1 高坪1 高坪1	
H-39	ほぼ正方形	3.17×2.85	0.44	5.72	—	北東	—	なし	床面 漆鉢2 高坪1	小ピット7個 南壁にも小ピット

表 遺 構 一 覧

付編1 竪穴住居内における遺物出土の位置等について

縄文文化期における竪穴住居内の空間利用について、藤本強氏は道内の発掘調査された竪穴住居191例から、四本柱の内側と外側における遺物の出土傾向の違いに注目し、6つの区画に分け、詳細な考察を試みている（藤本強『縄文文化』1982 教育社）。

また、峰山巖氏らによっても小平町高砂遺跡出土の土器の分布や炭化材の検出状況から、同じような試みがおこなわれている（峰山巖ほか『オビラウシュベツ遺跡』1982 小平町）。

本遺跡でも、遺物の出土傾向をみるため藤本強氏にならって住居内の空間を6つに分け（図-1）、遺物の出土位置を図に示した（図2～4）。

まず、本遺跡の住居内から検出された土器・紡錘車・木器・刀子・小礫群の出土位置についてみることにする。

土器：完形や復元できた土器は、深鉢29個・高坏20個・坏2個・ミニアチュー土器1個である。これらの土器は、A・C・D区に多く、B区には1個も出土していない（図-2）。A区に出土しているものには、カマドの焚口に置かれた状態で出土したものが2個体ある（H-12・37）。これらの土器は、器種や大きさによる分布の差異は明瞭ではない。

紡錘車：完形や半欠のものが12個体出土しており、A区とC区の境にある柱穴のまわりに多くみられる（図-3）。

木器：B区とF区に各1点出土している（図-3）。B区に出土している木器は、底面が楕円形をした皿と思われる。大きさは、推定で長径10cm、短径7cm、高さ2～3cmほどのものである。F区のもの、幅8cm、長さ50cmで断面が楕円状をしており、一端が半円状に整形されている。

刀子：H-1のC区コーナー付近から1点出土している。本遺跡からはこの1点だけである。

小礫群：9軒の住居跡床面から検出された。これらはD区に多くみられ、A区とF区の境、C区、E区にもわずかにみられるが、B区からは出土していない（図-5）。

次に、カマド・袖石・焼土・ピットの位置、H-37被災住居跡内炭化材の出土状況を見る。

カマドの位置：H-15を除く38軒の住居跡に、つくりつけのカマドが検出された。それらの位置は、住居の中からみて壁のほぼ中央につくられたものが14例で、壁に向かって中央より左側につくられたものが24例である。このように、カマドの壁に向かって中央より右側につくられているものが1例もないことから、カマドの右側の空間

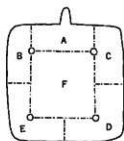


図-1 住居内空間区分図

を広くとることを意図したものとと思われる。

袖石：3軒の住居内でカマドの袖から扁平な川原石が立った状態で検出されたが、13軒では袖石はみられなかった。また、13軒では、袖石に使われたと思われる石がカマドの焚口付近に倒れた状態で出土しており、9軒では、本来あったと思われる位置とは違うところから検出された。この中でも、H-1・29では、C区のコーナーぎわに袖石が並べられた状態で検出され、H-11・23・24・36では煙道内から出土している。なお、H-23・24では、カマド焚口付近にも検出されている。これらの事例から、袖石が何らかの理由で動かされたものと推定できる。

焼土の位置：カマドや炉跡以外から検出された焼土は、14軒の住居内でみられた。これらの焼土は、C区に多く、A区とC区の境やD区とC区の境からも出土しているが、B・E・F区にはみられない。H-19・22・35で検出された焼土中には、灰のかたまりが明瞭にみられた。焼土は、住居跡床面上にあり、床面自体には火を受けた痕跡がみられなかったことから、カマド内の灰や焼土をかきだしたものである。

ピット：H-37のA区とH-39のC区から検出された。H-39のピット内から深鉢の底部が出土しただけで、H-37のピット内からは何も検出されなかった。これらのピットは、いずれも深さ5～10cmと浅いが、検出された位置からみて貯蔵の施設とかかわりをもつものであろうか。

H-37被災住居跡内出土の炭化材：本遺跡では唯一の被災住居で、住居内からは多くの炭化材が検出された。その炭化材は、出土状況からみて上下二層に分けることができる。上層の炭化材は、垂木や梁と思われるもので、住居跡内の全体から検出された。また、下層のものは、床板かないしは土止め用腰板と思われる面をとった板材で、B区とE区のコーナー付近の壁に沿ったような状態で検出された。

以上、本遺跡から検出された遺物の分布やカマド・袖石・焼土・ピットの位置・炭化材の出土状況などからみ

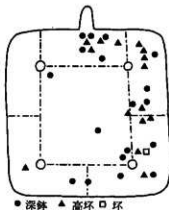


図-2 遺物出土分布図

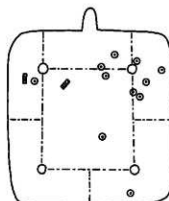


図-3 遺物出土分布図

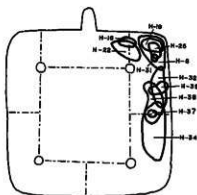


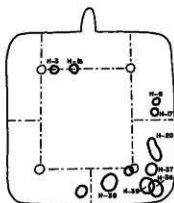
図-4 焼土分布図

て、次のようなことがいえる。

炭化材を除く遺物は、カマドに向ってA区の右側とC・D区に大部分が出土しており、カマドに向ってA区の左側とB・E・F区にはほとんどみられない。また、出土した遺物のほとんどは、柱の外側から出土している。袖石・焼土・ピットなども、遺物の分布と同じようにA・C・D区に集中してみられる。炭化した板材が検出されたB・E区からは、遺物はほとんど出土していない。

以上のようにみえてくると、楠遺跡における住居内の空間利用は、藤本強氏が前掲書で分析している標文文化期における竪穴住居のそれによく似ていることになる。

(立川トマス)



図一五 集石分布図

付編2 楠遺跡における住居の変遷について

1

四年間にわたる発掘調査で発見された弥文文化期の住居跡は39軒である。楠遺跡はその周辺の地形、発見された住居跡のまとまりからみて、住居跡の総数はこれを上まわらない集落であったと考えられる。また出土土器をみると、楠遺跡はすべてが同一時期に居住されていたのではなく、ある程度の時間幅をもって居住されていたことが推測される。

未解明部分の多い天塩川中流域における弥文文化期の遺跡の中で、39軒の住居跡が発掘された楠遺跡の占める位置は大きいといえよう。さらに住居跡群としてまとまりをもつ楠遺跡における住居の変遷をたどることは、天塩川中流域という一地域にとどまらず、弥文文化期全体にわたる住居の変遷を考える上で意義あることと考えられる。

本書の中で触れているように、楠遺跡周辺は全面に削平をうけており、住居構築時の排土による盛り土がまったく検出されなかった。また住居跡の切り合い関係もみられなかった。そこで楠遺跡の出土土器（完形、および復元可能な土器をおもな対象とする）の編年を試み、それを基に、カマドの煙道方向を比較検討し、住居の変遷を考えていくことにする。

2

楠遺跡出土の弥文式土器は器形の上から深鉢と坏に大別できる。深鉢は便宜的に大型（器高24cm以上）、中型（同11～24cm）、小型（同11cm以下）に分けられる。坏は低い台をもつ二個体を除くほかは高坏である。

さて楠遺跡の土器は、これまで公にされた編年によると、概して新しい時期に位置づけられる。すなわち総体的にみると深鉢では口縁部の外反は比較的小さく、胴部から底部にかけてはゆるやかにすばまる。また文様構成にあっては、頸部には横走する沈線はみられず、胴部文様は斜交叉文や鋸歯状文が主体で複段となっている。このようにあまり時間的な差異を見い出せないが、口縁端部の立ちあがり、あるいは文様構成などに微妙な変化がみられる。たとえば大型の深鉢の口縁端部では、①ほぼ垂直に立ちあがるもの ②ゆるやかに立ちあがるもの ③立ちあがりかほとんどみられないものに分けられる。そして口縁端部の変化に対応するように文様構成においてもわずかな変化がみられる。基本的な文様構成をみると、①斜交叉文+横走する沈線上に針葉樹状の文様 ②斜交叉文+縦位の刻線上に菱形状の文様+斜交叉文 ③斜交叉文+鋸歯状文および両脇に列点文を付す鋸歯状文という連続的な変化がある。このことから楠遺跡の出土土器を以下のように3時期に分けることが可能である（図-1参照）。

第1期 口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はほぼ垂直に立ちあがる。口縁部外面はていねいな隆起帯をつくり、刻文を付す。胴部には斜交叉文と数条の横走沈線上に針葉樹状の文様を描き、複段の文様を構成する。中型の深鉢には鋸歯状文や縦位の刻線文などを描いているものもある。胴下部には斜位の短刻線、あるいは低い山形文が付されている。

第Ⅱ期 口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はゆるやかに立ちあがる。口縁部外面は隆起帯を有し、刻文を付す。胴部には二段の斜交叉文の間に、縦位の刻線の上に菱形状の文様を描き複段の文様を構成する。また蹄輪状文を描き、その上方空間に3本の刻線文を縦位に付す土器が共伴している。胴下部には矢羽根状文、低い山形文が付されている。また無文の土器もある。



図-1 堀遺跡における土器編年

第Ⅲ期 口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部の立ち上がりはほとんどみられない。口縁部外面には低い隆起帯をもつが、刻文の付されている土器と無文の土器とがある。胴部には斜交叉文と鋸歯状文、また鋸歯状文のみの土器がある。中型の深鉢では斜交叉文のみ、あるいは両脇に列点文の付された鋸歯状文を描く土器がある。胴下部には斜位の短刻線、鋸歯状文が付されるか、無文になっている。このような文様構成からみて、この時期は複段から単帯の文様へ移行する段階に相当するものと考えられる。文様は非常に粗雑である。

なお坪については深鉢に共伴するものの器形、文様構成などを確認できたにとどまり、編年的にとらえることはできなかった。

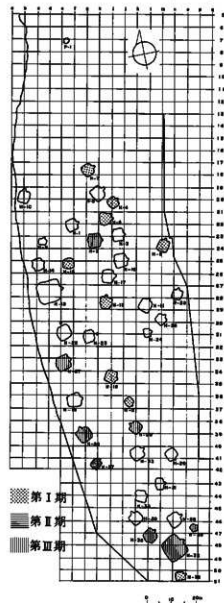


図-2 住居の変遷(1)

3

39軒の住居跡のうち、完形および復元可能な土器で、上記の編年に対応できる土器を出土したのはH-2・5・7・8・12・19・20・21・27・28・35・36・37・39の14軒である。この中で床面出土のものおよびその住居に伴うものと思われる土器で判断すると、第Ⅰ期はH-5・12・19、第Ⅱ期はH-37、第Ⅲ期はH-2・20・27・28・35・39の10軒である。さらにH-7・8・21・36の覆土出土の土器をみると、H-7覆土3層出土の中型の深鉢は第Ⅰ期の文様構成をもち、H-8覆土3層出土の大型の深鉢は第Ⅱ期の文様構成をもつ。H-21覆土3層出土の大型の深鉢は第Ⅱ期の文様構成をもつ。またH-36覆土3層出土の中型の深鉢は第Ⅰ期の文様構成をもつ。したがってH-7・8・21・36は広く第Ⅰ期に含めておく。さらにH-4覆土3層出土の大型の深鉢の口縁部破片には第Ⅰ期の文様構成がみられ、H-32床面出土の中型の深鉢の口縁部破片には両脇に列点文を付する鋸歯状文が施されており、第Ⅲ期に相当する。以上16軒の住居跡より出土した土器を検討した結果、次のような住居の変遷が考えられる(図-2参照)。

第Ⅰ期 H-4・5・7・8・12・19・21・36

第Ⅱ期 H-37

第Ⅲ期 H-2・20・27・28・32・35・39

3時期に分けた住居の変遷をみると、同一時期

の住居跡間でカマドの煙道方向のちがいがかることに気がつく。すなわち第Ⅰ期では北北東(H-8・12)、東北東(H-4・7)、東(H-36)、東南東(H-5)、南東から南南東(H-19・21)の5方向、第Ⅲ期では北西から北北西(H-20・28)、北東(H-32・35・39)、東(H-2・27)の3方向である。煙道方向のちがいが時間的な差異を示すものかどうか、各住居跡出土の土器をもう一度検討してみることにする。

H-4覆土3層出土の土器は口縁部がほぼ直角に近い角度で外反し、同時期の中ではもっとも古い器形と考えられる。H-5床面出土の土器は第Ⅰ期から第Ⅱ期への過渡的な文様構成をもっている。H-12床面出土の土器は横走する沈線の幅が広く、H-19床面出土の土器より古相を示している。H-36覆土3層出土の土器はH-12の土器と同時期と思われ、層位による上下関係からH-36がH-12より古いものと考えていだろう。H-2床面出土の土器は2段の文様帯を構成し、H-28・35床面出土の土器より古いと考えられる。またH-28・35出土の土器は両脇に列点文の付される鋸歯状文が描かれているけれども、H-28出土より古相を示している。

このように同一時期内において煙道方向にちがいがみられ、それに対応するように出土土器にも時間的な差異がみられる。このことから第Ⅰ期、第Ⅲ期、の同一時期内の比較的短時間に、数回の居住の変遷がみられたことになる。そこで16軒の住居跡に限定し、その変遷をたどっていると、

第Ⅰ期 (H-4・7) → (H-36) → (H-8・12) → (H-18・21) → (H-5)

第Ⅱ期 (H-37)

第Ⅲ期 (H-2・27) → (H-20・28) → (H-32・35・39) となる。

これらのことから第Ⅰ期では調査区の北から南にかけておもに東側に、第Ⅱ期は南西寄りに、第Ⅲ期では北から南にかけておもに西側という住居構築の大きな変遷をたどったらしいことがうかがえる。

4

カマドの煙道方向のちがいが時間的な差異に起因すると考えられるならば、出土土器の編年によって、その変遷をたどることのできなかった他の22軒の住居跡についても検討が可能となる(H-15はカマドがなく、ここでは除外する)。

まず各時期に対応するおおよその煙道方向により38軒の住居跡を3時期に分けると、第Ⅰ期は16軒、第Ⅱ期は3軒、第Ⅲ期は19軒となる。さらに同一時期内の煙道方向のちがいを、前述した16軒の住居跡によって確認した変遷を対応させると、

第Ⅰ期 ① (H-4・7) → ② (H-31・34・36) → ③ (H-8・9・10・11・12・29) →

④ (H-19・21・26) → ⑤ (H-5・15・17)

第Ⅱ期 ⑥ (H-6・25・37)

第Ⅲ期 ⑦ (H-1・2・3・13・14・16・18・23・24・27) → ⑧ (H-20・22・28・30)

→ ⑨ (H-2・33・35・38・39)

となる。このうち第Ⅰ期の③、第Ⅲ期の⑦・⑨では、その中でさらに煙道方向にわずかな差異がみられる。すなわち第Ⅰ期の③はH-8・9・10・11の4軒、H-12・29の2軒に、第Ⅲ期の⑦はH-2・3・16・24の4軒、H-1・23・27の3軒、H-13・14・18の3軒に、⑨はH-32・33・38の3軒、H-35・39の2軒にそれぞれ分けられることが可能である。このことから第Ⅰ期では6回(1 [H-4・7] → 2 [H-31・34・36] → 3 [H-8・9・10・11] → 4 [H-12・29] → 5 [H-19・21・26] → 6 [H-5・15・17])、第Ⅱ期では1回(7 [H-6・25・37])、第Ⅲ期では6回(8 [H-2・3・16・24] → 9 [H-1・23・27] → 10 [H-13・14・18] → 11 [H-20・22・28・30] → 12 [H-32・33・38] → 13 [H-35・39])の居住が継続して行われたことが推測される(図-3参照)。なお、H-15は深鉢の出土がなく、カマドも検出されなかったため分析の対象から除外してきた。しかし位置関係および住居の方向などから検討するとH-5・17のグループに相当するものと考えられる。

なお同時居住については第Ⅰ期が2～4軒、第Ⅱ期が3軒、第Ⅲ期が2～4軒という構成がみられる。13回の居住のうち3軒による同時居住は7回みられる。この3軒の同時居住の位置関係をみると、7回のうち6回では2軒が隣接し、他の1軒がやや離れている。

5

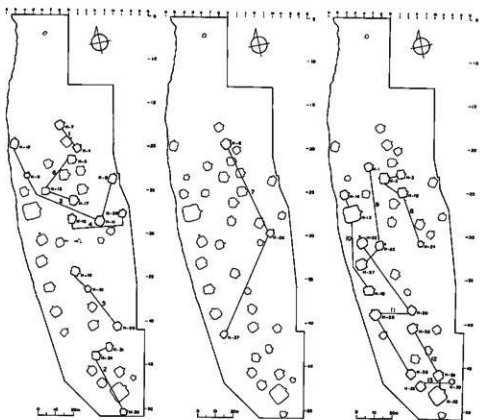


図-3 住居の変遷(2)

楠遺跡における住居の変遷を出土土器の編年と竪道方向のちがいの視点から検討してきた。その結果、住居の変遷および同時居住について次のような結論に一応達することができた。

第Ⅰ期ではもっとも北寄りから居住が始まり、一度南に移るが、その後北へ、そしてまた南へ移り、再び北へ移動する。第Ⅱ期では離れた位置に分散するが、第Ⅲ期では第Ⅰ、Ⅱ期の住居跡を避け、それらの西側を北から南へ移動していったものと考えられる。

また同時居住の在り方をみると3軒がもっとも多い。ただその位置関係では、隣接した2軒とやや離れた1軒という構成を指摘することができる。これに2軒あるいは4軒の同時居住を含めて考えると、楠遺跡においては、2軒が基本的な同時居住の単位だったのではないかと推測できる。ある時期には何らかの事情により1軒、あるいは2軒が加わり、集落を構成していたと考えられる。しかしこの位置関係、集落構成の変化がいかなる要因によるものなのか判断する材料はない。

わずかに16軒の住居跡で検討して得た結果を他の22軒の住居跡に適用し、また住居の諸々の構造、また立地あるいは生活環境という側面からの考察が欠落しており、多面的かつより具体的な検討ができず、推定の域を出なかった。ただ一つの可能性として提起した次第である。(和泉田毅)

参考文献 山崎博信他(1970):『紋穂内遺跡』美濃町教育委員会

藤本 強(1972):『常呂川下流域の縄文土器について』東京大学文学部考古学研究室編『常呂』

宇田川洋(1977):『北海道の考古学2』北海道ライブラリー11,北海道出版企画センター

(1979):『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』名寄市教育委員会

(1980):『ホロナイゴ遺跡～枝幸バイパス建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書～』枝幸町教育委員会

宇田川洋(1980):『縄文文化』野村崇・菊地俊彦編『北海道考古学講座』みやま書房

藤本 強(1980):『ライトコロ川口遺跡における集落の変遷』東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編『ライトコロ川口遺跡』

(1981):『ホロナイゴ遺跡Ⅱ』枝幸町教育委員会

藤本 強(1982):『縄文文化』教育社歴史新書〈日本史〉36 教育社

(1983):『ウエンナイ2遺跡～枝幸バイパス建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書～』枝幸町教育委員会

はじめに

h-47区から出土した土器は、第七章でふれた通り押型文土器としては、その形態、文様の組み合わせが前例のないものである。単独の出土という限界もあるが、この資料は押型文土器の位置づけを考える上でいくつかの興味深い問題をふくんでいる。

研究の現状

北海道における押型文土器については、すでにいくつかの論考が発表されているが、それらをまとめてみると、およそ以下の通りであろう。

北海道内の押型文土器は、本州に分布する押型文土器とはその系統、時代が異なっているらしい。北海道の押型文土器は、尖底の土器群は、オホーツク沿岸から網路地方にかけて分布し、その遺跡は沖積地にのぞむ段丘縁などに立地することが多く、しばしば貝塚をともなっている。この押型文尖底土器は、「中野式」などの繊維を含む尖底土器のグループで、縄文時代前期に属するものである。平底の土器群は、北海道北部の内陸に分布し、遺跡の多くは河川沿いの、低位の河岸段丘に立地している。天塩川流域では名寄市智東遺跡B地点(山崎博信, 1968)、士別市多寄遺跡(佐藤忠雄, 1960)などがある。楠遺跡も例外ではない。この土器群は胎土に繊維を含まず、時代的には縄文時代前期、または中期といわれ、見解の一致をみていない。

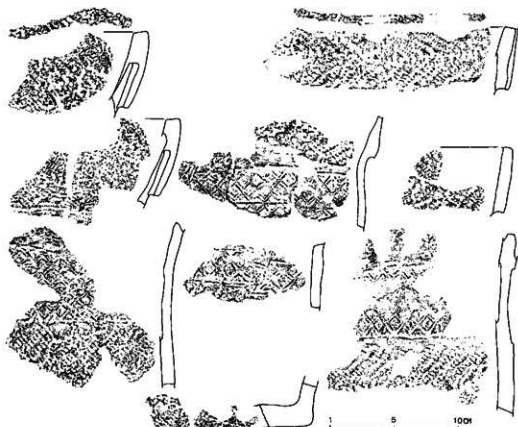
楠遺跡出土資料の意義

楠遺跡の押型文土器は、押型文の施文という点からみれば、明らかに「神居式」、「外寄式」といわれる回転押型文平底土器と関連をもつものといえよう¹⁾。しかし、口縁部の型態や全体の器形は、押型文平底土器のグループには関連性を認められず、むしろ道央部における円筒上層式のグループに類例がみられる。

本資料のような口縁部の肥厚帯と山形突起は円筒上層a式以降さかんに用いられ、結束羽状縄文は、「大麻V式」(中村重・君伊彦, 1970)においてすでにあらわれている。問題は、楠出土資料が円筒上層式のどの段階に位置づけられるかである。かつて杉山壽榮男氏が稚内声間出土として紹介した押型文土器のなかに、波状口縁の土器で本資料によく似た格子目押型文の施文例がある(杉山壽榮男氏, 1933)。この土器は、押型文の上に連続竹管文が施されている。この竹管文は、道央部の「天神山式」に特徴的にあらわれる手法で、この押型対土器が「天神山式」に接近した年代の所産であることを示している。

このことから考えれば、稚内声間の押型文土器と類似する本資料も同様な年代が与えられるのではないだろうか。道北部では、名寄市智東遺跡A地点(山崎博信, 1968)の土器に先行するものとおもわれる。

器形、文様などを考慮すると、本資料は、円筒上層式に後続する土器群と押型文平底土器群との接触・融合を示す資料と考えられる。編年的には円筒上層式の年代からみて、縄文時代中



図一 I H-47区出土の押型文土器

期に属するものと推定される。

比較資料の検討

さて、桶出土資料のような、いわゆる「折中様式」は現在4か所が報告されている。押型文と縄文の複合施文資料は、旭川市神居古潭8遺跡（斉藤傑，1979）¹⁹旭川市基北川河畔（佐藤忠雄，1960）²⁰上川群東神楽（斉藤武一，1956・河野広道，1958），江別市萩ヶ岡（高橋正勝，1982）である。これらはいずれも胎土に繊維を含まず平底土器のグループらしい。ただし、東神楽の例は矢羽根状、連続山形文と捺承文の複合であり、当遺跡出土例とはやや異なっている。注目すべきものは、江別市萩ヶ岡出土の押型文土器で、口縁部の小破片だが格子目の押型と斜縄文の複合例である。口唇上にまで施文され、内面の調整がていねいな点など、桶出土資料といくつかの共通点が認められる。報告書によれば、この押型文土器は「萩ヶ岡Ⅰ式」および「サイベ沢Ⅶ式」を出土したIV2文化層から発見され、両者は共伴の可能性があるという（高橋正勝，1982）。

萩ヶ岡遺跡におけるこのような層位的事実は、道北部に展開する回転押型文平底土器と道央部の円筒上層式との接触の事実と、年代決定のあかしといえよう。

まとめ

押型文平底土器は、従来「繊維尖底土器群より新しく、北筒式土器群より古い土器群」といわれてきた。そして、繊維を含む尖底土器→モコト式土器→北筒式土器という変遷にかかわりなく限られた範囲で存在した異質のグループと理解されている(藤本強, 1979)。しかし、繊維を含む尖底土器群からスムーズに継起するとおもわれていた北筒式の編年的位置は、これと離れており新しく位置づけられる趨勢にある(大沼忠孝, 1981)。

押型文平底土器や「網走式」・「シュブノツナイ式」といわれる土器を、このすきまを埋めるものとしてあててくる説はすべてに示されており(後藤秀彦, 1976)、具体的な資料もわずかながら明らかにされている(宮宏明, 1983)。このような動きの中で、押型文平底土器のある段階が、当遺跡の出土資料をなかだちとして、縄文時代中期の一時期に特定できたことは意義のあることと思われる。縄文時代中期における道央部と道北部の関係は未だ点と点とつながりとしてしかわからない。しかし、本資料のような発見例が増えることによっていずれ明らかにされるものと考えられる。(森 秀之)

注(1) 館資料のような2重の格子目のものは、杉山壽榮男氏が紹介した旭川出土例と稚内声間出土例のみと思われる(杉山壽榮男 1933)。ただし、1単位の格子を1つ1つ別々に原体に刻む点で本資料とは異なる。

(2) 報告書中7図8の土器がそれぞれ、「沈線文」となっているが押型文の可能性が強いと思われる。

(3) 旭川商業高校郷土研究部蔵。文様は磨滅しているが、縄文はL-Rの単節斜縄文のようである。

参考文献

- 杉山壽榮男 1926 「北海道出土古式土器と亀ヶ岡式土器」『北海道原始文化叢書』屏川会
河野 広道 1955 「斜里町先史時代史」
1958 「北海道出土の廻転押型文土器について」『アイヌ・モシリ』第2号
児玉作左衛門・大場利夫 1956 「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11
大場 利夫 1956 「押型文土器の新資料」『先史時代』第4輯 先史学同好会
江坂 輝弥 1957 「先史時代 II 縄文文化」『考古学ノート』2
佐藤 忠雄 1960 「押型文土器の一資料」『北海道史論』第6輯
河野 広道・沢西郎 1962 「東釧路」釧路市教育委員会
駒井 和愛 1963 「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」上 東京大学文学部
吉崎 昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性—北海道—」『日本の考古学』II
岡崎 文喜 1968 「北海道押型文土器の編年の位置について その1、研究史」
「アイヌ・モシリ」第12号
佐藤 達夫 他 1972 「常呂」東京大学文学部

- 山崎 博信 1968 『智東遺跡B地点 本文篇』 名古屋市立図書館
 佐藤 忠雄 1960 『多寄』 土別市教育委員会
 斉藤 武一 1956 『私と埴型文土器』
 後藤 秀彦 1976 『鹿追町考古学研究報告』 I 鹿追町教育委員会
 藤本 強 1979 『北辺の遺跡』 教育社 48P～50P
 高橋 正勝 他 1982 『萩ヶ岡遺跡』 江別市教育委員会
 宮 宏明 1983 『埴型文土器管見』 『考古学研究』 29-4

付編 4 土壌の水洗処理と魚類遺存体について

昭和55～58年度の4年間の調査でサンプリングされていた土壌について水洗処理を行った。サンプルは表にみられるように大部分はカマド及び炉跡の焼土で、土器内の土壌がわずかにある。処理の手順は次のとおりである。

土壌の乾燥→フローテーションによる炭化物の採取→3mm、1mmメッシュふるいでの水洗→メッシュ上の資料の採取→資料の種類別の乾燥、収納。

検出されたものは、炭化物、黒曜石チップ、魚骨片である。炭化物はいずれも小片で、植物の種子などはみられなかった。黒曜石チップは2点である。

魚骨は、焼けて白色化しており、原形をとどめているものはない。同定できたものは、サケ科の魚類の椎体片、両顎歯、コイ科の魚類の椎体片で、総量と内訳は次のとおりである。

H-15炉跡	0.2g	サケ科椎体片
H-24カマド	1.6g	サケ科椎体片、両顎歯、コイ科椎体片
H-30カマド	0.35g	サケ科椎体片、両顎歯
H-33炉跡	0.15g	サケ科椎体片、両顎歯

サケ科の魚類の椎体は、その側面が多孔質で網目状の特徴をもっているため、破片になっていても他の魚類とは容易に区別がつく。ここでサケ科としたものの中には、椎体の大きさから考えて、2種類のものがある。ひとつは、陸海性のサケ属のシロザケのもので、椎体の周径は1cm前後、と考えられる。他のひとつは、椎体の周径が5mm以下のもので、陸封性のニジマス属、イワナ属の可能性がある。

コイ科の魚類の椎体は非常に小さく、ウグイと考えられる。

天塩川でのサケの遡上は古くから知られているので、今回検出したサケ科やコイ科の魚類は、当遺跡の脇を流れる天塩川で捕獲されたものと考えられてよいであろう。

山内清男によって提唱された縄文時代における「サケ・マス論」⁽³⁾は、観念的に一人歩きしているものの、今日にいたっても具体的に実証されているとはいえない。しかし近年の精緻な貝塚調査や、総合的な動物遺存体研究の進展にともない、サケ科の魚類の検出例も増えている。道内においても知内町湯の里1遺跡の埋蔵内の土壌水洗によって得られた資料について詳細な検討が加えられている。⁽⁴⁾

縄文文化期の生産活動においても、サケ、マスの捕獲は不可欠のものであると考えられているが直接的な証拠はきわめて少ない。⁽⁵⁾

一方、農耕活動に関しては種々の研究があり、炭化種子の検出や花粉分析の成果から具体的にソバや緑豆などの雑穀の栽培が指摘されている。⁽⁶⁾

今回検出したサケ科の魚骨は少量ながら、縄文文化期のサケ・マスの利用に関する具体的な資料として重要である。

また、縄文文化期の住居跡の火処をめぐる検討において、カマドと炉は機能的に分離される

ものでなく、共存することはすでに論じられている。当遺跡の場合でもカマドと炉跡の両方から魚骨が出土している。魚骨の出土を調理の結果と考えれば、両者において調理がなされていたことになる。ただ、すべての住居跡について等質なサンプリングが行われたわけではないので、可能性の域をでない。住居内における調理や、場の決定を行うためには標津町伊茶仁カリカリウス遺跡の調査例¹⁰⁾のように焼土だけでなく、床面全体の土壌の水洗を行う必要があるかもしれない。

当遺跡以外でも、札幌市北海道大学構内遺跡や旭川市錦町5遺跡の調査で、縄文文化期の焼土を水洗した結果、サケ科の魚類の椎体片や同顎歯が出土しているという。縄文文化期のサケの利用についても具体的に検討できる資料が増えつつある。(長沼 孝)

注(1) 式部義明編1971、11「第7章水産」『美濃町史』P346～348 美濃町

(2) 山内清男1964 「日本先史時代概説」『日本原始美術』I P135～147 (山内清男・先史考古学論文集新第二集1969所収)

(3) 渡辺誠1966 「日本石器時代文化研究における『サケ・マス』論の問題点」『古代文化』18—2 P33～36

(4) 松井章、山田格1981、12 「北海道知内町湯の里遺跡—整穴住居址出土魚骨の検討—」『考古学研究』28—3 P97～105

(5) 藤本強1982、8 「縄文文化」教育社歴史新書〈日本史〉36 P200～203 教育社

(6) 山田悟郎1976、3 「天塩川口遺跡の花粉分析」『天塩川口遺跡』P50～53 天塩町教育委員会

———1977、3 「名寄市智東遺跡の花粉分析結果」『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』P130～136 名寄市教育委員会

———1978、3 「住居址内から検出された花粉について」『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』P77～80 千歳市教育委員会

———1981、3 「花粉分析」『奥尻島青苗遺跡』P66～68 奥尻町教育委員会

———1982、 「下添山、鶴野2遺跡の花粉分析」『北海道における農耕の起源 (予報)』P23～25 梅原達治

———1983、3 「花粉化石からみた古植生と栽培植物について」『おびらたかさご縄文時代の集落跡本文編』P179～185 留萌土木現象所、小平町教育委員会

(7) 前田潮1980、3 「縄文時代住居の火処について」『北方科学調査報告』1 P139～141 筑波大学

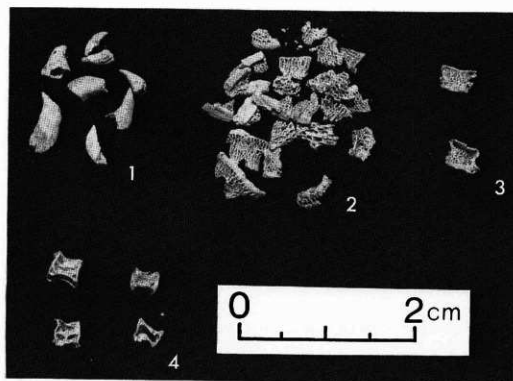
乾孝弘1982、8 「縄文時代以降における火処変遷の一考察」『物質文化』P37～46

(8) 稲田光明1982、3 「伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書」P98～105 標津町教育委員会

(9) 北海道大学構内遺跡については、北海道大学文化財調査室横山英介氏、錦町5遺跡については、旭川市教育委員会斎藤氏の御教示による。

住居跡No.	調査年度	焼土		その他	検出物
		カマド	灰 跡		
H-1	昭和55年度	○			
H-2	"	○			
H-11	昭和56年度		○		炭化物
H-12	"		○		
H-13	"	○	○		炭化物
H-14	"	○	○		
H-15	"		○		炭化物、魚骨
H-16	"	○			
H-17	"		○		炭化物
H-19	"	○			
H-20	昭和57年度			土器内土壌	炭化物
H-21	"			"	黒曜石チップ
H-23	"	○			
H-24	"	○			魚骨
H-30	昭和58年度	○			"
H-32	"		○		
H-33	"		○		魚骨
H-37	"	○			
H-38	"	○			魚骨

表 水洗処理土壌一覧



機遺跡出土の魚骨 1. サケ科両顎歯 2. 3. サケ科椎体 4. コイ科椎体

住居跡H-37内ピットを埋積した土壌試料の花粉化石

北海道開拓記念館研究員 山田 悟 郎

1 試料と処理方法

ここで取扱った試料は37号住居跡内にピットを埋積した、いくぶん腐植質な砂質粘土4点である。上位2点の試料は炭化物に富んでいた。

試料の処理にあたっては約1kgの土壌試料をビーカーにとりだし、アルカリ処理→水洗→硫酸処理→水洗→アルカリ処理→水洗→比重分離→水洗→アセトリシス処理→水洗→時計皿処理→HF処理→水洗の順に化学処理を行ない、グリセリンゼリーで封入しマニキュア液でシールして各3枚のプレパラートを作成した。

検鏡は通常400倍で行ない、粒径の測定は600倍で、写真撮影は400倍で行った。計数にあたっては樹木花粉が200個以上になるまでに出現した各種花粉・胞子を無作為に同定した。

表示にあたっては、樹木花粉については樹木花粉総数を基数とし、草本花粉、胞子については総花粉、胞子数を基数とした百分率で、それぞれの出現率を算出し花粉ダイアグラムに表示した。

尚、花粉ダイアグラムの末尾には樹木花粉、草本花粉、胞子の出現比を示した。

2 分析結果

検出された花粉・胞子は樹木花粉19属1科、草本花粉3属15科、胞子5科の22属21科で、その内訳及び想定される樹木・草・胞子は次の通りである。

Picea (トウヒ属: エゾマツ・アカエゾマツ)、*Abies* (モミ属: トドマツ)、*Pinus* (マツ属: ハイマツ)、*Betula* (カバノキ属: シラカンバ・ウダイカンバ・ダケカンバ)、*Alnus* (ハンノキ属: ハンノキ・ケヤマハンノキ等)、*Juglans* (オニグルミ属: オニグルミ)、*Quercus* (コナラ属: カシワ・ミズナラ)、*Ulmus* (ニレ属: ハルニレ・オヒョウニレ)、*Acer* (カエデ属: イタヤカエデ・ハウチワカエデ・クロビイタヤ・ヤマモミジ等)、*Tilia* (シナノキ属: シナノキ・オオバボダイジュ)、*Phellodendron* (キハダ属: キハダ)、*Fraxinus* (トネリコ属: ヤチゲモ)、*Magnolia* (モクレン属: ホウノキ・コブシ)、*Araliaceae* (ウコギ科: ハリギリ・コシアブラ・タラノキ等)、*Cercidiphyllum* (カツラ属: カツラ)、*Salix* (ヤナギ属: オノエヤナギ・エゾノカワヤナギ・ネコヤナギ等)、*Hydrangea* (アジサイ属: ノリウツギ・ツルアジサイ)、*Rhus* (ウルシ属: ヤマウルシ・ツタウルシ)、*Myrica* (ヤチヤナギ属: ヤチヤナギ)、*Ligustrum* (イボタノキ属: イボタノキ等)の樹木、*Artemisia* (ヨモギ属: オオヨモギ)、*Carduoideae* (キク亜科: アキタブキ・ハンゴンソウ・ヨブスマソウ・チシマアザミ等)、*Chenopodiaceae* (アカザ科: シロザ・ハマアカザ等)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科: カワラナデシコ・ミミナグサ・ウシハコベ等)、*Ranunculaceae* (キンボウケ科: ニリンソウ・カラマツソウ・ルイヨウシヨウマ等)、*Polygonaceae* (タデ科: オオイタドリ・ミゾソバ・エゾノギシギシ等)、*Fagopyrum* (ソバ属: ソバ)、*Umbelliferae* (セリ科: エゾニユウ・オオハナウド・ヤブジラミ等)、*Rosaceae*



(バラ科: オニシモツケ・ナガボノシロワレモコウ・キンミズヒキ・オオダイコンソウ等)、Cruciferae (アブラナ科: コロンソウ・ヤマガラシ等)、Chloranthaceae (センリョウ科: ヒトリシズカ・フタリシズカ)、Saxifragaceae (ユキノシタ科: ネコノメソウ・ズタヤクシュ等)、Leguminosae (マメ科: クサフジ・ヌスビトハギ等)、Geraniaceae (フウロウソウ科: チシマフウロウ等)、Liliaceae (ユリ科: オオウバユリ・ユキザサ・オオバナノエンレイソウ・マイズルソウ等)、Lysichiton (ミズバショウ属: ミズバショウ)、Gramineae (イネ科: クマイザサ・ヨシ・ススキ・エノコログサ等)、Cyperaceae (カヤツリグサ科: アブラカヤ・カブスゲ等)の草本、Osmundaceae (ゼンマイ科: ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ等)、Lycopodiaceae (ヒカゲノカズラ科: ヒカゲノカズラ)、Monolate type spore (シダ類: オシダ・メシダ等)、Pteridaceae (ワラビ科: ワラビ等)、Equisetaceae (トクサ科: スギナ等)の胞子である。

4点の試料から検出された花粉化石の出現率は同じ傾向を示し、出現率の増減に大きな変化は見られない。

樹木花粉では広葉樹の *Alnus* が優占し、他に針葉樹の *Abies* と広葉樹の *Betula*、*Quercus*、*Ulmus*、*Fraxinus*、*Tilia*、*Araliaceae*、*Salix* を伴う。草本花粉では Gramineae が優勢で、次いで *Artemisia*、*Ranunculaceae*、*Polygonaceae*、*Umbelliferae* が多く出現し、胞子では Monolate type spore が優勢である。

また、下位で栽培植物の *Fagopyrum* (ソバ属) が1%弱ではあるが確認された。

3 古植生について

1) 37号住居跡周辺の古植生

ビット内から確認された花粉化石群集から、遺跡周辺の古植生は次のように推定される。

遺跡周辺にはハンノキを主とし、ヤチダモ・ヤナギをまじえた低湿地林が形成され、林床下にはヨシ・カヤツリグサ・シダ類が繁っていた。しかし、林は疎で沖積氾濫原には草地在ひろがっていたと考えられる。草地はオオヨモギ・オオイタドリ・カラマツソウ・ニリンソウ・オニシモツケ・エゾニュウ・ススキを主とした群落で構成されていた。

また、周囲の河岸段丘、傾斜地には針葉樹のトドマツと広葉樹のミズナラ・ハルニレ・シラカンバ・シナノキ・カエデ・ハリギリを主とした針広混交林が形成されていたようである。

ビットが掘られてから埋積されるまでの間に、植生が変化した様子は見られない。

2) *Fagopyrum* 花粉について

ビットの下位を埋積したNa 3、Na 4の試料からはそれぞれ1%弱ではあるが *Fagopyrum* (ソバ属) 花粉が検出された。

Fagopyrum は縄文時代の6ヶ所の遺跡で確認され、天塩川流域でも山田 (1975, 1979) により天塩町天塩川口遺跡の住居跡床面、名寄市智東H遺跡の住居跡床面で確認されている。

日本には野性の *Fagopyrum* は存在せず、遺跡から検出される *Fagopyrum* 花粉は栽培種のソバの存在を示すものと考えられる。

一方、縄文時代には雑穀栽培が行われていたことがあきらかになっていることから、縄遺跡

においても遺跡周辺でソバが栽培されていたことは確実であろう。

また、属の同定はできなかったが栽培種と考えられるイネ科の花粉もわずかではあるが確認されているので、ソバとイネ科の雑穀を栽培した農耕が行われていたと推定することができる。

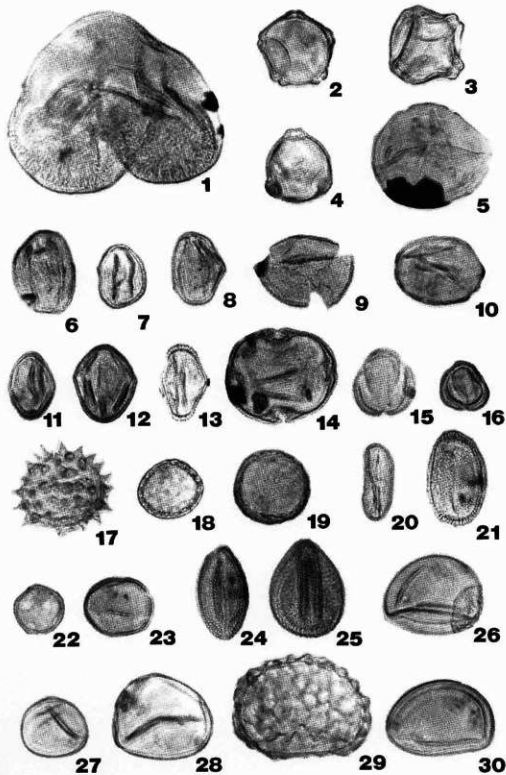
但し、その形態、規模については、今のところ不明である。

参考文献 山田悟郎 (1975) : 「天塩川口遺跡の花粉分析」『天塩川口遺跡』天塩町教育委員会

(1979) : 「遺跡の花粉分析」『名寄市文化財調査報告書1』名寄市教育委員会

出土した花粉化石 (次ページ写真)

1. *Picea* 2~3 *Alnus* 4. *Betula* 5. *Juglans* 6~8 *Quercus* 9. *Acer* 10. *Ulmus*
11~13. *Araliaceae* 14. *Tilia* 15~16. *Artemisia* 17. *Carduoideae* 18~19.
Chenopodiaceae 20~21. *Umbelliferae* 22. *Ranunculaceae* 23. *Chloranthaceae* 24.
Polygonaceae
25. *Fagopyrum* 26~28. *Gramineae* 29~30. *Monolate type Spore*
2・6・15・27Na 1 試料、11・22Na 2 試料、1・9・18・28~29Na 3 試料、3・5・7・8・
10・12~14・16~17・19~21・23~26・30Na 4 試料



1983 年度北海道埋蔵文化センター 発掘の諸遺跡に関する ^{14}C 年代測定結果

京都産業大学 山 田 治

はしがき

放射性炭素 ^{14}C による年代測定の原理については、今や疑う人はない。これを液体シンチレーション絶対測定法によって行なえば、放射線の計数と、計数効率の二つの物理量の計測を行なうがゆえに完全無欠な結果が得られ、数学的な統計誤差範囲以上の差異は稀にしか生じない。即ち、 1σ の誤差範囲に真の値は68%、 2σ には95%、 3σ には99.7%はいるのである。この点、従来の気体計数法では放射線の計数しか測定していないから、統計誤差の範囲から大きなずれを生じて責任を取ることはできにくい。世界的な風潮として、 ^{14}C 年代測定の手段にしたいに液体シンチレーション法が増加しつつあるのも理由あることである。

ところで、 ^{14}C 年代測定結果はあくまでも試料そのものの年代であって、遺跡の年代と一致するかどうかは、その試料が確実にその遺跡の遺物であることが保証されない限り断定できないのであり、推測値と大きく異なる場合は、もう一度遺跡の状況の検討が必要になる。そのような試行錯誤のくりかえしからしだいに真の年代が明らかにされていくであろう。

本試料の測定においては、すべての試料が数通間の隔りをおいて各々2回、1回につき700分ないし1200分の間計数され、またその前後において5回以上の計数効率の測定がなされた。測定値は特別微量のものを除きすべて統計誤差理論を満足するものであった。試料炭素が0.5グラム以下になると統計誤差よりも実験誤差のほうに重みがかかってくることを注意願いたい。

楠遺跡の ^{14}C 年代測定結果

KSU-684 (H-6 かまど内) 920 ± 70 B.P. 木炭、炭素量 1.78 g, 2000 分測定

KSU-685 (H-7 かまど内) 760 ± 50 B.P. 木炭 2.96 g 2200 分

KSU-686 (H-37 床面) 820 ± 55 B.P. 木炭 2.35 g 2200 分

Comment

この三点の試料が同一時代であるか、若干の時間差があるかは上記の結果だけではまだ判断できない。KSU-686 からみると三点ともほぼ 1σ 内にあるが、KSU-684 と KSU-685 とは 2σ から少しはずれる。試料木炭が多いときはこのような場合でも十分判定できる。

附 記

上記の測定値において、 ^{14}C 年代半減期はすべて国際的約束に基く5568年が採用されている。B.P.はBefore Presentの略で、AD 1950年0B.P.である。

楠遺跡のように更に細かな年代を知りたい場合は年輪年代による補正について次の文献に当らるとよい。

E.K.Ralph et al, MASCA News Letter V.9, 1973

H.N.Michael, E.K.Ralph, Radiocarbon V.16, 1974

東村武信 考古学と物理化学, 学生社

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告第15集

美 深 町 楠 遺 跡

—天塩川改修事業の内部環境工事用地内埋蔵文化財発見調査報告—

昭和59年3月31日 発行

編 集 財団法人北海道埋蔵文化財センター
発 行

064 札幌市中央区南15条西17丁目

印 刷 株式会社 総 北 海

旭川市神楽岡14条5丁目 ☎0166(65)2101

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE EAST ASIAN LIBRARY

540 EAST 57TH STREET, CHICAGO, ILL. 60637

DATE RECEIVED

BY

FROM

NO.

REMARKS

